

スーパーロボット大戦Z 魔王たちの新たに歩む物語

有頂天皇帝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——これは、本来の歴史とは異なる歴史を辿ることになった多元世界の物語。ルルーシュとその仲間たちが望む未来を得るために同じ志を持ったものたちと共に世界の敵と戦うのである。

この小説はpixivでも投稿しています

参戦作品

無敵超人 ザンボット3

無敵鋼人 ダイターン3

無敵ロボ トライダーG7

宇宙大帝 ゴツドシグマ

宇宙戦士 バルディオス

太陽の使者 鉄人28号

六神合体 ゴッドマーズ

戦闘メカ ザブングル

装甲騎兵ボトムズ

超時空世紀 オーガス

機動戦士Zガンダム

機動戦士ガンダム 逆襲のシャア

新機動戦記ガンダムW

機動新世紀ガンダムX

∀ガンダム

機動武闘伝Gガンダム (NEW)

機動戦士ガンダムSEED DESTINY

機動戦士ガンダム00

機動戦士ガンダムAGE (NEW・機体のみ)

機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ (NEW)

超獣機神 ダンクーガ

獣装機攻 ダンクーガ ノヴァ

マクロス7

マクロス ダイナマイト7

マクロスF

真 (チェンジ!!) ゲッターロボ 世界最後の日

真マジンガー 衝撃! Z編

マジンカイザーSKL (NEW)

地球防衛企業ダイ・ガード

THEビッグオー

オーバーマン キングゲイナー

超重神グラヴィオン

超重神グラヴィオンツヴァイ

創聖のアクエリオン

コードギアス 反逆のルルーシュ

コードギアス 反逆のルルーシュR2

コードギアス 亡国のアキト (NEW)

コードギアス 双貌のオズ (NEW)

天元突破グレンラガン

劇場版 天元突破グレンラガン 紅蓮編

劇場版 天元突破グレンラガン 螺巖編

交響詩篇エウレカセブン ポケットが虹でいっぱい

スーパーロボット大戦OG (機体のみ)

鋼鉄神ジーク

機獣創世記ゾイドジェネシス

ゾイドワイルドシリーズ (ゾイドのみ参戦)

フルメタル・パニック

エヴァンゲリオン
アクエリオンEVOL
トップをねらえ
トップをねらえ2
翠星のガルガンティア
ナイツ&マジック
勇者王ガオガイガー
銀河機攻隊マジエステイクプリンス
STAR DRIVER 輝きのタクト
キャプテン・アース
革命機ヴァルヴレイヴ
アルドノア・ゼロ
ノブナガ・ザ・フール
コードギアス復活のルルーシュ
蒼穹のファフナーEXODUS
ガンダムSEEDASTRAY
機動戦士ガンダムUC
スーパーロボット大戦X・V（原作終了後）

目次

機体設定	1
破界編	
第1話 魔王の目覚める日	6
第2話 魔王の狂宴	18
第3話 白騎士と白い狼	29
第4話 箱庭の日常	36
第5話 革命の反逆者、ゼロ	41
第6話 我らの名は、黒の騎士団	51
第7話 動き出す世界	62
第8話 鉄華団とタービンスとザンネン5	70
第9話 テイワズ	81
第10話 信頼と覚悟と 前編	87
第11話 信頼と覚悟 (後編)	97
第13話 交差する明日	112

機体設定

黒の騎士団所有機体（破壊編時）

グラスゴー

無頼

サザーランド

月下

月下先行試作機

ガウエイン

紅蓮式式

アンフ

ヘリオン

リアルド

イナクト

フラツグ

ティエレン

ヒルドルブ

ゲシュテンペスト

ガンダムAGE―I

ガフラン

バクト

ゼダス

ゴメル

ウロツゾ

ゲシュペンスト

ガラム・ロディ

マン・ロディ

グレイズ

黒の騎士団ゾイド

スナイプテラ

ソニックバード

トリケラドゴス
ガブリゲーター
ガトリングフォックス
スコピア
パキゲドス
アンキロツクス
グラキオサウルス
ハンターウルフ
ガノンタス
ギルラプター
ステゴゼーゲ
ドレイパンサー
デステインガー
ジエノスピノ
オメガレツクス
デスレツクス
ラプトル
ラプトリア
デイロフォス
カプター
クワーガ
クワガノス
フアングタイガー
バーストル
キャノンブル
ナツクルコング
ドレイパンサー
デイメパルサー
キルサイス
ジエノザウラー
ジエノブレイカー

ブレードライガー
ワイルドライガー
ビーストライガー
ライジングライガー
オリジナル機体設定

〈GNドライブ付き〉

ガンダムルシファー

装甲材質 ナノラミネートアーマー

動力源 太陽炉 エイハブ・リアクター

武装 GNサーベル×2 GNバスターショット フェンリル

〈ビット兵器〉 GNミサイルポッド GNクロウ

ガンダムベリアル

装甲材質 ナノラミネートアーマー

動力源 太陽炉 エイハブ・リアクター

武装 対艦ソードメイス 刀×2 GNソード GNライフル

〈ガンダムフレイム〉

ガンダムアモン

装甲材質 ナノラミネートアーマー

動力源 エイハブ・リアクター

武装 ソードメイス パイルバンカー ナパーム弾 ヒートアツ

クス×2 滑空砲

ガンダムアスモデウス

装甲材質 ナノラミネートアーマー

動力源 エイハブ・リアクター

武装 スナイパーライフル ハンドガン×2 対MSナイフ

ソード

ガンダムアガレス

装甲材質 ナノラミネートアーマー

動力源 エイハブ・リアクター

武装 ソード コンバインシールド 炸裂弾専用ライフル

ガンダムパイモン

装甲材質 ナノラミネートアーマー

動力源 エイハブ・リアクター

武装 ハンマー シザーシールド 対艦ライフル ミサイルポツ

ド レールガン

ガンダムグラシヤラボス

装甲材質 ナノラミネートアーマー

動力源 エイハブ・リアクター

武装 ヒートアックス×2 ハルバード×2 滑空砲×4 パイ

ルバンカー×2

ガンダムフオカロール

装甲材質 ナノラミネートアーマー

動力源 エイハブ・リアクター

武装 スラッシュ・クロウ テイルソード レールガン ブレー

ド・ウイング

〈量産機(MS)〉

火影楼(かげろう)

装甲材質 Eカーボン

動力源 バッテリー

武装 チェーン・ソード アサルトライフル

アマツ

装甲材質 ナノラミネートアーマー

動力源 エイハブ・リアクター

武装 種子島 小太刀 太刀

ムシヤ

装甲材質 ナノラミネートアーマー

動力源 エイハブ・リアクター

武装 種子島 小太刀 太刀

ワルキューレ

装甲材質 Eカーボン

動力源 疑似太陽炉

武装 GNランス GNサーベル GNランチャー GNバズー

カ GNシールド GNライフル
ブリュンヒルデ
装甲材質 Eカーボン
動力源 疑似太陽炉
武装 GNライフル GNバズーカ GNランチャー GNサー
ベル GNシールド GNランス
〈量産機(KMF)〉
青嵐
推進機関 ランドスピナー
動力源 エナジーファイラー
武装 大型キャノン 腕部ガトリング砲×2 アサルトナイフ
ミサイルポッド スラツシュ・ハーケン
王鬼
推進機関 ランドスピナー
動力源 エナジーファイラー
武装 破岩刀×2 スラツシュ・ハーケン×2 アサルトライフル
夜叉
推進機関 ランドスピナー
動力源 エナジーファイラー
武装 太刀 小太刀 スラツシュ・ハーケン×2
シュバリエ
推進機関 ランドスピナー
動力源 エナジーファイラー
武装 ランス アサルトライフル MVS シールド スラツ
シュ・ハーケン×2

破界編

第1話 魔王の目覚める日

——かつて優しい世界を望んだ魔王は優しい世界を創るため、世界の全ての悪意を無くすためにその命を世界に捧げた。

——魔王のために戦っていた騎士は魔王が死んだ時、かつて魔王に騎士の忠誠を誓った神殺しの島でその命を自らの手で絶った。

——最後まで魔王の隣に立ち共犯者として共にいた魔女は魔王が大切にしていた箱庭にある教会で涙を流しながらただ祈りを捧げていた。

本来ならば彼らの物語はこれで終わるはずだった。しかし何の因果か彼らは別世界にて新たな生を得て再び世界に反逆するのだった。



別々の歴史を歩んでいた並行世界が「大時空震動」によって溶け合い、新たな「多元世界」が誕生してから20年。2つの月と2つの日本列島を持つこの地球は神聖ブリタニア帝国とアフリカ・ユニオンの「ブリタニア・ユニオン」、EUとOZの「AEU」、中華連邦とギヤラルホルンの「人類革新連盟」の三大国家や三大国家含め多くの国々が加盟している国連、非加盟国家のアザディスタン王国やアープラウなどの勢力に別れていた。そして宇宙では火星に移住したものや一部のコロニーが着々と戦力を強化しておりこの世界では未だテロや紛争が絶えず、また謎の怪物「次元獣」やイマージュ、インベーターなどが各所で暴れ回っていた。

そしてそのような時代で犠牲となるのはいつも決まったかのようになり、そんな存在を踏みにじって強者とほざくのは畜生以下の貴族や軍人などという存在である。

OZのトレイズ・クシュリナイダーやゼクス・マーキス、ブリタニア・ユニオンのグラハム・エーカー、人革連のセルゲイ・スミルノフ

のように貴族や軍人の中にはマトモなものも少数派ではあるが
いることはいる。

しかしA E Uの政治家たちは自国民の血が流れることで国民からの支持を失うのを恐れ他国民を生贄のように使い潰し、ブリタニア・ユニオンの貴族は支配した土地の人間『ナンバーズ』を玩具のように使い潰して壊すような豚共、人革連の中華連邦の大臣官は病で伏せている天子の代わりと称して自らの利益のために国を腐敗させていく。

そのようなことが許されてしまう世界だからこそそれに反抗するもの達もいるが殆どの者達は諦めてしまったかのように現実を受け入れてしまっている。

しかしそんな現実には抗い、求める理想を実現させようと戦い続けるものたちはその力を行使するものも現れるのだった。

——これは力ある者たちに対する反逆の物語である。



多元暦13年の夏、二つに分かれた日本の内南東側にある日本に対して宣戦布告と同時に戦争を仕掛けたブリタニア・ユニオン。日本側は旧型MS（モビルスーツ）であるゲイレルやアンフ、装甲車などの兵器を用いて迎撃しようとしたがブリタニア・ユニオン側は新たな人型兵器『Knightmare Frame』通称KMF（ナイトメアフレーム）の実戦投入の他新型MSフラッグとジェノアスを投入するなど圧倒的な軍力で日本を侵略するのだった。

そして日本の敗北の決定打となったのは当時日本内閣総理大臣でありタカ派としてブリタニア・ユニオンと徹底抗戦を唱えていた枢木ゲンブ首相の突然の自害によりトップがいなくなったことで、日本は混乱し、軍部と政府、関係各所はろくな連携を取れなくなり日本は力を出し切る事が出来ないままあつという間に敗北した。そして日本は結果的に国も名前も人種も自由もそれら全てを奪われ日本は『エリアー』と日本人たちは『イレブン』と呼ばれるようになってしまったのだった。

そしてブリタニアが宣戦布告以前、人質として日本に送られた3

人の皇族は戦後の混乱から消息不明となり、この戦争でその幼い命を散らしてしまったと目されていた。しかし、その情報も死亡したと目された3人の皇族に近い一部の関係者以外には、些事としてすぐに忘れ去られてしまうだろう。

——しかしこの時、とある魔女と騎士を除いて誰も知る由もないことだった。

「・・・ボクは・・・いや、オレは、ブリタニアを

・・・いや、この腐った世界をぶっ壊すっ!!!」

ブリタニアの侵攻により瓦礫と化した街並みの只中で、その紫水晶のような美しい瞳に燃え滾る焰を宿した、一人の「魔王」が再びその誕生の産声を上げた事を——

ブリタニア・ユニオンと日本の戦争の『極東事変』で実の妹である第12皇女リリーシャ・ヴィ・ブリタニアと第13皇女ナナリー・ヴィ・ブリタニアと共に、祖国に見捨てられた第11皇子ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは戦後、テロにより命を落とした母である皇妃マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアを後援していたブリタニア貴族アツシュフォード家に保護された後、本名を捨てルルーシュ・ランペルージと名乗るようになった。——その胸に自らの願いを抱きながら

ルルーシュは自らの願いを叶えるための手段として戦うことを選び、そのために必要な知識、資金力、軍事力を手に入れるためにその類稀なる優秀な頭脳を駆使するのだった。先ず知識を得るためにルルーシュはアツシュフォード家に保護されてから2年、政治・経済・軍事・科学等の多岐に渡る分野の他、世界情勢など様々なことを学びそれら全ての高度な知識を自らの血肉とした。

次にルルーシュが求めたのは資金。ルルーシュは資金確保の手段として株の売買をしてある程度の資金を稼ぎその資金を使いルルーシュは会社を設立しともに職につくことが出来ないが手先が器用な日本人たちを雇用することで良質な製品を製造しそれらを販売することで順調に資金を稼ぐことが出来た。

そして最後に軍事力。手に入れた資金でKMFやMSの大量生産したり、宇宙のデブリ帯にある半壊したMSやエイハブリアクターなどを回収して使えるようにしたりなどして機体や武器を集めることは順調に進んでいた。

そして秘密裏に関係を持っている『キョウト六家』の重鎮の1人である桐原泰三やコロニーの表と裏の両方で大企業として活動しているマフィア『テイワズ』のマクマード・バリストン等の協力者たちの力もあつて整備士やパイロットなども着々と集めることに成功し、ルルーシユの為の戦力『黒の騎士団』は徹底した情報管理の元で秘密裏に組織として完成に近づいていた。

——そして、時は流れ多元暦20年。エリアーに『魔王』と呼ばれる存在が表舞台に現れるのだった。



『エリアー』内、『トウキョウ租界』の一角にブリタニア人とイレヴンを区別しないオープンな校風の私立学校『アツシユフォード学園』が存在する。アツシユフォード家の当主、ルーベン・アツシユフォードが創立し理事長を務めるこの学園では生徒たちの個性を大事にしているためか他の学園では絶対に行わないようなイベントを生徒会長の指示の元月に数回はやっており、それがまた生徒たちに好評でこの学園の生徒たちは日々を楽しく過ごしていた。

そんな生徒の中で最も有名な人物として上がるのは誰かといえれば1人の男子高校生の名が挙がるだろう。高等部2年のアツシユフォード学園副生徒会長ルルーシユ・ランペルージの名を。

ルルーシユ・ランペルージ。端正な顔立ちと、その優雅な佇まいから彼の周りには男女問わずよく人が集まっていた。また外見こそ細く見えるものの、その実身体はしっかり鍛えているらしく、運動部からひっぱりだこ！というほどではないものの、容姿端麗・文武両道を地で行くルルーシユは正に非の打ちどころの無い『優等生』であり、彼を狙う女生徒は両手に余るほどいた。ただ彼の欠点として上げられるのは無断で授業を欠席したり、賭け事に手を染めるなど普通の学生らしくない事が上がるだろう。しかしそれでも彼の人としての良

さは損なわれないのか男女ともに生徒たちから慕われていた。

そんな彼は今日もまた友人であり同じ生徒会メンバーであるリヴァル・カルデモンドと共に賭けチェスの代理人としてトウキョウ租界にあるバーで貴族と戦った。ルルーシユは不利な盤面な上、一手20秒と短い時間で戦うことになったが8分30秒という短時間で圧勝した。

「いやーさすが貴族！プライド高いから支払いもしっかりしてるし言う事無いねー」

「相手の持ち時間も少なかったしな。それにぬるいんだよ貴族って。特権に寄生しているだけだから」

リヴァルは先程ルルーシユに敗北した時の貴族の引き攣った顔が面白かったのか笑いなからそんなことを言うがルルーシユは特に思うことも無いのかつまらそうにそう言った。ルルーシユにとつて満足のいくような相手に巡り会えないことに不満を感じるがそれを顔に出すことなくコインパーキングの支払いをしている時だった。

『只今より緊急ニュースをお伝えします』

街頭の巨大スクリーンに租界で起こったテロに関する報道が流され、訪ねようとしたことは記憶の彼方へと飛び去ってしまった。

「あーりやりや。こりゃ悲惨〜」

「テロ……か」

今朝のニュースから流されている一連のテロ事件とは、研究施設にテロリストが侵入し多くの人命と研究資産の一部を強奪した後、各地で連鎖的に発生している事件のことだ。ブリタニア人だけでなく、その他多くのナンバーズにも被害が出ているらしい。そして一連のあらましをキャスターが伝え終わると、このエリアー総督であるクロヴィス・ラ・ブリタニアの会見放送を流し始めた。

『帝国臣民の皆さん、そして勿論協力頂いている大多数のイレブンの方々も——』

しかしルルーシユはそれには目もくれず、パーキングの支払いを終えてさっさとリヴァルのバイクに取り付けてあるサイドカーへと乗り込んだ。

「あれ、ルルーシユ。会見は見ないの？総督の姿なんてめったに見れるもんじゃないけど……」

「画面越しに見る機会ならいくらでもあるだろう？そんなことより次の授業に間に合う方が大事だ……さ、早く出してくれ」

「りよーかい」

そして死者に対して黙祷を捧げる一般市民達を尻目にバイクは走り去っていく。

ルルーシユはサイドカーに乗りながらチラリと周囲を流し目に見る。律儀に黙祷を捧げる人も少なからずいるが、大半の人間は関係ないとばかりに歩み続けていた。黙祷を捧げない人間はAEUや人革連などの他国出身の人間だけではなくブリタニア・ユニオンの人間もいた。ブリタニア臣民の全てが皇族を敬愛している訳では無い。その権威と権力の大きさに恐れて表立って皇族を非難するものはないが、ブリタニア・ユニオンの国是である「弱肉強食」に対して反対する「主義者」と呼ばれる者たちはブリタニア人全体を見てもその数は決して少なくはない。本国から遠く離れた地であるこのエリア11にブリタニア人が多いのは、日本から大量に採れるエネルギー資源の1つ『サクラダイト』の利権目当てでやって来た貴族やそれらの仕事に関係するものたちだけではなく、『弱肉強食』というブリタニアの国是に嫌気が指して発展の著しい植民地エリアに逃げたのも理由の一つだろう。

「確かに競い合わせることで人は成長するのは確かだ。しかしそれも度が過ぎれば毒となり争いが起こる」

他者から奪うことに慣れたブリタニアはその欲を満たすことのみを考え自らの足を顧みない。軍の人間は汚職に塗れ、貴族や皇族は欲を満たすために他者を陥れ、その他の市民たちは危機感も抱かず他人事のように日々を過ごす。何奴も此奴も自らの利だけを求め他者を顧みようともしない——あまつさえ交通事故が起こっても助けを呼ばないで事故の様子を物珍しそうに写真すら取るのだ。これが皇帝の言う『前へと進む民族』の姿だと言うのならばどれほど愚かなのだろうか？

「尤も、そういう意味ならば俺も大して変わらないな」

名と身分を偽り、自分の心に蓋をしてブリタニアから隠れるように生き、その息苦しさを払うように憂き晴らしとして賭け事をして自己分もまた無気力・無関心な民と変わらないだろう。寧ろそれを理解していながら何もしない自分の方がタチが悪い。それでもルルーシュは何時か自らの望む世界を創り出すためにその日を悔いのないように生き、来るべき時のために備えるのだった。



「(そう思っていたのだがな・・・)」

交通事故を起こしたトレーラーに近寄り、コンテナから様子を見ようとしたルルーシュだが、突然動き出したトレーラーによってコンテナの中に入った。わかつている事はこのトラックは報道で流れていたテロリストのものだということとその証拠にコンテナの中には幾つかの火器や突起の着いたカプセル、そして旧式ではあるが第四世代KMFグラスゴーがあった。

現にそのグラスゴーはコンテナから出ると追っ手らしきブリタニア軍の武装ヘリや第五世代KMFサザーランドと戦闘した。グラスゴーがサザーランドに追い詰められている間にトレーラーはハイウェイからゲットーの地下を移動するもトレーラーのタイヤが溝に嵌りその衝撃でコンテナが開き、カプセルがあらわになりそれを発見した名誉ブリタニア軍人——ルルーシュの友である枢木スザクはカプセルのそばにいた人影を見てテロリストだと判断し取り抑えようとしたがその人影がルルーシュだとわかると取り押さえるのを止めた。

しかし、それと同時にカプセルが開き煙が漏れ始めたことに気づいたスザクは持っていたガスマスクを押し当てた。事前にミーティングで回収するものを毒ガスと聞かされていたスザクはカプセルから溢れているものを毒ガスだと判断しルルーシュだけでも守ろうとして行動だった。しかし、カプセルが完全に開き光とともに中身が顕になるとそこには気絶している拘束衣を纏った緑髪の少女がいた。ルルーシュとスザクは見て見ぬふりも出来ず少女の拘束を解いてい

る途中、クロヴィスの親衛隊に見つかってしまった。

親衛隊隊長は目撃者の存在を消すためにスザクにルルーシュを撃つように命令したがスザクはその命令を拒否した。そして命令を拒否したスザクはそのまま親衛隊隊長に撃たれてしまった。スザクが撃たれて倒れたのを確認すると親衛隊隊長は部下たちにルルーシュを射殺するよう命令し部下たちも射撃体制を取ろうとしたその瞬間、ルルーシュの後ろのトレーラーが爆発したことで親衛隊たちは爆発による爆風によってルルーシュと少女の姿を見失ってしまった。

しかし、これによって少女を回収するためにブリタニア軍は総督であるクロヴィスの命令によりシンジユクゲットーの殲滅を開始した。

それに対抗するようにシンジユクゲットーのレジスタンスたちとその協力者たちが民間人を守りながらブリタニア軍と戦っているが圧倒的物量の差でレジスタンスたちは追い込まれていた。

「くそ！どうして俺が巻き込まれなくてはいけないんだ!？」

ルルーシュは自分のとった選択によってテロに巻き込まれるとは予想出来なかったために急いで少女を連れて地下を走りながらモニカに連絡を入れようとするも電波が届かないためか中々連絡が取れないことに焦りを感じていた。そんなルルーシュを少女は冷静にじつと見ていた。

「このまま逃げ続けても見つかるのは時間の問題だ。それに例え俺たちが見つからなかったとしてもこのままではゲットーの人間は間違いなく皆殺しだ」

ルルーシュはそんな最悪な未来を簡単に予想出来てしまうだけに今の自分が情けなく思いながらもそんな最悪な未来を打開するための案を模索し始める。ルルーシュのその表情は見たものに恐れを抱かせると同時に美しさを感じるような悪人然としているが、ルルーシュの紫水晶の瞳にはそれと対になる輝きが宿っているのを感じた。

「――終わりたくないのだな？」

「なに？」

今まで一度も口を開かなかった少女がいきなり話しかけてきた。ルルーシュは少女を警戒しながらも少女の言葉に耳を傾けた。

「お前は余程生に執着があるようだな。力があれば生きられるのか？」

「当然だ。例え人として優れていたとしても力がなければ簡単に淘汰される」

ルルーシユは少女の言葉に答えながらかつて自分を捨てた父親のことを思い怒りを抱いた。母を守ることも出来ず自分たち兄妹を捨てたあの日からルルーシユは力を求めていた。ルルーシユには力があるが、今のままでは確実にいずれ死を迎えるのは確定的だった。

「——こいつはこの状況を打開出来る『何か』を持っているのか？」

ルルーシユが少女にそれを尋ねるより先に少女はルルーシユの手を握った。突然の行動にルルーシユは声を出そうとしたその瞬間、ルルーシユの頭の中に閃光が走った。

光が弾け、頭の中にいくつもの風景が脳に直接焼きつけるように鮮明に映し出される。数え切れないほど繰り返された戦争、軀となった我が子を抱いて泣き崩れる母親、虐殺が行われ血に染まった大地。人類の愚かしい闘争の歴史——そして赤い鳥を象った文様に巨大な遺跡群、人形のように立ち尽くし、紋章をその身に刻んだ大勢の巫女。

『これは契約——力を得る代わりにお前は私の願いを一つだけ叶えてもらう』

耳ではなく、脳に直接響くように聞こえる女性の声。これはあの少女のものだろうか、ルルーシユは叩きつけられるように移り変わる光景を目にしながら、まるで悪魔いや、魔女の契約のようだなとルルーシユはそんなことを考えた。

『契約すれば、お前は人の世に生きながら人とは違う理で生きることになる』

——人とは異なる理だと？

『異なる摂理、異なる時間、異なる命……王の力はお前を孤独にする——それでもお前は力を望むか？』

再び脳に様々な光景が焼きつけられる。

磔にされ、火あぶりにかけられる女性。壁に追い詰められ槍袵にされる貴族の男。誰もいない雪の降る平原で一人孤独に倒れ伏す少女——誰も悲しみと絶望と虚無を抱えている。これが与えられた力に負けた者の末路と言うのか……？

——下らない

力を得たから孤独になる？ 違う、力を得て他者を省みないから孤独になるのだ。

そうだ、彼等はそのブリタニアと同じだ。力を得て他人を見下し、全てが自分の思い通りになると思い込んだ哀れな道化。そうなたら最後、その者についていくのは同じく力を求めた奴や、おこぼれにあずかろうとする愚者だ。いずれその者達は力持つ者に対し反旗を翻すだろう。それが欲のためなのか、理念の違いかはともかく。

だが自分は絶対にそんな轍を踏みはしない！

「例えばどんな力を得ようとも、絶対に俺は屈しない——結んでやろう、その契約を!!」

その宣言と共にどこかで歯車が噛み合う音が鳴り、ルルーシユの左の瞳に赤い光が差し込み契約の証による力が宿るのだった。

「——ああ、やはりお前はそういう男だよなルルーシユ」

そんな優しさと嬉しさの感情が混ざったような少女の言葉にルルーシユは気づかなかった。



「——ようやく見つけたぞ」

地下の出口から出てくるルルーシユと少女を見ながら親衛隊隊長は銃を構えながらルルーシユに対してそう言った。親衛隊隊長の周りには彼の部下たちが同じように銃を構えて銃口をルルーシユに向けていた。

「よく頑張ったと言っておこう。流石は誇り高きブリタニア人だ。だ

が君の命運もここまでだ」

親衛隊隊長はルルーシユを褒めるような言葉を言うがその目は明らかにルルーシユを見下していた。

「なあ最後に一つだけ聞いてもいいか？」

「なんだ？」

親衛隊隊長は銃を向けながらも恐怖を感じずに普通に話しかけてくるルルーシユを不気味に感じながらも気の所為と判断しルルーシユの言葉を聞こうとした。

「貴様たちは撃たれる覚悟があるか」

「下らんな。強者である我々ブリタニア人が負けることなど有り得んのだからそんなことを考える必要などあるものか」

親衛隊隊長はルルーシユの言葉を聞いて鼻で笑った。与えられた特権と力を自分の力と勘違いし人を人と思わないような人種――

――ルルーシユが最も唾棄すべきタイプの人間だ。

「撃つていいのは撃たれる覚悟のあるヤツだけだ。しかし、お前たちからはその覚悟も理念すらも感じない。故に――――ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアが命じる。貴様たちは『死ぬ』」

ルルーシユの開かれた瞳の瞳孔が収縮し、変わりに赤い告死鳥が羽ばたき、親衛隊達の脳裏を犯す。

そしてその先に待つのは、理不尽な命に対する圧倒的な従属感だった。

「ククツ・・・クフフツ――――Yes, Your Highness
s!!」

親衛隊隊長と親衛隊たちは銃口を自らの額に首元に持つていき、笑みを浮かべながら彼等は引き金を引いた。

後に残ったのは狂気の笑みを浮かべた親衛隊の遺体とそれを冷たい目で見下ろすルルーシユだけだった。

「これが『王の力』か――――なるほど、確かに人の理とは完全に異なる力だな」

ルルーシユは赤い鳥のようなシンボルが浮かんでいる左目を抑えながら呟いた。

「——だが力は所詮力でしかない。俺は力に溺れる気などない……使いこなしてみせるさこの力を!!」

——全ては優しい世界を作るために

この日、シンジユクゲッターにて魔女との契約によって魔王が誕生したのだった。これによって世界の運命の歯車はまた動き始めるのだった。

第2話 魔王の狂宴

シンジユクゲットーは今、ブリタニア軍と保安部隊によって地獄と化していた。ナイトメアやモビルスーツの銃撃によって半壊していた建物が完全に崩壊し、辺りにはズタボロになったゲットーの住人である血まみれのイレブンの死体が無造作に転がっていた。ブリタニア軍と保安部隊は目的の毒ガスを確保すべくレジスタンスたちを殲滅しようと包囲網を敷きながら徐々に追い詰めていた。

その様子をG-1ベースの司令室にてモニター越しにエリアー総督にしてブリタニア・ユニオン第三皇子クロヴィス・ラ・ブリタニアと武官たちがその様子を見ていた。

「まだ毒ガスは回収できないのか？」

「も、申し訳ありません殿下。テロリストの中にガンダムが混ざっておりまして……」

「急げよ。もしテロリストどもに例のものを持って逃げられたりしたら我らは終わりなのだからな」

「ははっ！」

指揮官席に座っているクロヴィスはイラだちを隠さずに側近であるバトラー・アスプリウス將軍に毒ガスが回収出来ないことを尋ねるとバトラー將軍は額に冷や汗をかきながらもも応えた。

その時、G-1ベースのオペレーターの1人が何かを確認した。

「地下から8機のサザーランドと未確認モビルスーツが5機現れました！」

「なに、伏兵か？」

「映像、映します！」

オペレーターがそう言うともモニターに新たに現れた敵の映像を映し出した。そして浮かび上がった映像を見てその場にいた全員が驚愕した。

そこには肩の装甲が黒く塗装されている8機の第五世代KMFサザーランドと藍色の鋭角的な装甲の竜を彷彿させる3機のMS——ガフランとそのガフランより鋭角的な装甲をしている黒いM

S——ゼダス。

そして胸部に「A」のマークのついた白い装甲を纏ったりアウイング状のブロードアンテナを頭部につけているそれはソレスタルビーイングとコロニーからやって来たガンダムと呼ばれるモビルスーツと酷似しているMS——ガンダムAGEE-1がブリタニア軍のKMFサザーランド、KMFグラスゴー、MSリアルド、装甲車、戦闘ヘリと戦っていた。

「ガ、ガンダムだと・・・」

「まさか、ソレスタルビーイングがこの地にやって来たというのか・・・」

新たに現れた機体の姿をみた武官たちは顔を青ざめ動揺していた。あと少してテロリストたちを殲滅できると思っていたのにここにきて新たに現れたガンダムが現れたことに恐怖を感じていた。「狼狽えるな！例えガンダムだろうと数ではこちらが上回っているのだ！予備戦力を投入し敵を殲滅せよ!!」

「Yes, Your Highness!!」

クロヴィスの言葉を聞いた武官たちはその言葉によって冷静さを取り戻すとすぐに行動に移した。



シンジユクゲットーの中心部にてシンジユクゲットーのレジスタンスグループの扇グループに所属する紅月カレンが乗るグラスゴーを中心にコロニーのガンダムであるウイングガンダムのヒイロ・ユイ、ガンダムデスサイズのデュオ・マクスウェル、AT乗りの傭兵キリコ・キュービーのスコープドッグが集まっていた。

カレンの兄である紅月ナオトが残した作戦である毒ガスの奪取を行ったのだが作戦は失敗し毒ガスの入ったカプセルを乗せたトレーラーとはぐれてし待った上にトレーラーを運転している永田に連絡を入れても反応はなく、そしてブリタニア軍と保安部隊と戦闘に入ったことで連絡する暇もなくなった。

KMF、MS、ATなどの機体に乗っているもの達が戦っている間にカレンを除いた扇グループの面々が民間人を逃がすために行

動しているが敵の方が圧倒的に数が多いためにカレンたちでもカバーすることが出来ず今も尚多くのゲットーの民間人たちが死んでいた。

「扇さん！まだ民間人の避難は終わらないの!？」

『ダメだ！完全に包囲されているから俺たちだけならともかく民間人を連れて逃げる事が出来ない!!』

「そんな!？」

スラツシユハーケンで装甲車を破壊しながら民間人を逃がしている扇に連絡をするが扇から返ってきた答えは絶望的なものでカレンは悲痛な顔をした。

「おいおい！まだまだ敵さんがやってきやがるぞ!？」

デュオが驚きながらそんなことを言ったのでカレンは急いでモニターに目を向けるとそこにはカレンたちにライフルを構えながら8機のサザーランドが近づいてきていた。そしてライフルの射程に入った瞬間サザーランドは一斉に発砲した。それに気づいたカレンたちは銃弾を交わすために近くの建物を盾にして銃弾から逃れた。「ちくしょう！こっちはエネルギー尽きそうだっていうのによ!!」

デュオはそう悪態をつきながらもガンダムデスサイズの左腕のバスターシールドをサザーランドに向けて放ちながら頭部バルカンを放つ。

「このままでは奴らを倒すよりも先にこちらの機体の燃料と弾薬が尽きるぞ」

キリコはスコップドッグのヘヴィマシンガンを放ちながら近くまで接近してきたサザーランドに対してアームパンチで沈黙させながら答えた。

「.....」

ヒロは無言で淡々とマシンキャノンでサザーランドを破壊した。そして襲ってきた全てのサザーランドを沈黙させたことでカレンたちは一息ついた。長時間の連続戦闘を行い続けていたため全員が少なからずの疲労を感じていた。

そしてその隙をついたかのようにカレンの背後にサザーランド

がライフルを連射しながらヒートアックスを構えて接近してきた。カレンは反応するのが遅れてしまいライフルごと右腕を破壊されてしまった。

「きゃああっ!?!」

「カレン!?!くっ!?!この野郎!!」

右腕が破壊された衝撃でカレンは悲鳴を上げ、デュオが加勢しようとしたが上空から襲ってきたリアルドのソニックブレイドで斬りかかってきたのをビームサイズの柄で受け止めたことで動きを止めざるを得なかった。

キリコとヒイロの方にも近接武器を構えた上空と地下から現れたリアルドとサザーランド、グラスゴーに接近を許しそれぞれビームサーベルとヘヴィマシンガンで対処するが、その間にライフルを連射していたサザーランドはカレンのグラスゴーのコックピット目掛けてヒートアックスを振り下ろそうとしていた。

「舐めるなアアア!!」

カレンはそう叫びながらスラッシュハーケンを飛ばそうと操縦桿を動かそうとした瞬間、カレンのグラスゴーの後ろからサザーランドの胴体に向けて投げられたビームサーベルがそのままサザーランドを貫きサザーランドは仰向けに崩れ落ちた。

「今のは一体……」

カレンは突然の援護のような攻撃が何者によるものなのかを確認しようと攻撃が飛んできた方向を見ようとした瞬間、カレンのグラスゴーの横を白いMSがサザーランドに刺さっているビームサーベルを抜き去りながら通り過ぎた。

「えっ!?!」

カレンは通り過ぎたMSが味方であるヒイロとデュオが乗っているガンダムがと酷似していることに驚いて通り過ぎたMSを目で追った。

白いMS——ガンダムAGE-1はビームサーベルを2本構えながらライフルを連射しながら近づいてくる2機のグラスゴーの攻撃をかわしながら近づくとガンダムAGE-1は2機のグ

ラスゴーを通り過ぎさりながら両断した。

『この野郎!!』

『よくもやりやがったな!!』

グラスゴーがやられた姿を見た友軍のリアルド2機が上空からリアライフルをガンダムAGE-1に向けて放つがガンダムAGE-1はシールドでその射撃を防ぎながら腰につけているドツズライフルを構えるとそのまま引き金を引きライフルの先端から放たれた螺旋状のビームが1機のリアルドを貫いた。

『リチャード!?おの——』

友軍機が破壊されたことに動揺した隣のリアルドが声を荒らげながらソニックブレイドを構えようとした瞬間、背後に現れたゼダスのゼダスソードによってリアルドの胴体を貫かれリアルドは爆散した。

「すごい……」

カレンは突然現れた2機のMSがあつという間にブリタニア軍の機体を破壊していったその姿を見てそんな言葉しか出なかった。

そしてゼダスとガンダムAGE-1はカレンたちの正面の位置に着地した。カレンたちは何時でも行動できるように警戒していると仲間の永田の通信コードを通して音声通信が入った。

『——貴様たちがレジスタンスか』

通信から聞こえてきたのはそんな感情も熱も感じないような機械的な声だった。

『私たちのことは詳しく話せないが我々もまた君たちと同じようにブリタニアに反抗する勢力であることだけは言っておこう』

通信から聞こえてくる高圧的な機械音声にカレンは眉間に皺を寄せた。敵か味方かも分からない相手からの高圧的な言葉なので嫌な気分にもなるだろう。ましてや仲間の通信コードを使っているのだから怪しまないというのも無理だろう。

「巫山戯るな!自分たちのことも話さないでそんな言葉を信じられるか!!」

『だが君たちに今選択出来ることは2つだけだ。私たちと協力してブ

リタニア軍と戦うか、このまま全てを失うか』

声に対して怒鳴るように言い返したカレンだが、その声は現実を言うかのような言葉が返されたことでカレンは何も言い返すことも出来ず唇を噛むことしか出来なかった。

「……………いいだろう。お前の話にのってやろう」

「おいヒイロ!？」

バスターライフルの銃口をゼダスとガンダムAGE-1に向けていたヒイロは銃口を下げながらそう言ったことにデュオは驚いた。

「どの道このままでは俺たちの機体がもたない。なら少しでも戦力は増やした方がいい」

「そりやそうだけだよ、もしこれが敵の罠ならどうするつもりだよ」

「その時はコイツらを殺すだけだ」

ヒイロがあっさりと言うためにデュオは反論しようにもこれは無駄だと感じたのかため息を吐いた。

「ま、お前の言う通りだよな。キリコ、お前はなんだよ?」

「……………」

デュオはヒイロの意見に賛成する形になり、先程から何も言わないキリコに話を振るとキリコは無言で目をつぶっていたが、考えが纏まったのかキリコの考えを言った。

「俺はカレンたちに雇われている傭兵でしかない。決定するのはカレンだ」

「だとよ。どうするよカレン?」

デュオにそう言われ、カレンは難しい顔をして悩んだ。しかし、カレンは仲間と自分たちが作戦を実行したことで巻き込んでしまった民間人を助けるために

「わかったわ、あんたの提案を受け入れる。けどもしあんたが私たちを裏切るような真似をしたら……………」

『もちろん分かっているさ。では我々はこの場を離れるがそちらもそろそろ補給した方がいいだろう』

そう言い終えると通信は切れ、ゼダスは飛行形態に変形しそのま

ま飛行してどこかへ去っていき、ガンダムAGE-1はビームサーベルを腰に戻すとシールドとドツズライフルを構えてその場を去っていった。

カレンたちは姿が見えなくなるまで警戒を解くことはなく2機の姿が見えなくなつてようやく構えていた武器を下ろし、一旦補給をするためにカレンたちのアジトへと戻るのだった。

そしてアジトへと戻ったカレンたちはそこでまた驚きの出来事があることをまだこの時は知る由もなかった。



シンジユクゲットー上空にて戦場の様子を見るように飛んでいるゼダスのコックピットの中でルルーシュはブリタニア軍と治安警察の動きを確認しながら自身の配下と先程協力関係になったレジスタンスメンバーに対して指示を行っていた。

「Q-1はそのまま指定位置まで敵を引きつけろ。P-1、P-4、P-7はQ-1が引き付けた敵を壁越しに撃ちまくれ。翼持ちはゲットー北部のビルを狙撃。タイミングは5秒後。黒いモビルスーツはその鎌で建物ごとポイント36を攻撃」

ルルーシュはギアスの力で奪ったブリタニア軍の予備戦力として用意されていたサザーランドをレジスタンスに渡すことで指揮権を獲得した。更にギアスの力で操られているブリタニア兵士とルルーシュの指揮で動くレジスタンス、そしてルルーシュの配下によってブリタニア軍と治安警察は完全に混乱していた。

「これでいい。レジスタンスどもが俺の指示に従うことで不足していた駒も何とかなった。そしてブリタニア軍にとつて反撃される事など予想することも出来ないから恐らく今奴らは混乱していることだろう」

ルルーシュは笑みを浮かべながらコックピットのモニターに映っている戦況を見ていた。ここまで上手くいっているのもルルーシュの指揮官としての実力や機体性能やパイロットとしての腕が優れている者がいることも要因であるが、一番の要因はエリア11在住のブリタニア軍が軍としてまともに機能していないことが上げられ

る。

エリアーの総督であるクロヴィスは芸術などの文化の才に秀でているのだが政治や軍事の才能は人並み程度しか持つておらず、それを分かっているからこそエリアーにいる殆どの貴族や軍人は隠れて自らの欲を満たすために行動しているため真つ当な貴族や軍人は余りいない。

更に反抗勢力であるイレブンたちが使う兵器の殆どが旧式の機体であるグラスゴーやアンフ、戦車に歩兵用の武器で、その上普通のレジスタンスではMSやKMFなどを手に入れることも出来ない。基本的には歩兵用装備で戦っているのでブリタニア軍人にとってレジスタンスたちとの戦いは一方的な蹂躪でしかない。彼らは反撃されることに慣れていないことが大きな原因と考えられる。

「既に奴らの包囲網は崩壊している。あとはイレギュラーさえなければこのままの調子で勝てるだろうが……さて」

戦況はルルーシュたちが優勢になってきているのにルルーシュの顔は厳しい表情だった。

「(戦場に想定外の事態は付き物……それにこれまでの経験から言つて、まだ何かありそうな気がする)」

ルルーシュにとって今回が初の実戦であるが、普段ルルーシュは毎日何十もの戦闘シミュレーションを行っており、単騎での敵陣突破や時間内に指定エリアの制圧、突然の敵の援軍など色々な無茶苦茶な戦闘シミュレーションを経験しており、その経験を積んだルルーシュからしてみれば今回の戦闘は拍子抜けにも程があった。

「(このまま何事もなければいいのだがな……)」

しかしルルーシュの懸念も虚しく現実是非情でありルルーシュの希望は叶うことなく、明確な脅威がルルーシュたちの前に立ちはだかるのだった。



『スザク君、マニュアルは読んだ?』

「おおよそ……ですが」

『流石ね。シミュレータの訓練とはいえ歴代TOPクラスの成績を叩

き出しただけの事はあるわ』

G-1ベースの傍にある医療用車両。親衛隊隊長に撃たれたスザクだったが運良く持っていた古い懐中時計のおかげで防護スーツ内での跳弾を防ぎ気絶程度ですみ、そこで治療を受けていたスザクは、一般騎士の着るパイロットスーツとは違った意匠の施されたスーツに身を固めていた。

圧縮空気を注入し、準備が整うと車両の扉を開けて外へと姿を晒すスザク。辺りはテロリストたちによって追い込まれていることで騒然としているが、スザクの耳にその音が入ってくることは無かった。

「あの、さっきの話ですけど・・・」

『え・・・？ああ、ありえるけど、可能性はゼロに近いわよ？』

「でも、ゼロではないんですよね」

『それはそうだけど・・・でも、無茶だけはしないでほしいの。新システムで脱出機構が外されているし』

「はい、分かっていますセシルさん」

これから赴く場所は血に濡れた戦場。それも味方の援護はなく、たった一人でしか戦う事を許されない孤高の道。聞けば今回の出動はテロリストを殲滅しろというものだが、そのテロリストは何故か軍のKMFを鹵獲してこちらを攻撃している。その上彼らには正規軍を手玉に取るような優秀な指揮官もついているらしい。

それを新鋭機とはいえたった1機で制圧せよというのだから、これがいかに困難な任務かは誰しもが分かっている。

しかしやるしかないのだ。自分の生涯で得た唯一の友と見知らぬ少女を助ける為に。

そして己の目の前にはそれを可能とするだけの力を秘めた『剣』が主を待つように鎮座していた。

「これが・・・」

『そう、私達特別派遣嚮導技術部による試作嚮導兵器——ランスロット。世界で唯一の第七世代ナイトメアフレームよ』

純白の装甲には金色の縁取りが施され、頭部はこれまでのナイトメアとは違ったツインアイ。各所のボディラインもこれまでのナイト

メアとは違い流線型が盛り込まれており、兵器と言うよりもまるで白亜の甲冑を纏った騎士の様にも見える。加えて胸部にとりつけられた赤い宝石の様なものが、それをまるで芸術品のように象らせていた。

「んじゃあスザクくん、そろそろ初期起動に入ろうか」

主任であるロイドがそう言うと同時にランスロットを搭載した車両が俄かに慌ただしくなる。

何しろ起動はできても、まともにパイロットがおらず満足に動かせなかつたままでの出撃命令である。スペック上では今までのKMFを赤子の手を捻えるほどの力を持っているが、それもパイロットとなるデバイサーがいなければ宝の持ち腐れだ。尤も、ロイドはそんなことを心配する必要は無いというほどいつも通りに飄々としているが。

『コアルミナス相転移開始——ブレイズポイントの展開可能領域まで20秒』

『デバイサーのZ-01エントリーを確認——マン・マシーンインターフェイスの確立を確認』

『ユグドラシル共鳴を確認——拒絶反応微弱——デバイサーストレス反応微弱——全て許容範囲内です』

「ここまでではデータ通り……」

この後、大抵のデバイサーはユグドラシルドライブのフィードバックの影響で満足に動かす事が出来ずに終わっていた。

果たして今回はどうなるのか……トレーラーにいるほとんどが固唾を飲んで見守る中、ランスロットに繋がっていた電送ケーブルがパージされ、発進状態に入った。

そしてドライブ内のコアルミナスがフル回転し、白亜のボディの全身にエネルギーが行き渡り、ランドスピナーが地面に接するとタイヤが猛スピードで回転、アイドリング状態に入る。

そして一瞬の静寂の後——

『ランスロット——発進！』

覚醒した白き騎士はたった一騎で戦乱へと飛び込んでいった。

そしてランスロットが発進したのをG-1ベースから獣の耳を思

わせるような銀髪の褐色肌の男が口笛を吹きながら見ていた。

「中々いい機体じゃねえか。流石はロイドが造った機体だけはあるな」

銀髪の男——ウルフ・エニアクルは獰猛な笑みを浮かべながら同僚のロイドを褒めながら自身の愛機であるジェノアスカスタムに乗るために格納庫へと向かうのだった。

「————せっかくだ。俺様も暴れさせてもらおうじゃねえか」

ブリタニアの白き騎士と白い狼。今、シンジユクゲットーという戦場にルルーシュたちの明確な驚異として迫ろうとしていた。

第3話 白騎士と白い狼

シンジユクゲットーのレジスタンスメンバーははつきり言っ
て調子に乗っていた。今までブリタニア軍に一方的にやられていた彼ら
からしてみれば今回で初めてブリタニアに対して優勢になっている
という事実は嫌でも気持ちが高まるものだろう。

「へっー見たかよブリキ野郎共が！」

『調子に乗りすぎるなよ玉城』

謎の人物に渡されたサザーランドのコックピットの中でレジスタ
ンスメンバーである玉城真一郎がブリタニア軍のサザーランドを撃
墜した事で浮かれたのを隣にいるサザーランドに乗っている玉城の
仲間である南佳高が注意する。そして周囲に敵がいなくなったこと
で一息つこうとした2人だが直後、コックピットのモニターに急接近
してくる1機のKMFの反応が映った。

「あん？なんだ、サザーランドの反応にしちゃ——」

玉城は通常のサザーランドよりも移動速度が速い反応に疑問に感
じたのと同時に玉城が乗っていたサザーランドの頭部を急接近して
きたランスロットがその勢いを利用して殴り、玉城のサザーランドは
頭部を破壊されそのまま仰向けに倒された。

『この野郎——!!』

玉城がやられたのを見た南はサザーランドのアサルトライフルを
ランスロットに向けて放つがランスロットは両腕からエネルギー装
甲システム『ブレイズ・ルミナス』を展開して全ての銃弾を受け止め
つつ近づいてきた。

『な、銃弾を弾いただと!?!』

南はライフルの銃弾を弾きながら近づいてくるランスロットに恐
怖し動きを止めてしまい、その隙をついたランスロットは前腕部から
放った2基のスラッシュハーケンによって南のサザーランドの頭部
と腰部を破壊され南は脱出装置を起動した。

コックピットが無くなったことで南が乗っていたサザーランドは
崩れるように倒れそれをランスロットに乗っているスザクは無事に

相手が脱出してくれたことにコックピット内で一安心していた。

「よし、やれる。このランスロットなら1機で――」

っ!？」

スザクはそう言うのと敵を無力化すべく踵を返そうと瞬間、悪寒を感じる。とランドスピナーを回転させその場から離れるとランスロットが先程までいた位置にバスターライフルが放たれた。

「今のはっ!？」

スザクはバスターライフルが放たれた方向を見るとそこにはバスターライフルを構えているウイングガンダムとビームシザーズを構えるガンダムデスサイズ、ヘヴィマシンガンを構えるスコープドッグ、そして片腕が破壊されたライフルを構える赤いグラスゴーの姿があった。

「奴が新型のKMFか」

「今までのKMFよりも人間に近い姿をしてるな」

ヒイロとデュオは警戒しつつランスロットを見ていた。これまで戦ってきたサザーランドやグラスゴーなどのKMFとは異なる姿。そして見たことも無い武装をしていることからブリタニアの新型KMFと予想していた。

「とにかくコイツを何とかしなきゃみんなが危ない」

ランスロットによつて既に多くの仲間を倒されているカレンは何としても倒そうとしていた。

「気をつけろ。敵は奴だけではない」

キリコがそう言うように、このエリアに向けてサザーランドやグラスゴー、装甲車、武装ヘリ、そして頭部をクリアブルーのバイザーで覆っている薄い赤と白で塗装されているMS――ジエノアスが迫ってきていた。

「んじゃ！派手にぶちかましてやるか!!」

ディオのその言葉を合図にヒイロたちは攻撃を開始した。ヒイロのウイングガンダムがランスロットの相手をし、デュオ、カレン、キリコは先に迫ってくるサザーランドの相手をする形となった。

「任務、開始!!」

ヒイロはそう言うとうイングガンダムを噴かせて一気にランスロットの近くまで接近するとビームサーベルをランスロットに振り下ろすがランスロットはその機動性を活かしてかわすと同時にヴァリスを放つ。ウイングガンダムはシールドで受け流しつつ上空へと逃げるとマシンキャノンで攻撃した。

「くっ！」

ズクは上から攻撃をかわせる攻撃はかわしつつかわしきれない攻撃はブレイズ・ルミナスで防ぎつつヴァリスとスラッシュハーケンを放つ。ウイングガンダムもまたシールドとビームサーベルで防ぐ。

互いに攻撃と防御を繰り返し状況は拮抗するようになったウイングガンダムとランスロット。

「オラオラー！死神様のお通りだぜ!!」

ガンダムデスサイズはビームサーズで次々と敵を切り裂いていく。それに続くようにスコープドッグとグラスゴーはそれぞれへヴィマシンガンとアサルトライフルを放つ。

ブリタニア軍も対抗するようにガンダムデスサイズのビームサーズに対してジェノアスはヒートスティックで対抗し、サザーランド、グラスゴー、装甲車、武装ヘリはそれぞれの機体が使える射撃武器で応戦していた。

そしてヒイロたちがランスロットたちと戦っているのと同じように別の場所でガンダムAGE-1たちが戦っていた。



ヒイロたちが戦っているのは反対方向のエリアにてガンダムAGE-1はウルフ・エニアクルが乗る狼の顔のエンブレムがついたシールドを持つ白いジェノアス——ジェノアスカスタムと戦っていた。

「オラオラー！とつととくたばりやがれ！」

ジェノアスカスタムは2本のヒートブレードで斬りかかってくるのをガンダムAGE-1もまた2本のビームサーベルでその攻撃を受け流す。

ガンダムAGE-1の援護をしようと3機のガフランは尻尾部分

のビームライフルを構えて放とうとしているがガンダムA G E ー1とジェノアスカスタムの距離が近すぎるために狙い撃つことが出来ないでいた。

「くらいなーウルフファング!!」

ウルフはそう叫びながらジェノアスカスタムは下からヒートブレードをXの字で斬るように攻撃を仕掛けたが、ガンダムA G E ー1はビームサーベル1本でその攻撃を受け止め、もう1本のビームサーベルをジェノアスカスタムの頭部に向けて振り下ろすが、既んでのところで体を逸らしたことによりジェノアスカスタムは右腕を破壊されたが機体が一刀両断されることは防ぐことが出来た。

トドメを刺そうとガンダムA G E ー1はヒートブレードを抑えていたビームサーベルをコックピットに向けて突き刺そうとしたが、ジェノアスカスタムは背中のススターを噴かせると一気に距離をとった。

「流石にこれ以上の戦闘は厳しいか。ここは退かせてもらおうが次は負けねえからな!」

ウルフはそう叫びながら後退していき、それに対して3機のガフランが追撃しようと尻尾部分のビームライフルを放とうと構えようとした時、突如戦場と化したシンジユクゲットー全体に1つの通信が響き渡った。

『エリアー総督にして第三皇子、クロヴィス・ラ・ブリタニアの名の元において命じる。全軍直ちに停戦せよ!』

「なに?」

その通信を聞いてウルフは思わず眉をしかめた。クロヴィスの事を知っているだけに停戦を宣言したことに驚きを隠せないでいた。

『.....』

そして同じように通信を聞いたガンダムA G E ー1とガフランは展開していた武装を解除するとその場から去っていった。

そして別の場所で戦闘していた肩の装甲を黒く塗装していた8機のサザランドもまた同じようにアサルトライフルやランスなどそれぞれの武装をしまおうと後退していった。

「停戦命令？一体どうして・・・」

カレンもまた突然の停戦命令が出たことに驚き、思わず戦闘をやめ足を止めてしまう。そしてそれはカレン以外のレジスタンスメンバーとブリタニア軍もまた相對したまま通信を聞き続けていた。

『建物等に対する破壊活動も止めよ。負傷者はブリタニア人・イレブンに関わらず救助せよ!!』

そのクロヴィスの命令にブリタニア軍と治安部隊は動揺し、どうすればいいか迷っていた。あまりにも今までに前例のない命令であるためにすぐに行動に移すことが出来ないブリタニア軍と治安警察と違いカレンたちレジスタンスメンバーはすぐに後退していった。

「ッ!?待て!!」

スザクはそう言いながらヴァリスを構えようとしたが、クロヴィスの命令を無視することも出来ずただ黙ってレジスタンスたちが去っていくのを見ることしか出来なかった。

『クロヴィス・ラ・ブリタニアの名において命ずる！直ちに停戦せよ！これ以上の戦闘は許可しない!』

こうしてシンジユクゲッターでの戦いは幕を閉じたのであった。



G-1ベースの司令室。本来ならば武官やオペレーターなどがいるはずの場所だが、その場所に今いるのは指揮官席に座って顔を青ざめているクロヴィスとそのクロヴィスに銃を向けているルルーシュだけだった。

「こ、これでいいかいルルーシュ・・・?」

「ええ上出来ですよ兄上」

震えながら言うクロヴィスに対してルルーシュは笑みを浮かべながら答えるもルルーシュの持つている銃はクロヴィスに向けたままだった。

「い、言われた通りにしたんだからそろそろ銃を下ろしてくれないかいルルーシュ。久々の兄弟の再会なのだからそんな物騒なものには相応しくないだろう?」

「何をおっしゃいますか兄上。我らブリタニア皇族は親や兄弟、姉妹

による数多の血塗られた醜い歴史でしょう」

クロヴェイスの懇願を冷たく一蹴するルルーシユ。母方が違うとはいえ数年ぶりの兄弟の再会だというのにルルーシユのクロヴェイスを見つめる眼には肉親の情など一欠片も感じられなかった。

一般兵士の服装に身を包んだルルーシユは銃の引き金を指から離さないままクロヴェイスに銃口を向けていた。ルルーシユが部下を引き連れず単身クロヴェイスの元へと危険を冒してまで乗り込んできたのはある目的があるからだ。それは――

「貴様に聞きたいことは唯一つ。俺たちの母、マリアンヌ・ヴィ・ブリタニアの命を奪うように命じたのは貴方ですか？」

「ち、違う!!私に断じてマリアンヌ様の死には関係していない!!」

クロヴェイスは予想外の質問に驚きはしたもののそれを否定する。ルルーシユの母であるマリアンヌは7年前アリエスの離宮にて表向きにはテロリストによって暗殺されたと言われているが皇帝であるシャルル・ジ・ブリタニアの指示によって調査を打ち切ったために真相は明らかになっていない。

ルルーシユが戦う理由は優しい世界を創る事だがそれと同じくらいに母マリアンヌの死の真相を知ることでもある。

「なら貴様が知っていることを全て話してもらおうか。俺の前では誰も嘘をつけない」

クロヴェイスと話を続けても無駄だと感じたルルーシユはクロヴェイスを見据えるとルルーシユは右眼に宿った力を解放した。

「さあ答えてもらおうか、『母さんを殺したのは誰だ』」

ルルーシユの右眼から赤い鳥が浮かび上がるとクロヴェイスの表情は先程までの恐怖が消えると瞳の周りが赤くなり感情を失くしたかのように無表情になるとルルーシユの問いに答えた。

「第二皇子シユナイゼルと第二皇女コーネリア。彼らが知っている」「アイツらが首謀者なのか？」

「.....」

「そこまでは知らないか.....」

ルルーシユはクロヴェイスからこれ以上情報は得られないと思って

いるとクロヴェイスの瞳の周りの赤が無くなると瞳にか輝きが戻り再びクロヴェイスは怯えた表情をした。

「本当に私じゃない！私は本当に何も知らないんだ！」

「わかったよ、しかし……貴様の行動の結果によって罪の無い人々を多く殺した。その罪は償ってもらおう」

ルルーシユはそう言いながら銃をクロヴェイスの額に突きつけた。

「や、やめろ！腹違いとはいえ、実の兄だぞ!？」

「綺麗事だけでは世界を変えることは出来ない」

クロヴェイスは必死になってルルーシユに撃つことを止めさせようとするがそれも虚しくルルーシユは引き金を引くのだった。

第4話 箱庭の日常

エリアーのトウキョウ租界にある学園の1つであるアツシユフォード学園。自由な校風で知られるこの学園は生徒会長であるミレイ・アツシユフォードの突拍子ないイベントに振り回されることが多いが生徒たちはそれを楽しんでいた。

そして今日はミレイを筆頭とした生徒会メンバーは生徒会室にて部活動の予算審査の書類を処理するのだった。その最中にルルーシユが居眠りしそうになったのを気づいたミレイが資料を丸めて軽く叩いた。

「こらあルルーシユ!! 貴方寝てたでしょ?」

「だからって頭を叩かないでくださいよ」

「俺を置いていった罰だって」

頭を叩いたミレイに対してルルーシユは文句を言うが、それをリヴアルが茶化しながら指摘する。

「そういえば昨日はどうして生徒会に来なかったの?」

「いや、それは……」

ルルーシユにそう聞いてきたのは生徒会メンバーの1人であるシャーリー・フェネットでルルーシユはそれに対して正直に話すこともできないので口ごもってしまった。

「はいはい、話を脱線しないの。今は部活の予算審査。とつとと済ませないと何処も予算が降りないでしょ?」

ミレイのその言葉に奥の方でパソコンを操作していたニーナ・アインシュタインが反応する。

「そんなことになったら……」

「馬術部なんてマジ怒り! また此処に乗り込んで来たりして!」

ミレイはリヴアルのその言葉に思わず顔を引き攣らせた。そしてちようど窓の外で馬術部が馬に乗って移動していた。

「もうリヴアル! 嫌なことを思い出させないでよね!!」

「後片付けが大変だったもんね……」

「そんなことがあったんですね……」

嫌なことを思い出させたりヴァルに頬を膨らませながら生徒会メンバーのルイス・ハレヴィは文句を言い、それに同意するかのように同じく生徒会メンバーの左慈・クロスロードは苦笑しながら言うのだった。そんな出来事があったことに先日生徒会に入ったリリーナ・ドーリアンは驚くのだった。

「とにかく！時間ないんだから無駄話してないでさっさとやるわよ！！」

「だったらせめてもう一日早く思い出してくださいよ」

ミレイが生徒会メンバーにそう気合いを入れるように言うがシャーリーはもう少し早く気づいてくれたらこんな焦ることもなかったのにと文句をいう。

「もう一日遅くが正解。諦めがつく」

「いい考えだ。今からでも」

リヴァルがそうシャーリーを茶化すとルルーシュもそれに同意しようとする、ミレイが両拳を握りながら急に声を張り上げた。

「ガアーーツ!!」

そのミレイのガッツの掛け声の大きさに驚きルルーシュたちはビクツとした。

「またガッツの魔法ですか？」

「はあーい。貴方たちは頑張りたくなる」

「かかりませんよそんなインチキ魔法」

「あははは……」

リヴァルはいつものミレイのガッツの魔法に苦笑いをし、ミレイのガッツの魔法の対象になったルルーシュはそれを否定し左慈は何も言えずただ苦笑することしか出来なかった。

「会長！私、かかったことにします！」

「私もそうします！」

「うーん！肉体派は素直でよろしい！」

「鍛えてるって言って頂かないと……」

シャーリーとルイスがミレイの言葉に素直に従い、ミレイがそれを褒めるとシャーリーは軽くガッツポーズをした。

調整が行われていた。

長時間の戦闘とランスロットやジェノアスカスタムなどの強敵との戦いによってサザーランドは装甲を所々破壊され、ガフランなどのMSは表向きの損傷はないが弾薬とエネルギーの補給を行っていた。

「龍騎くん。前回の戦闘データをAGEシステムに入力したいからAGEデバイスを貸してくれないかな」

「わかりました」

整備長の柳原源治がガンダムAGE-1のパイロットである東龍騎にそう言うのと龍騎はAGEデバイスを手渡した。

このガンダムAGE-1には『AGEシステム』と呼ばれるシステムが搭載されており、ガンダムAGE-1が戦闘を重ね続けることによってその戦闘データを元に『AGEビルダー』で新たに武器や武装、新型機などを開発することが可能である。

そのため戦闘が終了する度にこうしてAGEデバイスから戦闘データをとっていた。

「にしても急な出撃命令とはな。予定なら行動するにしても早くて3ヶ月後とか言っていたのにな」

「仕方ありませんよ。あの人も予想外の事だったから予定が狂うこともありますよ」

源治は龍騎からAGEデバイスを受け取りながらルルシユに対して苦笑しながら軽い愚痴のようなことを言うのと龍騎も苦笑するか無かった。

元々ルルシユの予定としてはソレスタルビーイングやコロニーのガンダム、ダンクーガ、Dr.ヘル、イマージュなど様々な存在が活動し始めたので行動を起こすにしても早くて2、3ヶ月後を予定していたためほとんどの機体が今だ調整中あるいはエリア1以外の場所で活動しているなどの理由から用意できた機体が今回出撃した機体だけだったのだ。

「とりあえず機体の整備は俺たちの方でやっておくからお前らパイロットは体を休めて何時でも出撃出来るようにしとけ」

「わかってます」

源治と龍騎はそう言っただけで会話を終わらせると源治は機体の整備に戻り、ヒロトはパイロットたちに用意された個室で休憩しに行った。「にしても奴さんも中々強力な機体を用意してるみたいだな」

源治はガンダムAGE-1の整備を行いながら前回戦闘したランロットとジェノアスカスタムの戦闘データで見た内容を思い出すと呟いた。

今までのKMFとは性能が格段に違うランロットと量産機であるジェノアスの改良機にしてパイロットの腕がエース級といったその2機との戦闘は否が応でもブリタニア・ユニオンに対する警戒が嫌でも上がるものだった。

その上、他の三大国家である人革連やAEUもまた同様であり、他にもイマージョや次元獣などの未知の生物、Dr. ヘルやギシン星人などの世界征服を企む悪党なども敵は沢山いる。

無論、それらの敵とも戦えるようにルルーシュは時間をかけて念入りに準備を重ねているがそれでも完璧とは言えない。

「ま、俺たちの仕事はパイロットの連中が無事に帰って来るためにも機体を完璧に仕上げてやるだけだな」

源治はそう言っただけで整備を黙々とやるのであった。

——その夜、エリアーレ総督にしてブリタニア・ユニオン第三皇子クロヴィス・ラ・ブリタニアが殺害されたことが報告され、その容疑者として名誉ブリタニア軍人である枢木スザクが連行されたのだった。

第5話

革命の反逆者、ゼロ

クロヴィス暗殺の容疑で枢木スザクが逮捕されてから翌日。そのニュースはエリアー11だけでなく全世界や宇宙のコロニー、火星にまで広まっていた。

今まで総督の暗殺に成功したエリアなど存在していなかったために、ブリタニア・ユニオン本国ではその対応に追われたりまた活気づいた敵対勢力の鎮圧をしたり、レジスタンスや日本解放戦線は枢木スザクを英雄として救出すべきと行動を考えるものたちが現れたり、三大国家と対立している勢力たちは静観するなど世界の歯車はまた少しづつ回転していた。

エリア11のトウキョウ租界の政庁にてクロヴィス総督暗殺の容疑者として連行された枢木スザクの尋問を終えたクロヴィスの代理として現在エリア11の代理執政官のカラレスは先日ニュースを報道したテレビ局のプロデューサーであるディートハルト・リートに枢木スザクの移送を中継を依頼した。

カラレスとしては名誉ブリタニア人である枢木スザクにクロヴィス暗殺の罪を擦り付けることでブリタニア軍において名誉ブリタニア人を不要な物とし、クロヴィスが暗殺されたことに気づかなかつた自分たちの評価をこれ以上下げないようにするためにも市民の怒りを枢木スザクに押し付けようと自己保身の一心で行おうとしていた。

そんなことが分かるのかディートハルトは表面上は指示に従う素振りをしているが内心ではカラレスのことをつまらない物としてしか見ていなかった。彼にとって自らの心を踊らせるような事象の出現を映像に撮りたいという一種の危険な願望を持っているためかこのような普通の仕事では満足出来ないでいた。

そして3日後の夜、カラレスを含めたKMFとMSの混成部隊の監視の元で枢木スザクを政庁の裁判所へと連行することが決定された。

一方カラレスが枢木スザクの移送を決定したのと同じ頃、扇たちレジスタンスメンバーとヒイロとデオオのコロニーのガンダムのパイロット、AT乗りの傭兵であるキリコはシンジユクゲッターで指示を

出していた人物から連絡が来た。

それは一方的なもので力を貸すことは約束されたが、そう簡単には信用できないと言うとその人物は不可能を可能にして見せることで信頼を勝ち取ると言いそのために枢木スザクを救うと言った。

これにより扇たちはとりあえず何が起こってもいいように警戒をしつつも3日後の夜に向けて行動を起こすのだった。



「よし、これで駒は揃ったな。あとは予定通りに作戦を進めるだけだな」

アツシユフォード学園の地下にある隠し部屋にてレジスタンスに連絡を終えたルルーシユは通信機の電源を切った。

「ル、ルルーシユ・・・本当にやるのかい？今ならまだ引き返せるはずだよ・・・」

部屋の片隅で右肩に包帯を巻かれていて軽く拘束されているクロヴィスが震えながらもルルーシユを止めるように声をかける。

あの時、ルルーシユはクロヴィスを殺さずクロヴィスの肩を撃ち抜くと司令室にクロヴィスの血を残し、脱出の際に第一発見者となる兵を決め、力を使いその血が数十倍の量に見えるようにした。

さらにもう一人兵を見つけ、血を見つけた兵が錯乱してその血を拭き取っていると勘違いし、現場保持のため第一発見兵を昏倒させるよう命を下した。

二人の兵が物的証拠としてクロヴィスが生きていないことを示す。遺体が見つからないのは混乱させるためにルルーシユが生じさせたことだが、まさかクロヴィスの遺体を確認せずに死んだことにされるとはルルーシユの予想よりも早かった。

その後は人の目に入らないように地下通路を移動してアツシユフォード学園の地下の隠し部屋にクロヴィスを監禁した。

「言ったはずですよ兄上。もう俺は後戻り出来ないところまで来ているし後戻りする気などない」と

「しかしルルーシユ、このままブリタニアと戦いつづけるといつかコーネリア姉上やシユナイゼル兄上たち血の繋がりのあるもの達と

戦う事に——」

「元より覚悟の上だ」

元々争いを好まないクロヴィスごエリアー総督になったのもルルーシユとナナリー、リリーシャが日本人たちに殺されたと聞いたから彼らの仇を撃とうと日本人に対して厳しい政策を行っていた。しかしルルーシユたちが無事なことを知った今は自分勝手だと分かっている。争いとは無縁の平和な暮らしを送ってもらいたいと願ってしまう。

クロヴィスのその願いを嬉しく思いながらもルルーシユはそれを否定する。このまま何もしないでブリタニアから隠れるように生き続けることは不可能だと理解しているし何より母マリアンヌの死の真相とブリタニア皇帝である父シャルル・ジ・ブリタニアに対しての復讐、そしてナナリーとリリーシャ、ルルーシユ自身が求める優しい世界を実現するためにも戦うしかないのだ。

「ブリタニアと戦うと決めた日から俺は相手が誰であろうと戦うことを覚悟している。例え腹違いの家族だろうと俺の前に立ちはだかならば……」

ルルーシユは決意の籠った目でクロヴィスを睨むとクロヴィスは顔を青ざめて何も言えずにいた。

ルルーシユはそんなクロヴィスから視線を話すと部屋に飾ってある黒い仮面と黒いマントを身に纏いながらそのまま部屋から出ていった。クロヴィスはルルーシユが去っていった扉をただ呆然と見ることに出来なかった。

——そして時はあつという間に流れ、枢木スザクの移送の日の夜になった。



枢木スザクの移送の日の夜。政庁へと続く沿道をカラレス代理執政官を筆頭に遺体の入っていない空の棺が入った車をサザーランドが護衛しながら進んでいた。そして移送車に乗せられた拘束衣を着せられ拷問で傷だらけになったスザクが銃を構えたブリタニア兵士に挟まれながらその後ろを進んでいた。

そして沿道の端にデイトハルトによって集められた熱狂的な愛国者を枢木スザクに罵詈雑言を浴びさせ中には小石などを投げる者もいた。

その様子を離れた場所に隠れてそれぞれの機体のコックピットの中でカレンたちは見ていた。

『おい、動かなくていいのかわよ?』

『まだまだ、例の人物から合図が来ていない』

動かないでいることに焦れつたさを感じているのか無頼のコックピットの中でそう愚痴る玉城を同じように無頼のコックピットの中にいる扇が止める。

『でも、このまま何もしないでいると枢木スザクが政庁に……』

『だが無策で突っ込んだ所でこちらに被害が出るだけだ』

『俺もキリコと同意見だな。襲撃ぐらいは予想してるだろうしな』

カレンは行動すべきだと意見するが、キリコとデュオは否定する。カラレスのことはナンバーズを徹底的に区別することで知られているが、軍人としてはコネで今の地位になっていることからあまり優秀でないことも知られている。しかし全くの無能という訳では無いので襲撃を予想しその対策はしっかりと取っていると考えるべきである。

そしてカラレスの予定通りに進んでいたのだが、そこに1台の車が迫っているとカラレスに連絡が入った。カラレスはそれを通す許可を出し、その場で全機停止した。予定のない行動に周囲の人間が困惑していると前方から1台の車がゆっくりと近づいてきた。しかもその車は皇族の御料車であることから多くのブリタニア人が眉をしかめた。

そしてその車は棺の手前数十メートルの位置で止まると車の壁を焼き払いながら1人の人物が姿を表した。

「私は——ゼロツ!!」

黒いトゲや金の装飾が施された黒い仮面に黒のマントに黒い衣装を纏っているその姿は多くの人々に怪しさを感じさせるのに十分だった。

そして実際カラレスはゼロをみて小馬鹿にするように鼻をフンつと鳴らすと全てのサザーランドの銃口をゼロに向けさせた。

ゼロは銃口を向けられているというのに全く動じないどころか余裕を感じさせられるものだった。

「ゼロとか言ったか、一体何をしに来た？我々はこれよりクロヴィス殿下を殺害した大罪人である枢木スザクを法定まで連行しなくてはならない。貴様の茶番に付き合っている暇はない」

カラレスがゼロを見下すように言うとゼロは突如笑いだした。カラレスは癩に触ったのか口調を荒らげる。

「何がおかしい！」

「違うな、間違っているぞカラレス代理執政官。クロヴィスを殺したのはこの私だ！」

「何っ!？」

ゼロの予想外の言葉にカラレスを含めその場にいた全員が動揺した。そしてそれを無視してゼロは言葉が続ける。

「枢木スザクを貰い受けたい。コイツと交換でな」

ゼロがそう言いながら指を鳴らすと御料車が爆ぜた。そしてその中にはデコボコと突起やケーブルなどが着いている半球体のカプセルがあった。

それはクロヴィスがシンジユクゲッターにて回収を命じていた毒ガスの入っているとされているカプセルだった。

「カラレス執政官！アレはっ!？」

「言われずとも分かっている!!」

「(そうだろう、中身を見ていないお前たちにとってこれは毒ガス)」
カラレスの部下であるヴィレッタ・ヌウがカプセルを見て声を上げるのをカラレスは狼狽しながらも黙らせた。それを見て確信を持ったのかゼロ——ルルーシユは仮面の下で笑みを浮かべる。

クロヴィスからカプセルの中身のことは側近であるバトレーと研究員を除けば親衛隊しか知らないことを聞いていた。故に脅しの材料としてこれ以上のものはないとルルーシユは確信していた。

これによりカラレスたちは市民たちに悟られることなく市民たち

を人質に取られたと考えさせることに成功した。

「さて、どうするかなカラレス代理執政官殿？」

「ぬうううううっ!!」

ゼロが返答を求めのに対してカラレスは顔を蒼白させながら拳を握るしか出来なかつた。テロリストの要求を飲むなどブリタニア軍としてはありえない考えだが、要求を飲まないことで毒ガスが散布されれば市民に多くの被害が出る上にカラレスは責任を負わされて今の地位を剥奪されるのは目に見えている。つまりどちらを選んでもカラレスは詰んでいるとしか言えないのだ。

「いいのか？公表するぞ、例の情報を」

突然の発言に周囲はまたざわめく。憶測が飛び交い、カラレス自身もまた自らが後暗いことをしているためか心当たりがあるのか狼狽していた。

「公表されたくなければ、『私を見逃せ！そっちの男もだ！』」

仮面の左目部分が一部スライドしてルルーシユの左眼が露出するとルルーシユは力を発動し、赤い告死鳥が羽ばたきカラレスの脳裏を犯した。

それによってカラレスは先程まで蒼白だった顔から無表情になり、ルルーシユの傀儡と化した。

「いいだろう、その男をくれてやる」

「カラレス執政官?! 一体何を!」

「くれてやると言ったのだ! とつとつその男を渡せ!!」

カラレスの突然の変貌にヴィレッタが進言するも、カラレスはそれを取り合おうとせず枢木スザクを解放させるように指示を出す。枢木スザクを挟んでいる兵士はその指示に戸惑うも上官であるカラレスの命令に逆らうことも出来ず指示通り枢木スザクの身柄を解放した。

その行動に対してあたりからそれを諫める声が当然上がるがカラレスはそれを無視して枢木スザクをゼロに渡す。

「これで目的は達成した。これ以上ここにいる理由はないな」

ゼロはそう言うのと隠していたスイッチを取りだしそれを押す。

すると御料車に搭載されたカプセルから勢いよく白いガスが噴出され、辺りを覆った。

そして辺りにガスが充満し始めたことで沿道にいた人々はパニックに陥って我先にとその場から逃げていた。

「しまったー奴らこの隙につ」

噴出されたガスに紛れてゼロと枢木スザクが道路から飛び降りる姿を見つけたヴィレッタはそのまま逃がさないために撃ち殺そうとサザーランドのアサルトライフルの銃口を向けようとしたが、狙撃によってアサルトライフルごと腕が破壊された。

「なっ!？」

ヴィレッタは突然の上からの攻撃に何が起こったのか理解出来ずに呆然するが、続いて脚部の関節部分が破壊され無様に転倒した。そしてそれはヴィレッタのサザーランドだけではなくカラレスを含めた護衛のサザーランドの全ての脚部の関節部分が破壊されて倒れ伏していた。

「これはいったい……」

ヴィレッタは何が起こったのか理解出来なかったが、倒れたサザーランドのコックピットの中から攻撃地点を探すもレーダーになんかの反応もないことから遠距離からの狙撃であることは間違いない。しかも敵の狙撃は流れ弾が他の建物に命中しないようにしていることから今ヴィレッタたちのいるストリートよりも高い位置から行われていることが分かる。

その情報に加えて、攻撃を受けた位置や方向、射線軸を導き出して地図に照らしあわせ、敵の狙撃ポイントを特定した。

そしてその位置はとんでもない所だった。

「まさか、あのビルから狙撃したと言うのか……?」

ヴィレッタが目を向けるのは、未だ建造中のバベルタワーという高層ビルだった。

建設中とはいえその高さは優に三百メートルを超える超巨大建造物。しかしヴィレッタが驚愕しているのはバベルタワーからこの攻撃を受けているこのストリートまでの距離である。

「(ありえない……ここからあそこまでどれだけの距離があると思ってる!?)」

ブリタニアにも狙撃を得意とするものはいるが、優れたものでもKMFやMSに乗っても二、三キロの的を狙うのが限界であり、バベルタワーから十数キロ以上離れているこの場所にいるサザーランド前期の脚部の関節を正確に狙い撃つなど聞いたことがない。

ヴェレッタは見えない狙撃手の恐ろしさに身震いした。

「敵KMFの制圧完了」

その狙撃を行っていた金髪の少女——モニカ・クルシェフスキーは照準内に動いているKMFがいなくなったことを確認すると、スナイパーライフルを構えているグロースターのコックピットの中で小さくため息を吐くとその場から移動した。

ルルーシユの作戦通りに進んだことでこちら側に被害が出ることなく目的を達成しルルーシユもまた待機していたガフランによって既にもうこの場から離れている。

政庁からゼロを追うための部隊としてウルフ率いるジェノアス部隊が出撃したが協力者である扇グループ達と戦闘になり、足止めをくらったウルフたちはゼロを追いかけることも出来ずゼロが完全に逃げ切ったことを確認した扇グループもまた早々に戦線を離脱した。



枢木スザクの奪還に成功しブリタニアからの追っ手を振り切ったゼロはシンジユクゲットーの廃墟に辿り着き、協力者である扇グループの面々に会って感謝の言葉を伝えてからその場を移動して別の場所まで待っている枢木スザクと向かいあった。

「随分と手酷くやられたようだな、枢木スザク。犯人に仕立て上げられたことで奴らのやり口はわかっただろう」

ゼロは拘束を解かれたスザクを見ながらそう言った。身体のあちこちに痣や切り傷があることか拷問紛いの尋問をされたことが予想できる。そんなゼロをスザクは睨むように見ている。

「……………」

「ブリタニアは腐っている。君が世界を変えたいなら私の仲間にな

れ」

「君が・・・君が本当にクロヴィス殿下を殺したのか？」

ゼロがスザクを仲間に勧誘するが、スザクはクロヴィス暗殺の真実を求めるようにゼロにそう聞いた。

「これは戦争だ。敵将を討ち取るのに理由があるか？」

「毒ガスの存在を仄めかしたのは、民間人を人質にとつて・・・」

「私が毒ガスを持っていないのを知っているか・・・。交渉事にブラフは付き物。結果的には誰も死んでいない」

「結果・・・？そうか、そういう考えで・・・」

「私の所に来い。ブリタニアはお前の仕える価値のない国だ」

スザクはゼロの答えに何か思うのか小さく笑うが、ゼロはそれに気付かずにスザクを勧誘する。しかしスザクは

「そうかもしれない・・・でも、だから僕は価値のある国に変えるんだ。ブリタニアの中から」

「変える？」

「間違つた方法で手に入れた結果に価値はないと思うから」

スザクはゼロの勧誘を断り自分なりの考えを伝えるとその場から去ろうと歩み始めた。

「待て！何処へ行く!？」

「政庁へ行くんだ。あと一時間で軍事法廷が始まる」

「馬鹿か、お前は！あの法廷はお前を犯人にするために仕組まれている！検察官も、判事も、弁護士も！」

「それでも、それがルールだ。僕が行かないとイレブンや名誉ブリタニア人に対して弾圧が始まる」

「だが、お前は死ぬ！」

ゼロはスザクを法廷に行かせないよう先程までの冷静さを捨てて感情的になつて説得をするが、スザクの意味は固くその意思は変わらなかった。

「・・・構わない」

「馬鹿だ、お前は！」

「昔、友達にもよく言われたよ。この馬鹿・・・って・・・」

「……………」

スザクはゼロのその悪態を聞いて寧ろ懐かしく感じたのかクスリと笑って答えた。ゼロはその言葉にハツとしてスザクの顔を見るも何も言えなかった。

「本来なら君を逮捕するべきなのだろうけど……今では返り討ちだろうからね。法廷に出る為にもここで殺されるわけにもいかない。だけどこれだけは言わせてもらおうよ——助けてくれて、ありがとう」

スザクはそれだけを言うのと、背を向けて政庁にある法廷へと足を向ける。

ゼロ——ルルーシュはその背が背景に消えるまでただ見ることに出来ず、悔しそうに拳を握るしか無かった。

「……………この……馬鹿が……！」

その後、ルルーシュはゼロとして扇グループ、コロニーのガンダムパイロットのヒイロとデュオ、AT乗りの傭兵であるキリコと会話をし、扇グループの面々を傘下に入れ、ヒイロ達とは協力者としての関係を築くのだった。

そして、そんな彼らの様子を見ている存在がいるのをこの時、誰も気づいてはいなかった。

第6話

我らの名は、黒の騎士団

仮面のテロリスト——ゼロが現れてから一月が経過しその間にも世界の情勢は進んでいた。

三大国家は敵対勢力であるソレスタルビーイングやコロニーのガンダムなどに対抗するために着々と水面下で新兵器の開発や既存の機体の改良などを行っていた。

更には世界征服を目論むD r. ヘル率いる機械獣、全宇宙の征服を企んでいるギシン帝国のズール、ゲッター線に引かれる宇宙怪獣インベーター、謎の生命体であるイマージュや界震によって現れるヘテロダインそして多次元を超えて現れたバジユラや次元獣などが暴れていた。

世界の敵としてテロリスト認定されているソレスタルビーイングの協力者として紛争地に現れては弱い方に味方をしていたダンクーガノヴァ

インベーターの脅威を理解しない国連平和理事委員会に怒りを隠せない早乙女博士が世界を一度破壊するためにソレスタルビーイングの協力者として派遣されたゲッターチームのゲッター線を動力にしたロボットであるゲッター1。

次元震によってこの世界にやって来たフロンティア船団のS・M・Sに所属するマクロス・クォーターとバルキリーと呼ばれる可変型ロボット兵器に乗るスカル小隊。

そしてアクシオン財団の対次元獣用機動兵器「DMバスター」の試作1号機ブラスタのテストパイロットであるクロウはあらゆる戦闘データを手に入れるためにソレスタルビーイングに協力するなど戦力が増していた。

エリア11の隣にあるもう一つの日本ではジャパニウム鉱石から生成された超合金Zを素材に兜十蔵博士によって造られたマジンガーZ

ギシン星人である科学長官イデアによって造られたゴッドマーズ
竹尾ゼネラルカンパニーの所有するトライダーG7と株式会社2

1世紀警備保障が所有するヘテロダインに対抗するためのダイ・ガード。そして次元震によって明らかになった暗黒大陸で発見されたガンメンと呼ばれる機動兵器の一つであるグレンとラガンによるDr.ヘルやズール皇帝、ヘテロダインなどの対策としてスーパーロボットチームが結成されていた。

そしてエリア11にはルルーシュことゼロの配下となったカレンたち扇グループの面々はキョウトから日本純正KMF紅蓮とグラスゴーの改良機である無頼を送られた。協力者であるヒイロのウイングガンダム、デュオのガンダムデスサイズ、キリコのスコープドック。そして以前からルルーシュが所有していたガンダムAGE-1、ガフラン、ゼダスの他未だ明かされていない兵器を所有していた。

このように世界の至る所で争いが起こっているというのに戦争に関わったことの無い多くの一般人たちはそのことを理解せず今ある平和が永遠に続くものだと思わず過ごしている。しかし、彼らは何時か知ることになる。その平和が数多の犠牲の上で成り立っている薄氷の存在であることに



ゼロの名はソレスタルビーイングなどの存在のように世界中で広まったが、その中で特に知れ渡ったのはエリア11のようなブリタニアの植民地やそのブリタニアである。

枢木スザク奪還後もシンジクケットーを再び壊滅させようとしたブリタニア軍と治安警察との戦闘、エリア11のアクション財団の研究所にてソレスタルビーイングたちと共闘して次元獣との戦闘などの大きな戦いの他、リフレインの撲滅や日本人を虐げる貴族の粛清など様々なことをゼロたちは成し遂げた。

それによって日本人だけではなくブリタニア人の中でもゼロをただのテロリストでは無いと考えるようになった。

特にクロヴィスの代わりにエリア11総督になった第二皇女コーネリア・リ・ブリタニアとその側近であるアンドレアス・ダールトン将軍とコーネリアの騎士であるギルバート・G・P・ギルフォードはゼロという存在を危険視していた。

実際にゼロと戦闘を行った訳では無いが、部下たちからの報告や戦闘データの映像などを見て今まで戦ったところのテロリストとは異なる異質の存在であることを理解させられる。

ゼロの高度な戦略、コロニーの2機のガンダム、未知の技術で造られたMSなどその驚異は計り知れないでいた。だというのに本国の貴族や皇族たちはそれを重く受け止めず楽観視しているものばかりだった。

そしてゼロたちが活躍しているのに対して焦るのはブリタニアだけではなく、そのブリタニアの反抗勢力である日本解放戦線もまたゼロたちが活躍している現状に焦りを抱いて一部の人間が無謀な行動を起こすのだった。

その行動を切っ掛けに世界はまた動き出すのだった。



エリア11の河口湖のコンベンションセンターホテルにて国際会議に併せてパーティーが行われる筈だったのだが、そのホテルを日本解放戦線の草壁中佐と国際テロリスト組織——世界解放戦線、通称『WLF』がホテルジャックしたことによって会議に参加していた生産国の主要人物たちや観光客人々が人質としてホテルの近くにあるフジ基地に囚われてしまった。

草壁はコーネリアに対して人質を解放する条件として政治犯の釈放を要求している。

テロリストの要求を飲むなどブリタニアの国是として許されることとでないことから普段のコーネリアならばこれを一蹴して人質ごとテロリストの殲滅を図るのだが、基地の周辺にはグラスゴーやヘリオン、ティエレン、リアルド、アクシオ、ジェノサイドロンが配備されていた。更に人質の中にコーネリアの妹でありエリア11副総督のユーフェミア・リ・ブリタニアがいるために下手に行動を起こせないでいた。

時間だけが過ぎていき、とうとう痺れを切らしたのか草壁はコーネリアに要求を飲まないのならば、人質を30分ごとに1人ずつ殺すことを宣言しその証明として人質の1人が銃殺された。

打つ手が無くなったコーネリアたちの元に部下からゼロから通信が入ったとの報告を受けた。こんな時に何故現れたのかと疑問を抱きながらも無視することも出来ないためコーネリアはゼロの話しを聞くために通信を繋げることにした。

『お久しぶりですねコーネリア総督。サイタマではお世話になりました』

「くだらぬ前置きなどいい。ゼロ、今は貴様のような道化に付き合っている暇など——」

『交渉事は上手くいっているのかな、コーネリア？副総督であるユーフェミアの為にもさぞや慎重な対応が必要となっているのだろう』
「(っ!?)コイツ、何故ユフィの事を知っている!?)」

ゼロの言葉を聞いて表情には出さないが内心驚愕するコーネリア。ユーフェミアがホテルの会議に参加したことを知っているのはコーネリアの信頼出来る直属の部下の一部とユーフェミアの護衛に選ばれた者たちだけの情報をゼロが持っていることに警戒を高めた。

『何時もの貴方ならば人質を取られたとしてもテロリストの殲滅を優先している。しかし今の貴方は慎重に行動し未だ軍を動かしていない。その事からホテルの人質の中に貴方にとって大切な存在——ユーフェミア皇女殿下がいることが予想される。違うかな?』

どうやらゼロはこちらが想像している以上にブリタニアの事情に詳しいようだ。確かにコーネリアにとってユーフェミアは守るべき大切な存在であるために迂闊な行動を起こせなかった。しかし、それをテロリストと侮っていたゼロに知られていることが忌々しくコーネリアは顔を歪ませる。

そんなコーネリアを無視してゼロは話しを続ける。

『私ならユーフェミアを含めた全ての人質を救うことができる』
「何を言っている、ゼロ」

コーネリアはゼロの言った言葉の意味を確認するために今一度尋ねる。ゼロは自信と威厳に満ちた声で再び答えた。

『救ってみせよう、私が!』

ゼロとコーネリアはしばらくの間、通信モニター越しに睨み合っ

いたがコーネリアがゼロに賭けた、というよりもゼロが行動を起こすことによつてこちらが人質を起こすための行動を起こしやすくなると考え、フジ基地へと向かうのを黙って見ていた。

「やはり予想していた通り姉上が動けなかったのは人質の中にユーフェミアがいたからか」

通信を終え、フジ基地に向けて移動しているギアスで奪ったテレビ局の報道車の上に乗っているルルーシュはゼロの仮面の下で笑みを浮かべていた。

流された映像の中に生徒会メンバーがいた時は動揺したが、日本解放戦線に対して何も動かないコーネリアに疑問を感じたルルーシュはその事から人質の中にユーフェミアがいると判断し作戦を考えたと。そしてその作戦の1つとしてルルーシュがゼロとして草壁に直接会おうとしていた。

「草壁としてもクロヴィスを殺したゼロという存在を無視することは出来ない。そして奴らがゼロに目を向けるからこそ他の奴らも動きやすくなる」

ルルーシュはフジ基地の方に目を向けながらこの先の出来事を考えると思わず邪悪な笑みを浮かべていた。

「(予定とは異なつたが問題ない。精々俺の目的のための道化として踊つてもらおうか草壁中佐)」



ルルーシュがゼロとしてフジ基地の中にある草壁の元へと向かつている頃、フジ基地から離れた場所の森にてガフランやゼダス、ガンダムAGEE-1、グロースターなどが待機状態で隠れていた。別の場所ではソレスタルビーイングやS・M・S、マジンガーZたちスパーロボットたちなどが同じように待機していた。

彼らが何故フジ基地周辺にいるのかと言うと、元々は国連の平和理事委員会に協力することになったためにドラゴンズハイヴというダークノヴァの本拠地に集められた時、日本解放戦線がWLFと手を組み人質を取つてフジ基地に縦籠っている事を知った彼らは人質を助けるために行動しようとしたのだが、謎の人物であるポートマン

を經由してゼロから人質救出のための作戦を聞いた彼らはその作戦を行うためにゼロの合図が来るまで待機していた。

カレンたち扇グループメンバーとキリコはゼロの指示の元により人質救出のためにそれぞれの機体に乗って隠し通路を通っていた。またそれとは別働隊としてゼロ直属の部下が数名先行して侵入していた。

そしてそのフジ基地内部では現在、人質を閉じ込めている部屋に続く道を銃を装備している日本解放戦線の2人の兵士が次の犠牲となるべき人質を連れていくために人質のいる部屋へと向かっていた。

「草壁中佐がああゼロとかいう奴と話しをするらしいがどうなると思うよ」

「さあな。だが奴がもし我らの下につけば日本解放戦線の戦力は確実に上がる。精々WLF同様ブリタニアの豚どもを倒すのに役立つてもらおうじゃないか」

「ハハっ、違うない」

彼らはゼロが会いに来たのも草壁を通して日本解放戦線と協力関係になり来たとかさういった類のものだと考えていた。当然だろうゼロはクロヴィスを暗殺したことで色々な意味で注目の存在と言ってもいいが今までこのエリア1で7年間も反抗を続けていた日本解放戦線のメンバーにとってゼロは突然現れた上に正体も明かさなない謎の人物でしかなく敵か味方かも分からないのだから仕方がないだろう。

「ま、どうせ奴のことは中佐が対応するんだ。俺たちは俺たちの仕事をやるだけだ」

「.....」

「?おい、なんか言ったら——」

隣にいた奴からの返事が返ってこないことに疑問に思った男が確認するように隣を見ようとした瞬間、男の首が落ちた。男が最後に見た景色は首から上がなくなっている同僚の姿だった。

「.....」

その頭が無くなった2つの死体を黒髪の少女が血の滴る刀を片手

にそれを冷めきった目で見ていた。

「アカメ殿」

「セバスか、人質の方は？」

「ゼロの合図があればすぐにでも救出可能です。既にこの基地内部にいる日本解放戦線とWLFの兵士たちの始末が完了しているから安全に人質を移動させることが出来ます」

黒髪の少女——アカメは後ろの方で待機していた初老の男性——セバスから人質救出の目処が立ったことを聞くと刀に付いていた血を払うと鞘に戻してその場を去ろうとしていた。

「どちらへ向かわれるつもりですか？」

「ゼロの元だ。私の任務は終了しているのだから別にゼロの護衛に行っても構わないだろう？」

「勿論構いません。後のことは私たちがやっておきますのでアカメ殿は念の為にゼロの護衛に向かってください」

セバスの言葉にアカメはコクリと頷くとゼロの元へと走っていった。セバスはその姿を見送るとアカメによつて死体と化した2人の日本解放戦線の兵士の処理を始めた。

そしてフジ基地の司令室にてゼロは草壁とその部下数名と向き合っていた。丸腰のゼロに対して帯刀している草壁と銃を構えゼロの周囲を囲んでいる日本解放戦線の兵士たちがいるというのに動揺の欠片すら見せないゼロに草壁たちは一種の不気味さを感じていた。

「・・・よく来た、ゼロ。私が日本解放戦線の指揮官の草壁中佐だ」

「ゼロだ。まずは私を受け入れてくれたことに感謝する」

「キョウトの支援を取り付けた新参者に興味があったからな。それに貴様のこれまでの戦功は侮り難いものがある」

草壁はゼロへの警戒をしながら適当に話しを続ける。

「お褒めいただき、光栄だ。だが、あなた方のやり方は私の目指す道とは随分異なるようだ」

「WLFと手を組んだ事か？奴らは利用しているに過ぎん。連中の戦力は魅力的だからな。上手く使えば、力となる」

「テロリストは単なる駒か……」

ゼロは草壁の言葉に内心失望しながらも話しの続きを聞く。

「ここにいるのは日本解放戦線の間人だけだ。腹を割った話をしたい」

「では、聞こう。私と手を組むつもりは無いか？」

「ならば、素顔を見せてもらおう、ゼロ。……無礼であろう！」

ゼロは一応形だけとはいえ草壁にそう提案を持ちかけるが、草壁にしてみれば仮面を被った怪しい男を信用することなどできないため話をするならば仮面を取った素顔でと言ってきた。

「わかった……。しかし、その前に聞かせて欲しい。お前は、この行動の果てに何を求めている？」

「知れたことを。日本人がまだ死んでいない事を内外に知らしめるのだ」

ゼロ——ルルーシュは草壁のその答えに失望しか感じなかった。周りを見れば、他の兵士達もそれに同調する眼差ししかしておらず、全員が草壁と同じ志のようだ。

「……唯の精神論か、古いな」

「なにいつ!？」

先を見据えず、今を満足するための無謀な決起。

このような行動を起こしたとしても、絶望しきった日本人はなにも感じることは無いだろう。寧ろ更なる抑制をブリタニアから強いことになる、より苦しい立場に貶められる可能性もある。

民衆の事を顧みず、自らの正義のためには犠牲も当然と考える自己中心的な狂信者。

「貴様達では日本を救えない」

他者を顧みない者は必要ない。ルルーシュは彼らを切り捨てることを選択した。

「ゼローもはや問答無用!!」

ゼロの言葉に激情した草壁がソファから立ち上がると帯刀していた日本刀の刀身を抜き、ゼロに斬りかかろうとした。しかしその刃がゼロに届くよりも先にゼロはギアスの力を解放した。



その後の展開はあつという間だった。草壁たちをギアスの力で自害させるとその場を後にしようとしたゼロだったが、そこに運悪くユーフェミアを連れてきた日本解放戦線の兵士が部屋に入ってきた。草壁たちの死体を見た兵士がゼロに銃を向けようとした瞬間、アカメによって首を切り落とされた。目の前で人が殺されたことにショックを受けたユーフェミアはそのショックで気絶してしまったがそのまま他の人質たちと同じように解放した。

頭である草壁を失ったことでマトモに統率が取れなくなった日本解放戦線の兵士とWLFの面々は突然の事態に対応しきれないでいた。その隙をつくようにしてゼロの配下であるガンダムAGEー、ゼダス、サザーランドを筆頭にした部隊とキョウトから与えられた日本製KMF『紅蓮式式』に乗るカレンを中心とした扇グループの面々とキリコ、そして今回の作戦の協力者であるソレスタルビーイングとその協力者たち、S・M・S、日本のスーパーロボット部隊によって制圧することが成功した。

そして半壊した機体が転がっているフジ基地の中心にいるゼロにライトが灯り、その姿を報道車を通して世界に向けて映像が流されていた。

『(さあステージの準備はできた。ここからは俺の否、俺たちの組織のお披露目だ)』

『人々よ、我らの姿をその目に焼きつけ、我らの名を脳裏に刻むがいい！ 我らの名は——黒の騎士団!!』

ゼロの後ろには黒いユニフォームと、顔の上半分を覆う黒いバイザーを身につけた数人の男女達。さらにゼロに仕える騎士のように片膝をついているガンダムAGEー、ゼダス、ガフラン、サザーランドが周囲に待機していた。

尚もゼロの言葉は続く。

『我ら黒の騎士団は、武器を持たぬ全ての人々の味方である。それが例えばブリタニア人だろうと、日本人だろうと!!』

そう、俺達が戦うのは守るべき弱者のため。しかしそれは断じて正義の行いではない。

『日本解放戦線は卑劣にもブリタニアの民間人を人質に取り、無惨に殺害した……無意味な行為だ。故に我々が制裁を加えた』

一方的な断罪は悪である。例えそれが公の目から見ても賞賛される行為だとしても。

『私は戦いを否定しない。しかし強者が弱者を一方的に虐げる事は断じて許すことはできない!!』

力が無い者はどうすればいい？黙って耐える？口を塞いで耳を嚙む？それは断じて『正しいこと』ではない。

『我々は強者が弱者を虐げるとき、再び現れるだろう』

ならば我々は民衆の代弁者となろう。力無き者の希望となり時に力となる、そんな存在に。

だがこれだけは覚えておくがいい。これは搾取する側だけではない。搾取される側にも向けた言葉だ。

『撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ!』

この言葉は世界に向けての言葉であると同時に俺自身の覚悟を決めた言葉だ。

『力無き者よ、我らを求めよ!』

その言葉を聞いて日本人やコロニーの住人などの搾取される弱者たちの心と瞳に光が灯り、一部の知識人やマスコミは興奮を覚え、この映像を見ている遠い地にいるトレーズ・クシュリナーダなど一部の権力者たち、そして今回の協力者であるソレスタルビーイング等の面々は興味深そうにゼロの言葉を聞いていた。

『力在る者よ、我らを恐れよ！』

その言葉にA E U、人革連、ブリタニアユニオンなどの三大国家などの軍の上層部や貴族、皇族などの間で嫌悪が広がり、この場にいる力持つスザクは厳しい表情でゼロを見つめていた。

『そして今一度その目に焼きつけよ！我らは力無き者の剣、黒の騎士団である!!』

この日、ゼロ——ルルーシュはその力を本格的に世界に見せつけるのだった。

本来の物語とは異なる道筋を辿るこの物語がどのようなかはそのれを知るものは誰もいないのだった。

第7話

動き出す世界

ゼロ率いる黒の騎士団がフジ基地に現れ草壁率いる日本解放戦線メンバーと世界解放戦線『WLF』からソレスタルビーイング、S・M・S、日本のスーパードット部隊などと協力して人質を救出した。そしてその事件を皮切りに黒の騎士団はエリアーで表には明かせないような悪事を働く貴族や軍人、また日本人でありながら日本人を食い物にしている日本人など『悪』と呼ばれるもの達を裁いていた。ある時はKMFやMSなどの機動兵器を用いて、またある時はメディアに悪事の証拠を揃えて報道を促し、メディアがその情報を揉み消そうとするならそれすらも報道したりなど様々な手段を使って黒の騎士団は悪事を働いていたものたちを裁いていた。

—— 『正義の味方』

人によって正義も悪も異なるが、黒の騎士団は弱者の味方として支配されているイレブンたちナンバーズ、国是に否定的な一部のブリタニア人、三大国家に実権を握られているコロニーや植民地の人間たちなど力を持たないもの達にとって希望の光とも言える存在だった。

しかし三大国家の人間たちのような支配者たちやWLFのようなテロリストのような存在などは黒の騎士団の存在が邪魔でしかないと考えていたが、国連平和維持理事会代表がテロや次元獣などの人類共通の敵に対抗するための組織『Z Extra International Savers』通称『ZEXIS』に黒の騎士団やソレスタルビーイング、ダンクラーガなどの三大国家に敵対する組織やマジンガーZを筆頭にした日本のスーパードットたちなどの主義主張が異なるもの達を集めたことにより表立って黒の騎士団やソレスタルビーイングなどを襲うことが出来なくなってしまう。

ZEXISの登場により各国の権力者たちはそれに対してどのような対応をすべきか悩むものもいれば、所詮は烏合の衆と見下し大した脅威と見ずに何時でも潰せると傲慢な態度を取るもの、そしてZEXISが今後どのような行動を起こすのか見定めるものなどと対処の仕方は異なるが共通する点はZEXISという組織に少なからず

の興味を持っていた。

——このZEXISという組織に集う人々が世界に対してどのような影響を与えるのかは、一部の人間を除いてまだ知る由もないのだった……



『黒の騎士団』がその存在を世界に知らしめた日本解放戦線の草壁中佐がフジ基地で起こした事件から5日が経った。エリア11のトウキョウ租界のアッシュフォード学園の生徒会メンバーは人質に取られていたこともありこの5日の間、学園の門前にて取材しようとやって来たマスコミが沢山いたために学園の外に出れないことで生徒たちに不満の声が上がったりしたがそれ以外では特に問題という問題もなく普通の日常を過ごしていた。

そしてクラブハウスのルルーシユの自室にてルルーシユはパソコンのモニター越しにとある人物と会話をしていた。

『随分と面白えことになってるそうだな。地球にいるウチのもんから聞いたぜ?』

モニターに映っている男——『マクマード・バリストーン』は顎を擦りながら笑みを浮かべていた。

『そんなことを聞きたい訳でもないだろ? 要件を早く言ったらどうだ』

『おつといけねえ。歳をとるとつい長話ししたくなっちゃっていけねえや』

さっさと本題に入れと言わんばかりの不機嫌そうな顔をするルルーシユを気にせずマクマードは笑みを浮かべながら話し始める。

『まあちよつとした護衛依頼をお前さんとこに頼みたくてな。実はちと面倒なことが起こってな……』

マクマードはそうやって俺に依頼したい内容について詳しく話してくれた。

2週間ほど前、火星にて民間警備会社クリュセ・ガード・セキュリ

テイ。通称『CGS』は火星の独立運動を指揮する『クーデリア・藍那・バースタイン』の依頼で地球へ向かう彼女の護衛依頼を引き受けることになったのだが、その準備のさなかに独立運動を企てるクーデリアの存在を疎むギャラルホルンがCGSを襲撃したそうだ。CGSの社長である『マルバ・アーケイ』は昔馴染みであるテイワズの輸送部門を担当する『タービンス』のリーダーである『名瀬・タービン』と再会し、CGSの全財産と引き換えにギャラルホルンとの調停役を頼んだのだが、CGSは参番組の少年兵によって乗っ取られ会社名も『鉄華団』に変わってしまった。

これから名瀬率いるタービンスは彼らからCGS時代の財産引渡しを要求するために彼ら鉄華団が向かおうとしている航路へと向かっていた。マクマードは道中宇宙海賊やインベーターなどに襲われた時のための用心としてルルーシュの部下から護衛を出せないかと依頼してきたのだ。

『勿論依頼料はしっかりと払わせてもらうぜ』

マクマードはそう言いながらルルーシュに報酬内容が書かれているデータを送る。

ルルーシュはマクマードの提示した報酬を見ていると最後の項目に書かれている報酬内容に思わずその動きを止めてしまった。

「コレは……」

『偶然だがウチのものがデブリ帯で見つけたんでな。前々からお前さんがコレを求めていたのは知っていたから今回の報酬にしたが……どうやらその様子だとお気に召したようだな』

マクマードはルルーシュの驚く顔を見て満足したのか笑みを浮かべながらルルーシュを見る。ルルーシュはマクマードにいいようには扱われてる感じがして思わず舌打ちをするがこれでルルーシュはマクマードの依頼を断る理由がなくなってしまった。

「いいだろう。なら火星付近にいる俺の部下たちに連絡して向かわせておく」

『交渉成立だな。それじゃあ期待してるぜ』

マクマードはそう言って通信を切った。通信が切れたのを確認し

たルルーシユは一息つくとも椅子の背もたれに軽くよりかかった。

「それにしても意外だな。お前が他者に正体を明かした上で協力関係を築いているとはな」

ベットの所で寛ぎながらピザを食べていたC・C・Cが通信を終えたルルーシユに笑みを浮かべながら質問してきた。彼女は枢木スザク奪還事件の後にいつの間にかクラブハウスに居着いており、ルルーシユのカードで勝手に購入したピザをこうして好き勝手に食べているのだった。ルルーシユは何度も文句を言っていたが寝耳に水とばかりに言うことを聞かないので最近は諦め始めていた。

「あの男は俺が人質の頃に桐原公の伝手で紹介されたから既に俺の正体を知っているからこそ互いの利益が出る限りはこうして協力関係をとっているんだ」

「だがそれも互いに利益があるまでの間だけの話だろうか？この男が三大国家や他の敵対組織にお前の正体を伝える可能性だって高いだろう？」

C・C・Cはルルーシユが理解してであろうとわかっているがルルーシユの配下でもない人間に正体を明かすことはかなりのリスクであると考えている。その上相手は木星航路最大の影響力を持っているテイワズの代表なのだからゼロの正体は有力なカードとして効果的に使えることが出来るだろう。その事にC・C・Cが懸念しているのに対してルルーシユは「問題ない」と言った。

「奴が俺に対してのカードを持っているように俺もまた奴に対しての有効なカードを持っている。今はまだ互いに利用できている状態だからこそ対等な取引関係を保っていられているんだ」

テイワズは表向きは大企業として活動しているがその実態はマフィアであり裏取引を行っているためにテイワズはその事を公表される事を恐れ徹底的に情報規制を行っているがルルーシユは自らの情報網を駆使したことによりテイワズが所有している幾つかの裏取引使われている航路などの情報を手に入れることができ、これによって2人は対等な関係を築くことが出来た。

「しかしこれからお前は どうするつもりだ？敵は既にブリタニアだけ

では無い。下手をすればZEXISの連中だつて敵になるかもしれないだろう」

C・Cの言う通り、ルルーシユの黒の騎士団やソレスタルビーイング、S・M・S、日本のスーパーロボットたちがZEXISとして活動することになったのは現状では利害が一致しているからであつて必ずしもその関係が長引くとは限らない。

「問題ない。そんなものはZEXISに参加することを決めた時から分かりきつていたことだ。その上で俺は目的を成し遂げるためならばどんな手段でも使つてやるさ」

ルルーシユは覚悟を決めた目をしながらC・Cにそう答えると窓の外の景色を見るのだった。今日は曇り空なのか月や星は隠れてしまい今宵は暗闇に包まれているのだった。



ルルーシユがC・Cと話している頃、場所は遠く離れて火星に変わる。クーデリアを地球まで護衛することになったCGS改め『鉄華団』はCGSが所有していた強襲装甲艦ウィル・オー・ザ・ウイスプ改め『イサリビ』を使つてクーデリアを地球へ送り届ける計画を建てていたのだが、残留した元一軍隊員のトド・ミルコネンの密告によつて仲介業者である『オルクス商会』とギャラルホルンの襲撃を受けることになった。その窮地を辛くもぐり抜けることに成功した彼らだが、その結果彼らは地球への先導役を失つてしまうのだった。

そのための話し合いをするために鉄華団の主力メンバーと依頼主であるクーデリアと従者の『フミタン・アドモス』が艦長室に集まつて今後の方針について話し合つていた。

「どうするよオルガ？このままなんの宛もなく進んでたらまたギャラルホルンの奴らに襲われちゃうんじゃないかねえか？」

鉄華団の団長である『オルガ・イツカ』にそう聞くのは『ユージン・セブンスターク』。現状彼らは地球へと向かうための先導役がいなくなつてしまい航路が判らず使えないことからどうすべきかをユージンは団長であるオルガに聞いた。

「ここまでギャラルホルンとこじれちまつた以上ただの案内役じゃダ

メだ」

「つつてもどうするよ。俺達にはそんな案内役の伝手なんてねえぜ？」

オルガの言う言葉に疑問を持った『ノルバ・シノ』がオルガに質問する。元々オルガたちは参番組としてCGSの頃は下働きをしており他の商会などには知り合いもないため伝手などなかった。

「……テイワズだな。それしかねえ」

「テイワズ……木星圏を拠点とする複合企業ですね。実態はマフィアだと聞きますが」

「お目当てはその実態の方さ」

「あのテイワズが俺らみたいながキの後ろ盾にすんなりなってくれるか？」

オルガの提案に対してユージンやオルガの右腕のような存在である『ビスケット・グリフォン』が難色を示すが、このままではどうしようもないことを全員が理解している。

「このままじゃ地球にはいけねえし火星にも戻れねえ。どっちみち俺たちは木星へ向かう以外ねえんだ。いざとなりや一か八かぶつかるまでよ」

結果、オルガの意見に全員が賛同したことにより一行はテイワズの傘下になるべく木星へと進路を取るのだった。また、フミタンがギャラルホルンの中継器を利用した長距離通信手段を確立させたことによりオペレーターとして就任したり、クーデリアが炊事係として鉄華団に雇われた『アトラ・ミクスタ』がクーデリア、『三日月・オーガス』が作業している整備班たちに食事を配ったり、クーデリアが年少組に文字の読み書きを教えるなどしていた。

そしてイサリビの艦内にて銀髪に碧眼の少年『ライ・アルトリウス』は外の景色を眺めながらこれからのことについて1人、考えていた。彼は元CGSの二番組の隊長にして現在は鉄華団の協力者として同行しているがそれは鉄華団に対して思い入れもあるからだだがそれ以上にライには目的があった。

「(地球か……そこに行けば僕の記憶の手がかりがあるかな)」

ライには自身が何者であるかについての記憶がなかった。覚えていたのは最低限の知識と『ライ・アルトリウス』という名前、体に染み付いた戦闘技術。そして名を忘れたが自分には忠誠を誓った『主』がいるということだけは覚えていた。

ライは気づいたら火星のスラム街にいた。記憶を取り戻すために色々な事をやった。スラム街の連中を自分の配下にして日々を暮らし、そんな時にCGSの社長である『マルバ・アーケイ』にスカウトされ二番組としてCGSに入団し、参番組メンバーであるオルガや三日月たちと親しくしたり一番組のロクデナシの大人共と何度も衝突するなど色々なことがあった。

そしてクーデリアがCGSに地球行きの護衛の依頼を出したことによってギャラルホルン火星支部の襲撃を受け、多大な犠牲を出しながらも三日月とライによって撃退することに成功した。後日、『クラック・ゼント』と名乗るギャラルホルンの士官が決闘を申し込んで来たがそれをライが圧倒的な実力差を見せつけるようにして勝利し、オルガはクーデリアからの護衛依頼を受理したり、地球に向かうためにギャラルホルンの襲撃を再び受けるなどがあった。

ライは確信を持っている訳では無いが地球に行けば自身の記憶について何か思い出せると思ったからこそ地球に向かうオルガ達に協力することになっていた。そしてもしライが忠誠を誓った主君に会えればライはその主君に仕えると確信しているために鉄華団に入ることをしなかった。

「(オルガたちには悪いことしちやったよな。でも僕にとっては優先すべき存在はアイツなんだ)」

記憶に残っていないがそれでもライは覚えている。その人物にライ自身が自分の全てを捧げると誓ったことを、その人物を守る為ならばかつての同胞だろうと斬る覚悟を持っていたことを。

「でもコレが僕が自分で選択した道だ。例え世界を敵に回したとしてもだ……」

ライは決意を込めた瞳をしながら外の景色を見ているとこちらに向かつて慌てた様子でライの部下である二番組の隊員である金髪

リーゼントの青年——『カトウ・アーノルド』が走ってきた。

「た、大変っス隊長!! テイワズ傘下の『タービンス』から通信が来たっス!!」

「タービンスが? ある意味都合だがなんで僕たちに通信を……」

ライはテイワズの傘下であるタービンスが通信をしてきたことはある意味こちらにとつては都合のいいことだと思いつつもあまりに都合のいい展開に疑問を持つが、次のシバの言葉を聞いて納得した。

「そ、それが、その……通信してきたのがマルバなんですよ……」

「へえ……」

カトウの言葉にライは目を細めながらタービンスが鉄華団に通信してきた理由が見えてきた。恐らくだがマルバがタービンスに何らかのツテがありそれでタービンスにギャラルホルンの事を何とかしてもらおうとしていたが、その頃にはCGSはオルガたちによって乗っ取られた後だったためにマルバから取り損ねた依頼料を鉄華団に取り立てに来たのだろう。なら、このあとの展開はオルガの性格からして容易に想像がつく。

「カトウ、僕は格納庫に行つて何時でも出撃出来るようにするからオルガに伝えといて」

「ウツス!! わかりました!!」

ライはシバにそう言うのと格納庫にある自分の機体の元へと向かった。

—— 本来の歴史とは異なる歴史を辿ったことにより、歴史の歯車はこうしてまた新たに動き出す。この結果により未来がどのようなものになるかは神のみぞ知ることだろう……

第8話

鉄華団とタービNZとザンネン5

スーパーロボット大戦Z 魔王たちの歩む物語 8話
タービNZと鉄華団とザンネン5

ハンマーヘッドから少し離れた場所で待機している戦艦『スイン・ルン級重巡洋艦』、『カルセドニー級巡洋艦』、デブリ帯での航行を考慮し前方に槍の先端のような形をしたシールドを備え、作業用のサブアームと通常より多い射撃武装が追加された黒く塗装された装甲強襲艦『ブリューナク』がタービNZと鉄華団の会話が終わるのを待っていた。彼らはゼロの命令によってタービNZの護衛として同行している黒の騎士団傘下の傭兵部隊『ブラッディガム』。主に宇宙で活動している彼らは宇宙海賊の討伐や阿頼耶識システムを無理矢理埋め込められた宇宙ネズミと呼ばれるもの達の保護、艦の護衛などをおこなっている。

主に使用している兵器は『マン・ロデイ』や『ガム・ロデイ』、『ティエレン』、『フラッグ』などのMSを中心に部隊を編成し行動する。更に今回の依頼で不測の事態に対応ができるように黒の騎士団最新鋭MS『ガフラン』3機と開発中の機体である『ゲシュペンスト』が与えられたことで『ブラッディガム』の面々はゼロの期待に応えるべく気合いが入っており何が起ころうとも問題がないように何時でも行動できるように待機していた。

「連中、どう出ると思うかね？」

シュバルツのブリッヅにてブラッディガムのリーダーである前髪の一部が赤いメッシュの黒髪の青年——レイブンはコーヒーカーツプを片手にタービNZと鉄華団の会話が終えるまでの暇つぶしとして副官である長い金髪の青年——アルカ・ホークスに鉄華団がどのような行動に出るかを尋ねてみた。

「私に聞かずとも貴方ならば分かりきっているのでは？」

「硬いことを言うな。軽い暇つぶしのようなものだ君の考えが聞きたいのだよ」

レイブンは笑みを浮かべながら硬い表情をしているアルカに質問

を投げかけると最初は答える気はなかったが上官であるレイブンの無茶ぶりのような質問はいつものことであると諦め仕方なく答える。「高い可能性で鉄華団はタービンスと戦闘に入るでしょうね。彼らのCGS時代の扱われ方を知っていれば彼らが大人しくマルバに資産を渡すはずありませんし、彼らとしてもクーデリア・藍那・バーンスタイン嬢を地球に送り届けるためにもテイワズの後ろ盾は必須です。よって交渉は決裂し戦闘に入ると断定できます」

アルカは事前にゼロから与えられた情報を元に鉄華団がどのよう
に行動を移すのかを予想する。護衛依頼を受けた際にゼロから依頼
内容だけでなく鉄華団の面々がCGSを乗っ取った動機や彼らの所
持する武装、個人情報などあらゆる情報も渡されていたために彼らが
どうするかなど簡単に予想出来た。その答えに満足が言ったのかレ
イブンは笑みを浮かべながら頷いていた。

「うん。やはり君も私と同じ予想になったか。まあ事前に渡された情
報を見ればそう考えるのは当たり前だね」

「では我々はどうしますか？」

「このまま待機するさ。これは彼らの問題なのだから我々が介入すべ
きでは無いしな。なあにどうせ何らかのイレギュラーが発生して
我々が出撃するようなことが起こるだろうさ」

「それはいつもの勘ですか」
「フツ」

意味ありげな小さい笑みを浮かべるレイブンにアルカは嫌な予感
を感じながら頭を抱えてため息を吐く。レイブンの勘は高確率で当
たるために確実に何か起こるだろうと容易に想像出来るため、何が起
こっても問題ないように警戒を続けるのだった。

——そして彼らの予想通り、タービンスと鉄華団の交渉は決
裂し戦闘に入るのだった。



ライが格納庫に向かっている頃、イサリビのブリッジにはオルガを
筆頭に鉄華団の主だったメンバーとクーデリアが集まっており、前方

にある強襲装甲艦『ハンマーヘッド』に乗っているマルバから依頼されて火星に向かっていたタービンスのリーダー『名瀬・タービン』と会談していた。マルバの依頼を受けた名瀬はその代金としてオルガたちにCGS時代の財産の引渡しを要求してきたがオルガはそれを拒否し、対MS・対艦の戦いになるのだった。

「まあオルガたちならその選択をとるだろうね」

パイロットスーツに着替え、自らの愛機である青い日本鎧のような装甲をしたMS『アマツ』に乗り込んだライはオルガたちの判断に小さな笑みを浮かべるとおやつさんこと『ナディ・雪之丞・カツサパ』が既にMSに乗り込んでいる鉄華団のMSパイロットである『三日月・オーガス』のガンダム・バルバトスと『昭弘・アルトランド』のグレイズ改が何時でも出撃が可能であることをオルガに伝えていた。そしてオルガは全員に伝えるように

『いいからお前ら!!テイワズの傘下に入るためにもマルバの野郎とタービンスの連中に俺たちが唯のガキじゃねえことを見せつけてやるぞ!!』

オルガの言葉に鉄華団の面々はヤル気を出し、各々の仕事に取り組むのだった。ライはオルガの言葉と鉄華団の様子を見て少し懸念を感じていたが今言うべきことでもないため今は自分のやるべきことに集中しようと操縦桿を握るのだった。そして、ハッチが解放されてMSが出撃していった。

「三日月・オーガス、バルバトス出るよ」

「昭弘・アルトランド、グレイズ出るぜ!」

「ライ・アルトリウス、アマツ出撃する」

イサリビから3機のMSが出撃すると、ハンマーヘッドの方でも3機のMSが出撃していた。ハンマーヘッドから出撃してきたMSはピンクとダークブルーに染められたテイワズを代表する汎用MS『百鍊』二機と、背部に巨大なブースターユニットを備えた高機動MS『百里』。百里が先行してイサリビに向けて攻撃しようとブースターを噴かせると一気に距離を詰めようとするがその進行方向にバルバトスが移動すると装備している『300mm滑空砲』を百里に向けて砲撃

するも百里はそれを難なくかわしつつライフルをバルバトスに向けて連射してくる。三日月はライフルの射撃に当たらないようにかわしつつ百里に接近していた。

『じゃあそっちの相手は2人に任せるね』

『お、おうー』

三日月は昭弘とライにそれだけ通信を入れるとすぐに切つてバルバトスは飛び出していき百里をむかえうとうとした。しかし勢いよく飛び出したものの、バルバトスは苦戦を強いられた。

『ちよこまかと・・・ウザいな』

三日月は百里に向けて滑空砲を何度も放つが通常MSが使用するライフル系の武器に比べ威力は絶大だが大型故に小回りがきかず百里のような機動力の高い相手には不利な武器であるためその砲撃はカスリもしなかった。その上バルバトスは元々300年前の機体な上CGSの基地動力源としてろくに整備せずに放置されていたために劣化しており本来の性能が出せないでいた。鹵獲したグレイズのパーツなどを使って応急処置してあるものの満足なスペックに至っていないのが現状である。

しかし、その三日月を相手している百里のパイロットである『ラフタ・フランクランド』もまた苛立っていた。

『このおーいい加減墮ちなさいよ!!』

バルバトスを相手にスピードで翻弄することは出来ているのだが戦闘が始まってから一度も致命打を与えることが出来ていなかった。それはバルバトスの動きに原因があった。

ぬるりと、まるで生物のように有機的に動き、直撃を避けている。その独特なマニュアルバーを生じさせているのは『阿頼耶識システム』の恩恵だった。

パイロットの脊髄にインプラントされた有機デバイスを紹介して機体とパイロットを接続し、機械的なプログラムに縛られない生物的な操作を可能とするこのシステムは、地球圏では忌み嫌われ非合法的な少年兵やヒューマンデブリに対し施されることが多かった。しかしその効果は絶大で、全くMSの操縦を習ったことがない人間でも即座に

熟練のパイロットのごとく機体を扱うことが出来る。またこのシステムは施術の回数が多いほど伝達される情報が増加し、そして本人の反応速度も向上する。三日月はこれを三回受けており、本人の鍛え上げた技量も相まって、圧倒的に不利な状況にありながら互角の戦いを繰り広げるほどの力を与えていた。

『邪魔をするなよ』

『あんたがあたしたちの邪魔をしてるのよ！』

一方的に見えた三日月とラフタの戦いだったが、その実は膠着状態を迎えている。

そして昭弘の方であるが、

『中々しぶといね』

『ここを任されたんでなあ！あいつに!!』

三日月に対しライバル心のようなものを抱いている昭弘は、彼からここを任されたという状況を、実力を認められ信頼されたと判断していた。元々責任感の強い少年であり、その上でヒューマンデブリとして使い捨ての駒のごとく扱われていた自分に信を置いてくれたことに対し、全力で応えねばという意志を持ったのだ。

故に死力を尽くして食い下がる。それは技量の差を覆すとまでは行かないが、アジの百錬を足止めするには十分な成果を出していた。

『いい加減！』

百錬が振ったブレードが直撃し、グレイズ改の頭部が大きくひしゃげ、機体が仰け反る。

『ま、まだだと言った！』

ぎぎいと軋みながらグレイズ改の左肩後方にマウントされていたバズーカが起きあがり、砲口が百錬へと向けられた。

『くっ！』

極至近距離からの不意打ちはしかし、かろうじて回避された。再び距離を取った二機は仕切直しをした。そしてライとアミダの方はいいと……

『随分としぶといなっ！』

『あんたも中々やるじゃないか！久しぶりに熱くなってきたよ!!』

MSの戦いの中で最も苛烈な戦いをライとアミダは続けていた。アミダのピンクに染められた百錬の片刃のブレードとライのアマツの太刀が何度も刃をぶつけ合い火花を散らせていた。

アマツの袈裟斬りに振り下ろした刀を百錬はブレードで受け流すと反対の手に握っていたマシンガンの銃口をアマツのコックピット部分に向けて撃とうとしたがアマツは百錬の胴体を蹴って距離を取ることでマシンガンの射程から離れたかと思えば距離を詰めて斬りかかる。

『いいねえ！子供だと思っていたら中々の腕じゃないか!』

アミダは笑みを浮かべながらブレードで斬りかかるのを今度はアマツが刀で防ぎそして返す刀で斬りかかるのを百錬は紙一重でかわしながらマシンガンを撃つ。こうして何度も2人は斬り合い、撃ち合い、かわし合うなどして互いの力をぶつけ合っていた。

その様子をイサリビとハンマーヘッドで見ていたオルガと名瀬たちはそれぞれ感じている思いは違うがどちらも共通しているのは戦っている相手の強さに驚愕していることだろう。

「まさかライの奴と互角に戦える奴がいるなんてな・・・」

格納庫に移動していたオルガはまさかライが苦戦するとは思わず苦虫を噛んだような顔をしていた。

ライの実力は鉄華団の誰もが認める程であるの三日月すらも彼には勝てないと言わしめる程だ。現にギャラルホルンとの一騎打ちの際には相手のグレイズを一撃で仕留めた。そんなライが互角に追い込まれるなど予想外だがそれほどタイワズの力があるのだと考えると地球に向かうためにも何としても傘下に入らなくてはならないと再度思わされた。

「オルガ！こっちは準備できたぞ！」

「ああわかった！」

MW（モビルワーカー）に乗っているシノがオルガに声をかけてきたのでオルガはそれに返事をしてそちらへと向かう。オルガたちは三日月たちが戦っている間に次の作戦に取り掛かるのだった。

そしてハンマーヘッドの方では名瀬が思わず冷や汗をかいており、ハンマーヘッドのクルーたちは何も言えないでいた。

「ガキの集まりだと甘く見ていたがこいつは想像以上にやるみたいだな」

最初はおいたしたガキどもにお仕置をしようと考えていたが思った以上に鉄華団がやることに名瀬は驚いていた。特にアミダと戦っているアマツのパイロットに名瀬は興味を抱いていた。

アミダは圏外圏で最強クラスの名付き(ネームド)パイロット『ルージユのアミダ』として名が知れ渡っておりその実力は名瀬が知る限り地球圏のグラハム・エーカーやゼクス・マーキス、セルゲイ・スミルノフなどのエースパイロットらにも引けを取らないと思っている。そんなアミダ相手に互角に相手取っているのだからそのおど。

しかも相手の機体は300年前の厄祭戦時に開発されたヤマトフレームのアマツ。防御力を高めつつ機動力を確保しているロディフレームと違いバルバトスのようなガンダムフレームを製造する試作フレームとして『ツイン・リアクターシステム』やガンダムの武装などを搭載されたヤマトフレームはガンダムフレーム以上に操作性に難があり現在では基本的に乗り手が限られておりデブリ帯で見つけられたとしてもリアクターを回収するだけでフレームが使われることは無い

そんな機体を使った上でアミダと渡り合っている相手に名瀬は警戒を抱かせるのに十分だがそれと同じくらいにどんな奴なのか興味がないでいた。そんなことを考えているとハンマーヘッドのブリッジクルーの1人である『エーコ・タービン』が慌てた様子で声をかけてきた。

「名瀬！ここら一带に時空震の予兆が発生したよ！」

「なに、こんな時にか!? チツ、アミダたちとガキ共に連絡して急いでこの場から離れさせろ！」

名瀬は想定外の出来事に驚いたがすぐに鉄華団を含めてこの宙域にいる全員にその事を知らせるように指示を出すと鉄華団もそれを聞き入れMSに乗っていたパイロットたちは戦闘を中断しそれぞれ

の旗艦であるイサリビとハンマーヘッドの側まで戻ると次元震が発生し、凄まじい光が辺りを輝かせその光が収まると次元震が発生した場所の中心にダモン級次元獣たちと見たことも無い戦艦と五機のロボット、そしてこれまた見たことも無い黒褐色の生物的な機体や同じような黒褐色の小さな戦闘機がいた。



次元震から現れた戦艦——『ゴディニオン』のブリッジでは突然の出来事に動揺しクルーたちと五機のロボット——『アツシュ』に乗っているパイロットたちはどうすればいいか分からなくなっていた。そんな彼らの前では彼らの世界の人類の敵である謎の『ウルガル』が次元獣との戦いを始めていた。

『ウルガルと戦ってるのは一体何なんだろう・・・』

赤いアツシュ『レッド5』に乗っている『ヒタチ・イズル』はウルガルと戦っている次元獣のことを知らないためその正体が何なのか気になっていた。

『今はそんなこと気にしてる場合じゃないだろ！俺たちはさつきまでウルガルたちと戦ってたのに全く別の場所にいるんだぞ!』

青いアツシュ『ブルー1』のパイロット『アサギ・トシカズ』はこんな状況だというのに呑気なイズルに対してツツコミを入れる。

彼ら五機のアツシュによって結成されたチーム『チームラビッツ』と母艦であるゴディニオンは全地球防衛軍通称GDF参謀次長コミネ大佐は木製軌道第三小惑星グリッドB25く27の位置にウルガルの定期航路が発見されました。これは補給ルートであると高い可能性があるために今回八個を叩くことを作戦目的としていた。しかしそこにいたのは補給部隊ではなく精鋭部隊だった。想定外の出来事に対してコミネはこの状況にヤケになって出撃命令をだした。想定外の出来事と上に実戦経験の乏しいイズルたちは思うように動くことも出来ず一方的に攻撃されもうダメか誰もが思ったその時、次元に歪みが生じたかと思うと周囲を光が包んだ。そして光が収まったかと思うと彼らが見た場所とは全く異なる場所に移動し周囲にはウルガルの他に見たことも無い戦艦とロボット、そして化け物がいた。

『とにかく今はタマキをピット艦に戻そうぜ！このままじゃタマキはいい敵の的になっちまうぜ！』

『うう〜ローズ3が全く動かないのら〜』

コミネの無策な指示によって敵に突っ込んだ『ローズ3』はウルガルの容赦ない攻撃によって推進器や武装を破壊されたことにより身動きが取れなくなってしまうローズ3のパイロット『イリエ・タマキ』は涙目になり、『ゴールド4』のパイロットである『スルガ・アタル』はタマキとローズ3をピット艦に戻すよう提案する。その提案にチームラビッツの全員が賛同し『パープル2』のパイロット『クギミヤ・ケイ』が引いてローズ3をゴディニオンのピット艦へと連れていき、レッド5、ブルー1、ゴールド4が2人がピット艦に戻る間ウルガルたちの様子を見ていた。

ウルガルたちは次元獣に対して攻撃を仕掛けるが戦闘機タイプのウルガルの攻撃は全く効かず次元獣に蹂躪されるが、人型タイプは次元獣に対して掌に内蔵されているビーム砲で反撃し次元獣もまた波動スピンソーで攻撃するなどして互いに目の前にいる敵を倒そうとしているように見えた。

イズルたちは目の前の光景に目を離せずそれぞれの武装を構えながら固唾を吞んでウルガルと次元獣の様子を伺っていると1匹の次元獣がイズルたちの存在に気づくと咆哮を上げながらレッド5、ブルー1、ゴールド4へと突撃してきた。

『こっちに気づいた！』

『俺が迎撃してやるぜ！』

イズルが近づいてくる次元獣に気づくとスルガのゴールド4が右腕そのものである超長距離狙撃型ビームライフル『88式90ミリ70口径高位荷電粒子砲』の照準を次元獣に合わせると狙い撃った。荷電粒子砲をくらった次元獣は爆散した。しかしそれによって他の次元獣や次元獣と戦っていたウルガルもまたイズルたちアッシュの存在と元々この場所にいた鉄華団とタービンのMSの存在に気づくと戦闘をやめ突如アッシュやMSたちに襲いかかり始めた。

『何で全員戦闘やめて俺たちに襲ってくるんだよ!?!』

『俺が知るかよ！』

『とにかく僕達で何とかしよう！』

迫ってくるウルガルと次元獣に対して戦闘を開始するイズルたち。レット5はブースターを噴かせながら『88式ビームキャノン』二丁によるビーム連射で次々と撃ち落としていき、ブルー1は『88式突撃刀アサルトブレード』で敵を斬り伏せていき、ゴールド4は右腕の荷電粒子砲だけでなく右肩のランチャー『87式高機動誘導弾マジックワンド』と左腕に装着されている機銃『86式40ミリ45口径輻射誘導光子共振式速射砲』をひたすら連射した。アツシユに搭載されているシステム『JURIA—SYSTEM』による搭乗者の生存本能による闘争本能の高まりによってアツシユの戦闘能力が上昇する。これによって実戦経験の乏しい『チームラビッツ』の面々はアツシユの性能を引き出すことが可能なのである。

『お前、邪魔だよ』

バルバトスは滑空砲の銃口を次元獣の口の中に突っ込むと全弾ぶち込み内側から爆散させると使い物にならなくなった滑空砲を捨てるとメイスを構えると向かってくるウルガルと次元獣にメイスを容赦なく叩きつけ絶命させていく。突撃していくバルバトスを援護するようにイサリビは『対空砲』、『二連装主砲』を昭弘のグレイズ改はライフルで三日月に迫るウルガルと次元獣を落としていく。

アマツは太刀と小太刀で敵を斬り裂きながら、背中にジョイントさされている2対のバルカンにより死角になっている敵を乱れ打ちする。

タービンスの面々もMSの百里や百鍊が先行してウルガルと次元獣を相手取りハンマーヘッドがその援護を行っていた。

そして後方で待機していたブラッディガルのMSたちが出撃し鉄華団、タービンス、ゴデイニオンのフォローにまわっていた。

そこからの戦闘はあつという間に終わりを告げた。この宙域に現れたウルガルと次元獣は全て爆散したことで戦闘は終了した。念の為に警戒は続けられているが新たな敵の姿などは周囲には見られなかった。

「終わった、のか？」

「一応はな。だが問題はこれからだ」

ユージンは不安を感じながらオルガに尋ねるとオルガは苦虫を噛み潰したような顔をしながら答える。タービンスと協力して次元震から現れた化け物連中を倒したが元々はタービンスに鉄華団の力を見せつけるための戦いだったのだからコレで戦いは終わりという訳には行かなかった。しかし先の戦闘により昭弘のグレイズは半壊した上に武装もバトルアツクスのみとなり、三日月のバルバトスは装甲の一部が破損し主武装であるメイスの奥の手であるパイルバンカーも使用済みであった。そしてライのアマツは見た感じでは損傷がないように見えるが強引な操縦やバルバトス同様マトモな整備をされていなかったことにより機体の関節部のあちこちが摩耗しこれ以上戦闘を続ければ腕や足が破壊されるかもしれない。

それに対してタービンスの面々はまだ余裕があるように見られた。このまま再度タービンスと戦うことになれば高い確率で鉄華団が敗北するだろう。そうオルガたちが考えているとハンマーヘッドから通信が届いた。

『ようガキども』

「・・・何の用ですか？」

『なにお前さんたちがただのガキじゃないことは十分見させて貰ったぜ。それにこれ以上の戦闘は互いに出る被害は多くなつちまうし次元震から現れた連中のこともあるからこつちとしてもこれ以上の戦闘は避けたいんだよ。それに』

『お前さんたちと少し話しをしてみたくな』

思わぬ形で鉄華団とタービンスとの戦いは終わりを告げた。それがどのような意味を持つのかは名瀬たちタービンスの面々を除いて知るものはいないのだった。

第9話 テイワズ

ハンマーヘッドの応接室にてそれぞれの艦の代表者たちが集まっていた。イサリビからはオルガ、ビスケット、ユージン、三日月、ライ。ゴディニオンからは艦長である『スズカゼ・リンネ』とGDF総合参謀本部所属の情報士官『アマネ・ハヅキ』。そしてブリューナクからは傭兵組織ブラッディガルのリーダーであるレイブンと副官のアルカがやってきていた。

名瀬はまずスズカゼたちにこの世界の情勢について話した。地球と宇宙に住む人々のこと、次元震のこと、そして人類に敵対する存在の事などあらゆることについて説明した。説明を聞いたスズカゼとアマネはあまりに現実離れしている出来事に脳が処理しきれないが実際に起こっている出来事のために何とか理解することができていた。

そしてスズカゼたちに説明を終えた名瀬は次にオルガたちの話を聞くことにした。

元々マルバの依頼で鉄華団と争うことになった名瀬たちタービンズだがウルガルと次元獣と戦っている時、マルバが鉄華団を囮にして逃げるように言ってきた。その際に鉄華団の少年たちに阿頼耶識の手術が施されていることを喋ってしまった。阿頼耶識の手術はじゃんけんに負けるのくらいの確率で失敗し、身体に障害が残る。また成人の肉体では使用されるナノマシンが定着せず、施術は未成年に対してしか行うことが出来ない。かてて加えて施術に置いては麻酔などを使用する例も少なく、最早拷問に近いものでしかなかった。当然ながらいくらMS類の操縦が可能になると言っても、自らそれを望んで受ける人間などほとんど存在しないと断言している。

そんなものを受けさせられた上扱いも悪いとなれば、それは下克上の一つも考えたくないだろう。名瀬たちに同情めいた心が芽生えるのも当然と言えた。それにアマダたちに対して十分渡り合え次元獣相手にも怯まず戦うその度胸やパイロットの腕も悪くない。頭の中でマルバとオルガたちを天秤にかけた結果、天秤はオルガたちに傾き

名瀬はオルガたちを受け入れることにした。

「マルバの奴は資源採掘衛星の鉱山で、借金返すまで働いてもらうことにした。まあ色々とフカシもかましてくれたことだしな」

名瀬はタービンズに鉄華団から財産を取り戻してくれるよう依頼してきたマルバがどうなったかについてオルガたちにそう告げた。

戦闘が終わった後、マルバがCGS時代に鉄華団の少年たちにどのような扱いをしていたのかをレイブンから教えられ、更にタービンズに依頼する際に自分が一方的な被害者でオルガたちがあくどいか、あること無いこと織り交せて話を盛っていた。あの様子ではもしかして財産を取り戻した後、踏み倒してとんずらする可能性もあっただろう。

「それに俺の『女房達』にも色目使ってやがったからなあのおヤジ。ちいと念入りにお仕置きしておいた」

にやりと笑う名瀬。オルガたちは何とも言えない様子である。

タービンズの構成員は名瀬を除きほぼ全員が女性であり、しかも過半数が名瀬と婚姻関係を結んでいる。名瀬曰く「俺のハーレムだからな」とのことだが、スケールが大きすぎてオルガやスズカゼたちは圧倒されるしかなかった。

それはさておいて、名瀬は鉄華団をティワズの本拠地、大型惑星間巡航船『歳星』へと招き、ティワズの傘下に薦めると言った。

またスズカゼたちゴデイニオンのクルーたちも今後のことを考えるためにも一度歳星に来てもらいそこで落ち着いてもらいこれから先どうするかを考えてもらうために案内することにした。

「ありがとうございます」

「ご迷惑をお掛けします」

「まだどうなるかは分からないがな。ま、そいつは歳星についてからだな」

オルガとスズカゼは名瀬にそうお礼を告げた。名瀬はそれに対して気にせず話は歳星についてからだと言った。

それから鉄華団は今までのギヤラルホルンとの戦闘で手に入れたギヤラルホルン純正のリアクターやグレイズのフレームなどをター

ビンズに卸したりスズカゼは自分たち以外のMJP機関に関係するもの達がこの世界に来ていないかなどを尋ねるなど細々としたことを話し合った後、イサリビとハンマーヘッド、ブリューナク、ゴディニオンは歳星へと進路を取るのだった。



歳星に向かう間、何もせずのんびりと過ごしているわけではなかった。

それぞれの整備班は先の戦闘によって損傷したMSやアツシユの整備にかかりきりだった。アツシユはそれぞれの機体に専用のクルーがおり現在クルーたちが損傷したアツシユの修理に取り掛かっており、鉄華団たちは火星軌道上からここまで来る際にMSやイサリビは今まで戦闘で受けてきたダメージを受けたままちゃんとした整備をしてこなかったために歳星で本格的な整備をしてもらえないという話になったのだが、それでも放っておいていいことでは良いものではない。そのため鉄華団の整備班と手伝いとしてタービンズとブリューナクの整備班がイサリビにやって来ていた。

鉄華団の整備班は彼らからMSの整備の仕方などのやり方を色々教えて貰いながらバルバトスたちを整備する。

またMSパイロットたちはブリューナクにある機体を実稼動させなくとも操縦を疑似体験出来るシミュレーションプログラムを使用して特訓していた。先の戦いで決着を付けられなかったアマダとライ、ラフタと三日月が何度も対戦しており、昭弘の他、シノのような鉄華団の中でMSパイロットじゃないが予備のパイロットを見繕うために鍛錬を重ねていた。

これはレイブンがオルガたち鉄華団に対して助言したことが切っ掛けである。現在の鉄華団の戦闘力は三日月、昭弘、ライの3人に頼る形になっている。疲労や怪我、病気などで満足に動かせなくなる可能性を考えれば予備のパイロットを用意することは考えた方がいいととりあえずMSに興味のある者にやらせてみようというオルガとビスケットはその意見を聞いてそう判断した。

また、イズルたちアツシユのパイロットたちもそれに触発されてゴ

デ이니オンにてシュミレーターを用いた特訓をしたり、戦闘経験のある彼らに戦い方を聞いたりなど自らの技量をあげるために色々なこととに手を出していた。

そのようにして鉄華団、ゴデ이니オン、タービンス、ブラッディガラムの面々はテイワズに着くまで思い思いに過ごしていると数日後、テイワズに辿り着いた。

テイワズ。表向きは圏外圏を牛耳る大企業であるが、その実態はほとんどマフィアと言ってもいい。表裏双方の社会に広く勢力を広げ、その影響は地球圏も無視できないほどのものだと言われる。

その本拠地である歳星は、後部に小惑星を利用した工場区画を、中央に都市区画をもつ巨大な船だ。そこにたどり着いたオルガたちとクーデリア、スズカゼ、アマネ、レイブ、アルカはテイワズの長、『マクマード・バリストン』と面会を果たす。

とても宇宙船の中とは思えない広大な屋敷にて、彼らを案内した名瀬はマクマードにオルガと義兄弟の関係を結び、鉄華団を丸ごとテイワズの傘下に納めようと言った。

オルガやクーデリア、そして三日月と幾つか言葉を交わしたマクマードは彼らをそれなりに気に入ったようで名瀬とオルガが義兄弟の杯を交わすのを認め、さらにはバルバトスを無償で整備するよう手配した。また、この世界の人間ではないがMJ P機関が持っているアッシュや戦艦の一部の情報とウルガルについての情報をテイワズに渡すことを条件にこの世界にいる間の後ろ盾の1つとなりこの世界にMJ P機関がないかの情報などを提供することになった。

一息ついた鉄華団とゴデ이니オンのクルーたちは一時の休息を得ることにした。火星から歳星に来るまで気の休まる時がなかった鉄華団と突然別世界に飛ばされたゴデ이니オンのクルーたちはようやく落ち着けることに安堵し共に繁華街へと繰り出し、大いに盛り上がったようだった。その結果、二日酔いや酔っ払いに絡まれるなど様々な理由でダウンするものがいたのはご愛嬌である。



オルガたちが繁華街へと繰り出していたのと同じ頃、ライはブラッ

デイガラムのリーダーであるレイブンに誘われバーへと訪れていた。「いや悪いね本当なら君も鉄華団の子たちと一緒に飲みたかつたろうに」

「いえ別に問題は無いんですけど・・・何か僕に用でしょうか？」

バーのカウンターにて並ぶように座っているレイブんとライ。レイブンは酒の入ったグラスを片手に揺らしながら笑みを浮かべていた。ライはそれを聴きながらなぜ自分を呼んだのか理由を聞いた。

「まあ大したことじゃないんだけどね」

レイブンはグラスに残っている酒を一息で飲み干してから次の言葉が続けた。

「単刀直入に言うとうちに入らない？」

「はい？」

思いがけない誘いにライは戸惑った。何か鉄華団の面々には話せないような内容だと思っただけだがまさかのことで予想外だった。

「君が鉄華団に所属していないことは既に知っている。その事に疑問はあるがそんな些細なことは置いとくとしてだ。君ほどのMSパイロットの腕を持つている存在を放っておくなんてありえないんだよ。現に名瀬さんやマクマードさんだって君を勧誘しようと動き始めているしね」

今の時代、MS、KMFなどの優秀なパイロットというものは貴重なものでありそんな存在が国や組織の中にもいるだけでも抑止力や戦力など様々な事で役に立つ。特に二つ名つきのエースパイロットたちの名は誰しもが知りその力を恐れて戦おうなどと考えるものは一部の例外を除いて存在しない。そんな二つ名つきのエースパイロットの1人であるアミダと互角以上に戦ったライという存在を配下に加えることが出来ればそれは間違いなく組織の力を上げることになるだろう。

「せっかくのお誘いですがお断りさせていただきます。そういった組織に従うのは性に合わないものですし」

「そうかいそれなら仕方がないね。今回は諦めるよ」

「そう簡単に諦めてはくれないんだね」

「それはそうだようちの組織には敵が多いんだから優秀な人材を手に入れることができるなら積極的にもなるつてもんだよ」

ライはレイブンのその言葉に思わず苦笑するがレイブンはそんなことを気にせず笑いながら酒を飲む。そしてレイブんに釣られるようにしてライも酒を飲み始めそのままレイブンとライは朝方まで飲み明かした。なお、2人とも酒を浴びるほど飲んだというのに次の日二日酔いなどなく普通に過ごしている姿を見たもの達は2人を化け物のようなものを見るものがいたのは別の話である。

そして鉄華団やタービンスなどが歳星についてから数日が過ぎた。正式にテイワズの傘下に加わることになったオルガたち鉄華団は名瀬と兄弟の盃を交わした。儀式に参加しているのはクーデリアを除いて全員がテイワズの幹部であり新参者である鉄華団を見定めるように見るものもいれば気に食わない目で見えるものいるなど様々な目で見ているが共通しているのは鉄華団に対してある程度の興味を持ってのことだろう。

そんな鉄華団は儀式を終えてから数日後にマクマードの依頼を受け、タービンスを先導の元ゴディニオンと共にドルトコロニーへと資材を届けるために歳星を発つ。クーデリアを狙うギャラルホルンに目をつけられないように正規航路ではなくタービンス御用達の裏航路を用いて航海することになった。彼らが地球に向かうまでの間に多くの敵が待ち受けていることを、そしてこの先の航海と地球にて新たな出会いが待っていることをこの時の彼らが知る由もなかった。

そして物語の舞台は宇宙から地球へと戻るのだった。

第10話 信頼と覚悟と 前編

エリアーシンジクゲットーの地下に存在する黒の騎士団のアジトにてゼロは黒の騎士団に正式に加わることになった扇グループの面々にZEXISに参加することを伝え、ZEXISに参加するメンバーとエリアー11に残って黒の騎士団として活動するものと分けた。連絡役として新しく黒の騎士団に入団した元報道局のプロデューサーであるブリタニア人のデイトハルト・リートが残された。ブリタニア人であるために扇グループの面々からは納得できなかったがそれを取り合うこともしない。無論、彼らをルルーシユは微塵も信用していないため監視役として何人か他の騎士団のメンバーを紛れ込ませているため不振な行動を起こせばすぐにでも始末できるようにしていた。

妹であるナナリーとリリーシャにはAEUに留学する事になったので、しばらくの間エリアー11を離れることを伝えた時は悲しそうな顔をされたためにルルーシユは胸が張り裂けそうになったが強靭な精神力で何とか耐え、メイドの篠崎咲世子とマリーカ・ソレイシイ、執事であるセバス・チャンとウォルター・C・ドルネーズの4人の身の安全を頼み、屋敷と学園の防衛システムを完璧なものにした。

そしてエリアー11のサガミ湾沖にてZEXIS一同は黒の騎士団と、そしてその組織を率いる長であるゼロと対面するのであった。



マクロスクオーターのブリーフィングルームにてZEXISに正式に参加することになったメンバーが一同に集まったのだが、彼らは黒の騎士団のメンバーがブリーフィングルームに入ってくると彼ら——主にゼロ——に注目していた。あるものは睨むように、あるものは興味深そうに、あるものは気に食わなそうに、そしてあるものは恐れるようになど様々な感情が籠った視線を向けているがゼロたちはそのような視線を無視して話し始める。

『・・・では、改めて挨拶しよう。私が黒の騎士団総帥のゼロだ』

「(この男がゼロ・・・)」

「(胡散臭さを仮面とマントでパッケージしたような奴ね)」

「質問！何で仮面をかぶってるんだ？」

「(こういう時、ワツ太は助かるよな。聞きづらいこともズバツと切り込んでくれる)」

「(子供故の純粹さというやつですね。僕たちには無い武器です)」

マジンガーZのパイロットの兜甲児とチームD所属のノヴァイーグルのパイロットである飛鷹葵がゼロに対して心の中でその印象を呟いていると竹尾ゼネラルカンパニーの小学生社長にしてトライダーG7のパイロットである竹尾ワツ太がその場にいる全員が聞きたいが聞きづらいことを聞いてくれた。それを聞いたチームDのノヴァライノスのパイロットの加門朔哉とノヴァエレファントのパイロットのジョニー・バーネットは子供らしい純粹さに感心していた。『私にも事情というものがある。この仮面についての詮索は遠慮してもらおう』

「えーっ！気にするなって言う方が無理だよ！」

「社長・・・あまりそういう事をおっしゃるのは・・・」

『フ・・・構わんよ。確かに不審に思わない方が不自然だからな』

ゼロはワツ太の質問に答えなかった為ワツ太が文句を言うのをゼネラルカンパニーの専務である柿小路が止めようとするが、ゼロは特に気にした素振りも見せない。

『だが、私もZEXISの一員として今後は行動する。私の存在が信じられない、許せないとする方もいるだろうが、私は行動により身の証を立てるつもりだ』

「そうまで言われちゃ、それを信じるしかないか・・・」

「まあな。それぞれの事情を詮索したら、ここじゃきりがないしよ」

「訳ありはお互い様ってやつだ」

甲児とゲッターチームのベアー号のパイロットの巴武蔵、ジャガー号のパイロットの神隼人はゼロの決意とも取れるようなその言葉に納得した。ZEXISに所属する組織には黒の騎士団を含めソレスタルビーイングやゲッターチーム、ダンクーガなどは三大国家と敵対

する組織故にそういった隠し事や何らかの思惑を持つことなどは仕方がないだろう。ならばZEXISとしてのこれからの行動によって互いに信頼を勝ち取ることしかできない。

『もし、私が君たちに不利益な行いをしたのなら、その時は遠慮せずに撃てばいい。それでよろしいかな、ソレスタルビーイングの諸君も？』

「了解だ。だが、当分の間はあんたたちをマークさせてもらう。窮屈だと思いが勘弁してくれ」

『好きにするがいい(もしもの時には影を使つて始末するか、ギアスを使い俺の操り人形にすればいい)』

『(だが、それらは最後の手段だ。もし万一その事がバレれば俺は確実にZEXISの敵になるだろう。最悪ギアスの事がバレれば黒の騎士団に亀裂が入つてしまうだろう)』

ゼロはいざという時は撃たれる覚悟はあると伝えるとソレスタルビーイングのガンダムマイスターの1人であるガンダムデユナメスのパイロットであるロックオン・ストラトスは念の為監視は付けるとゼロに伝える。ルルーシュは内心もしもの時の事を考えるがそれは最終手段と考える。

「では我々も自己紹介させていただきます。私は黒の騎士団参番隊長長モニカ・クルシェフスキーです」

「黒の騎士団式番隊隊長東龍騎です。ガンダムAGE-1のパイロットをしています」

「黒の騎士団七番隊隊長クリスティア・リンベル。MSのパイロットよ」

「黒の騎士団十参番隊隊長の草薙焰だ。KMFのパイロットをしている」

「えっと、新しく黒の騎士団に入った扇要です」

「玉城真一郎だよろしく頼むぜ」

「紅月カレン。この前の戦闘では協力に感謝する」

モニカが代表してそれぞれ自己紹介をする。ZEXISのメンバーは黒の騎士団はエリアー1で結成されたもので構成員の殆どは

エリア11の元日本人で構成されているのだと先入観を抱いていたためにブリタニア人がメンバーの中にいるとは思っていなかった。

『我々の敵は力無き者たちを虐げる強者だ。そこにブリタニア人も日本人も関係ない』

「成程な。確かにあの宣言の時そう言っていたもんな」

ゼロの言葉にデュオは納得したように他のメンバーも取り敢えずの理解が出来た。しかし、内心同じ組織に敵対する国の人間がいることに玉城やカレンは不満を感じているが表立って言わないだけだった。

「君がああ赤いKMFか」

「これからは同じ仲間として一緒に戦おうな」

クラッシャー隊所属のゴッドマーズのパイロットである明神タケルとコスモクラッシャーの射撃手担当の伊集院ナオトはこれから一緒に戦っていく仲間として友好的に関わろうとするのだが・

「……………」

「何だよ……怖い顔してさ」

「わからないか？そいつはお前たちに嫉妬してるんだろうさ」

「嫉妬……？」

声をかけた途端カレンに睨まれたため、理由も分からないためコスモクラッシャーの操舵手の木曾アキラは困惑するが、ゲッターロボのジャガー号のパイロットである神隼人がその理由を言うとタケルはその理由が分からないでいた。

「大時空震動で、この世界には二つの日本が生まれた。その片方はとりあえずは平和な国……。もう片方はブリタニア・ユニオンに支配された国……」

「支配された日本に住んでた身としちゃ、もう片方の日本の連中は甘ちゃんに見えるだろうな。」

隼人が話した理由を聞き、同じゲッターロボのイーグル号のパイロットである流竜馬も理解出来たのかそう言う和日本とエリア11に住んでいるもの達は気まぎれなりその場を沈黙が支配してしまっ

た。

「・・・やめろ、カレン。それは彼等の責任じゃない」

「わかってる・・・。わかってるけど・・・」

扇はこれ以上周りの雰囲気が悪くさせないために

カレンに注意する。カレン自身も扇が言いたいことと自分が思っているのは単なる八つ当たりでしかないと言頭では理解しているが心はそう簡単に整理することが出来ないでいた。

「しかしよ、俺も当時は片方の日本を恨んだぜ。元々の世界は違うとはいえ、同じ日本人をどうして助けてくれないんだよ・・・ってな」
「文化を同じくする隣国である2つの日本は当然、軍事同盟を結んでいた。事実、突然のブリタニア・ユニオンの侵攻に対し、すぐに援軍を送ることが決められたさ」

「でも、極東事変って、あつという間に終わりましたよね・・・」

「もう片方の日本の参戦により当初は泥沼化が予想された戦局だったが、それは呆気ない幕切れを迎えた」

「徹底抗戦を主張していた当時の首相、枢木ゲンブの突然の自決か・・・」

「そうだ。抗戦を唱える軍部を諫めるためのものだったと言われるが、その真相は未だに不明・・・一つだけ確かなのは指導者を失った日本は指揮系統の混乱から一気に崩壊・・・援軍も焼け石に水の状態になり、もう片方の日本は撤退せざるを得なかったというわけだ」

玉城が言うように玉城たちのいる旧日本エリアーとスーパーロボット軍団のいる日本はかつて軍事同盟を結んでおりエリアーがブリタニア・ユニオンに進行された時は当然日本も援軍を送つてくるとエリアーの多くの人々は考えていたのだが扇と隼人に言うように枢木ゲンブの自決によって旧日本はブリタニア・ユニオンに支配され植民地エリアの1つ、エリアー1となってしまうことだろう。甲兎が言うように旧日本とブリタニア・ユニオンの戦い『極東事変』はこうしてあつという間に終わりを迎えてしまったのだった。

「さらにわかんねえのはよ、どうしてブリキ野郎が、そのままもう1つの日本に攻め込まなかったかだ」

「ブリタニア・ユニオンの侵攻目的はサクラダイトだからな。それが

果たされた以上、そこで戦果は十分だったんだろう」

「(それだけとは思えん・・・ブリタニア・ユニオンの軍事行動・・・特に他国への侵攻には不可解な部分が多々あるからな・・・)」

玉城はブリタニア・ユニオンが何故甲兎たちのいる日本が侵攻されなかったのか不満を感じるが扇はブリタニア・ユニオンは日本にあるKMFに使用されるレアメタル『サクラダイト』を目的に侵攻してきたのだからもう1つの日本に進行しなかったと予想しているが隼人は1人、ブリタニア・ユニオンの他国の侵攻の目的があまりにも読めないため今まで支配したエリアには何らかの共通点があるのではないかと考えていた。

「・・・」

「仕方ないんだ、カレン。昔は向こうの日本も自分達の国を守るのが精一杯だったんだから」

「でも・・・」

カレンは扇の言うことを頭では理解しているがそれでもブリタニア・ユニオンに支配され苦しんでいる自分たちを助けてくれなかったのにもう1つの日本で平和に暮らしていた日本人たちに対して八つ当たりではあるが恨んでいた。

「何だか複雑みたいね、あの人達・・・」

カレン達が話しているのを少し離れた場所で見っていたグレン団の一員であるヨーコ・リットナーは暗黒大陸の外の人間たちは同じ人間でも複雑な関係なのだろうと何となく察した。

「気に入らねえな・・・」

「どうしたのさ、アニキ？」

「あいつらが気に入らねえのよ」

「え？」

グレン団のリーダーでありグレンのパイロットであるカミナが険しい顔をしながらそんなことを言い出したため同じグレン団でありラガンのパイロットであるシモンは戸惑った。

「まず、第一に！あのカレンって女の乗ってるメカだ！何が紅蓮だ！俺様のグレンと被ってるじゃねえか！」

「はあ？」

「無茶苦茶な理屈ね・・・今日に始まった事じゃないけど」

カミナの無茶苦茶な理屈のような言葉にヨーコとグレン団のガンメンの整備士であるリーロン・リットナーは思わず呆れた。

「でも、アニキ・・・。名前が被ってるって言ったら、お互い様なわけだし・・・」

「だから、どっちが本家かを手っ取り早く決めてやるぜ！」

「って事は、つまり・・・」

「カミナの事だ。腕づくでやろうってんだろ？」

喧嘩腰なカミナを止めようとするシモンだが、既にやる気のカミナを止めることはできず、カミナの性格から武蔵と竜馬はカレンと戦おうと考えていると予想をつけていた。

「やめなさいよね。今日からは一緒にやっていく仲間なんだから」

「俺はまだ認めちやいねえ・・・！あいつらがグレン団に相応しいか、ついでに試してやるぜ！」

ヨーコはそんなカミナの勝手な行動でこれから一緒に戦っていく仲間たちとの間に問題を起こさないために注意するが、カミナはそんなヨーコの忠告を無視してカレンの紅蓮式と戦おうと意気込んでいた。

「さつきから聞いていれば、随分と勝手な事を言ってくれるじゃないか」

「んだと!？」

「何がグレン団だよ。あたし達は黒の騎士団だ・・・！」

カミナたちの会話が聞こえていたのかそれに反応したのかカレンが険しい顔をしながら近づいてカミナにそう言った。

「ちっ・・・！せっかく俺が仲間に入れてやろうってのに随分と突っ張るじゃねえかよ、おい！」

「やめようよ、アニキ。今日はアニキの方が悪いよ」

「シモンの言う通りよ。勝手に喧嘩を売るような事を言っというてさ」

カミナの勝手な言い分でカレンを怒らせたと思ったシモンとヨーコはカミナに落ち着くように言うがカミナは険しい顔をしたまま睨

んでいた。

「言っておくがよ。俺が気に入らねえのは、そっちの女だけじゃねえぞ。おい！その黒マント仮面！」

『私の事かな？』

カミナはカレンから視線を外すと少し離れた場所にいるゼロに指をさしながらそう言う。ゼロは反応したのかカミナに顔を向ける。そんなカミナの態度にモニカとクリスティアが気を悪くしたのかカミナを睨んでいた。

「スカしてんじゃねえぞ……！てめえの態度……それがこれから生死を共にしようって人間のものかよ！」

『この仮面についての非礼なら、既に詫びたはずだが？』

カミナが言っているのは仮面の事だと思っただけでゼロは既にその非礼を詫びていることをカミナに言うが、カミナはそれを否定する。

「そうじゃねえ……！てめえ……何か股に一物持ってやがんな！」

「それを言うなら、腹に一物よ」

「言葉つ戻は、どうでもいい！そんな奴と一緒にやっていくのは俺は御免だぜ！」

『（この男……他人に難癖をつけて自分の立ち位置を高めるタイプか？……違うな。どうやら、俺の裏を本能的なもので感じ取ったらしい）』

カミナの言葉の間違いをリーロンが訂正するが、カミナはそんなことを気にせず、ゼロが何か企んでいると感じたカミナはそんな奴とこれから先共に戦っていけないと言う。ゼロはその事からカミナが本能のようなもので自らの裏を感じ取っているのだと判断し、思わず仮面の下で険しい顔をする。

「言いたい事があるなら、言い返してみろよ！受けて立つぜ」

「フ……お前が口であのゼロに勝てるとは思えんな」隼人

「口の上手い下手じゃねえぜ。俺はいつだって自分の思った通りの事を言葉に乗せる！」

『……』

「こいつのように本心を隠して、上辺だけの野郎に負けるかよ！」

隼人の言うように単純にカミナが口でゼロに勝てるはずがないが、カミナにとつて勝ち負けなど関係なく、本心で語らないような奴を信用することが出来ないと言う。

『(俺の見立ては正しいようだ。この男・・・油断ならん)』

ゼロはそう内心で考えながらカミナに対しての警戒を上げていた。場合によっては始末することを一瞬考えたがそんなことをしても意味などないし実際に実行すれば、真っ先に疑われるのは自身であることから警戒するだけにしようと思えた。しかし、

「貴様、先程から黙って聞いていれば随分と勝手なことを言ってくれるなっ!・・・」

カミナのゼロに対しての態度に我慢ならないと言わんばかりにクリスティアは腰に差していたサーベルを抜くと、カミナにその剣先を向けた。

その突然の行動に周りにいた一部の人間が動揺し固まってしまうていたが、他の人間は何が起こっても対処できるようにしていた。

『やめろクリスティア』

「し、しかしゼロ様!この男はっ!!」

『クリスティア』

「っ!?!も、申し訳ありません・・・」

ゼロに止められたクリスティアは顔を蒼白させるとカミナに向けていた剣を鞘に戻すと、膝をつき、ゼロに向けて頭を下げていた。

一応は落ち着いたように見えたため、ZEXISのメンバーは少し安堵したが、クリスティアのように実行に移していないだけで他の騎士団のメンバーであるモニカや焰がカミナに対して殺気を向けていることからまだ安心出来ないでいた。

『部下が失礼したな。しかし・・・残念ながら、君たちに我々の事を理解しろというのが無理だったようだ』

「何っ!?!」

ゼロはカミナにクリスティアが剣を向けた事を謝罪するが、カミナたちに向けて挑発とも取れるような事を言ったため、カミナが再びつつかかろうとするがそれを無視してゼロは言葉を続ける。

『だが、今日からは私もこのZEXISの一員だ。余計な揉め事を起こすつもりはない。よって、ここは相互不干渉を貫く事を提案する』
「何だよ、その相互不干渉ってのは?！」

「つまり、お互いを無視するという意味だと思います」

ゼロが提案した相互不干渉の意味が分からずカミナを含め、一部のZEXISメンバーが頭を傾げるが、言葉から意味を察したグレン団メンバーの1人であるロシウが答える。

『それが互いのためだろう。・・・では、失礼する』

ゼロはそう言うのと部屋から退室していき、その後について行くようにクリスティア、モニカ、焰、龍騎もゼロと共に退室して行った。

「ゼロ・・・!」

「上等だ!そっちがその気なら、そうさせてもらうぜ!」

カレンたち他の騎士団のメンバーは突然の展開についていけず、その場に立ち尽くしていた。また、カミナも売り言葉に買い言葉といった感じでゼロの提案に乗ってしまった。

ZEXIS結成の幸先から2つの組織が衝突するという不安を感じる結果になってしまったが、この先どうなるかはまだ誰も分からない。しかし、そんな状況でも敵はやってくるのだった・・・

第11話 信頼と覚悟（後編）

ゼロが部屋を出たのをきっかけにほかのメンバーたちもそれぞれの母艦に戻るか、機体の整備を手伝ったり、交流を深めたりなど艦が出港するまでの間思い思いに過ごしていた。

そんな時、ソレスタルビーイングの旗艦である多目的MS輸送艦『プトレマイオス』にいるソレスタルビーイングの戦術予報士である『スメラギ・李・ノリエガ』から武装したブリタニア軍が接近している事を知らされた。

ZEXISのメンバーは直ぐに出撃しようとしてそれぞれの機体に乗り込もうとしたのだが、ゼロがそれに待ったをかけた。

ゼロ曰く、ブリタニア軍がやってくることは予想していたことであり、そのための策が既に施されているため迎撃するのは自分だけで問題ないと言った。

最初はスメラギやジェフリーたちはゼロだけが出撃することに難色を示していたが、ゼロの作戦を聞いた上でゼロの部下であるモニカたちが護衛として同行するのと、何かが起こっても問題ないようにZEXISメンバーがすぐに出撃できるように待機することで作戦実行の許可を得た。

そしてゼロたち黒の騎士団のメンバーはブリタニア軍を迎え撃つ為にそれぞれの機体に搭乗すると近くの街に降りた。

ゼダスのコックピットの中でゼロの仮面の下でルルーシュは何時でも作戦を実行できるように最終チェックを行っていた。

『ブリタニア軍が攻めてきたのは俺にとって都合だ。カレンや扇たちと違ってZEXISのメンバーの殆どは俺に対しての信頼がない。だが、俺の力をここで見せつけければZEXISも俺を・・・ゼロを信じる事になる』

ルルーシュは黒の騎士団——というよりもカミナのように露骨に態度で示していないがZEXISのメンバーの殆どがゼロに対して不信感を抱いていることを理解している。故にこの状況を利用してZEXISでの信頼を得ようと考えていた。

『(こういった事態を予測して、合流前にこの街の地下街を管理している職員にギアスをかけておいた。後はそいつに合図を送って奇跡を見せれば、俺の計画は完遂される)』

「ゼロ様。ブリタニア、来ます!!」

グロースターカスタムのコックピットにいるモニカからの言葉と同時に、ブリタニア軍が街の外までやって来た。

指揮官機用グロースターの姿から、軍を率いているのはコーネリアの腹心の部下であるアンドレアス・ダールトン將軍だろうと当たりをつける。そして先頭にはブリタニアの最新鋭ナイトメアである第七世代KMF『ランスロット』と、サザーランドとグラスゴーによるナイトメア部隊がいることからあわよくばここでゼロたちを倒そうと考えているのだろう。

「あのMS……！ゼロが前線に出ているのか……！」

ランスロットのコックピットの中からゼダスの姿を確認したスザクは思わずゼダスを睨んでいた。

「ゼロめ……。どういう手段で国連にコンタクトを取ったか知らぬが……。その後ろ盾を使わないとはいいい度胸をしている」

ダールトンは国連の後ろ盾を使わずに自分たちと戦おうとしているゼロに関心をした。国連の力に頼る軟弱な敵ではないよう自分たちの敵として申し分ないとも思っているのだろう。

『新型KMFのグロースターか。どうやらコーネリアの近臣が来ているようだな』

「あれだけの数をたった6機で相手するなんて……」

カレンはブリタニア軍の多数のナイトメアに対して自分たちはたった6機で相手をしなければならぬと考え、無意識に固唾を飲むのだった。

「心配ない。お前たちは私の指示に従っていれば問題ない」

ゼロはそうカレンに言う。ゼダスは高機動形態からMS形態になると市街地へと移動した。それを護衛するかのよう。ゼダスの隣にクリスティアのガフラン。地上には龍騎のガンダムAGE-1、モニカのグロースターカスタム、カレンの紅蓮式、焔の黒の騎士団KM

Fの『夜叉』がゼダスの後をついていき市街地へと移動した。

「ゼロめ、市街戦を挑むつもりか？」

「既に市民の避難は完了しています」

「街を戦場とするのはあまり好ましい事ではないが、千載一遇のチャンス逃がす道理もないか・・・」

ダールトンはゼロが市街地に移動したのを見て市街戦で挑もうとしており、高い可能性で市街地にはゼロが仕掛けた罠があると思われる。部下からの報告で市民の被害を気にせずに戦えると思いつつも、戦鬪による街の被害を考えれば市街地での戦鬪は避けたいところだがここでゼロを逃せばブリタニアの脅威になるのは間違いない。故にダールトンは街に被害が出ることを覚悟してゼロを倒すことを決意した。

「各機は前進！ゼロとその仲間たちを追い込め！」

「ゼロ・・・！ここで君を止める事で戦いを終わらせる・・・！」

ダールトンが部下にそう指示を出すとブリタニア軍のグラスゴーとサザーランドたちはそれぞれの武器であるアサルトライフルや大型キャノン、大型ランスを構え始めた。そしてランスロットのコックピットの中でスザクは操縦桿を握る手を強くし、MVSとヴァリスを構えた。

「(来るか・・・!)」

ゼロは仮面の中で笑みを浮かべながらブリタニア軍が攻撃を仕掛けてくるのを待ったその時だった。

ブリタニア軍の側面から何者かによる攻撃が行われた。これによりブリタニア軍のナイトメアが何機か大破してしまった。

「側面からの攻撃!？」

「ゼロ・・・！伏兵を用意していたのですか!？」

「いえ、今の攻撃は我々とは無関係です！まさかこれは・・・!？」

スザクは突然の攻撃に驚きつつランスロットのブレイズルミナスでその攻撃を防いだ。そしてカレンは今のブリタニア軍への攻撃はゼロが用意した伏兵によるものだど勘違いしたが、ゼロから事前に今回の作戦を聞いていたモニカはそれを否定しながら攻撃が行われた

場所を見た。

『チイツ！どうやら、厄介な連中が来たようだな』

「あれって、もう一つの日本で暴れてる機械獣って奴!？」

ゼロは思わず舌打ちをしながらブリタニア軍に攻撃したものの達の姿を見た。そこには多数の青銅の巨人を思わせる巨大な機械『タロス像』と一体の胸部に具えた大型ファンとムチのような腕をした『ストロンガーT4』といった機械獣軍団の姿があった。カレンは資料などでその存在だけは知っていたがもう一つの日本で暴れてる機械獣がエリアー1に来到することに疑問を抱き思わず叫んでしまった。

「兜甲児と、その仲間たちがこのエリアー1に来到していると聞いていたが・・・」

「どうやらここにはいないようだな」

「まあいい。ならば、見せしめにこの街を焼き払い、Dr. ヘルの力を知らしめるまでだ!」

そしてその機械獣軍団を率いるのはDr. ヘルの配下であり、兜甲児にとつて彼の祖父である兜十蔵の仇のあしゆら男爵である。

どうやら日本で戦った兜甲児とその仲間たちがエリアー1に来到している情報を手に入れ機械獣を引き連れエリアー1に来たようだ。

あしゆら男爵は女と男の声を入れ替えながら辺りを見渡すが兜甲児とマジンガーZの姿が見えないことから狙いを街の破壊に切り替えた。

そしてあしゆら男爵が女と男の声で同時に機械獣たちに指示を出す。機械獣たちは無差別に街を攻撃し始めた。その攻撃は今度はブリタニア軍だけではなくゼロたちにも放たれていた。

「くっ・・・後手に回ったか!ここは後退する!」

「しかし・・・!」

「既に市民は退避している。ならば姫様にお預かりした兵達をいたずらに消耗させるわけにはいかん。巻き返しは後でも出来るのだ」

「Yes, my lord」

ダールトンは機械獣軍団の姿を確認すると、このままでは味方陣営に多大な被害が出ると考えこの場は交代することにした。部下は目

の前にゼロがいるというのに手が出せないことに歯痒く思うが、ダールトンの指示に従い交代し始めた。

「退くしかないのか・・・！」

スザクは目の前にゼロがいるというのに退くしか　かなくてはならないことを悔しく思うが、軍人であるスザクはダールトンの命令に従い後退した。

『ブリタニアは後退したか・・・！』

「ゼロ！我々も後退すべきでは！」

『待て！まだ何か来る！』

ブリタニア軍が後退したのを確認したゼロだが、戦況に変化はない。クリステイアはゼロに後退することを進言したが、ゼロは何かの気配を感じ全員に警戒するように言った。

そして、ゼロがそうだったのと同時に次元獣が群れをなして現れたのだった。

「次元獣！こんな時に現れるなんてね！」

焔は突如現れた次元獣に驚愕すると同時にこの状況に対して歯噛みした。ブリタニア軍が撤退したものの彼らの前には機械獣と次元獣という勢力は異なるが世界の共通の敵とも言える存在がおり、それに対して自分たちの戦力はMSとKMFを合わせて6機で戦わなければならぬと感じ、状況はこちらが圧倒的に不利である。

そんなことを考えていると、離れた場所で待機していたはずのプロレマイオスとジェフリー艦長たちS・M・Sの可変型攻撃宇宙空母『マクロス・クォーター』、そして何故か出撃している『グレンラガン』が近くまでやって来た。

「黒マント仮面！大口叩いたわりにや、苦戦してるじゃねえかよ！」
『グレン』のコックピットの中からカミナがゼロに対してそう話しかけてきた。それを聞いたクリステイアとモニカがゼロに対して無礼だと感じ文句を言おうとしたが、そのゼロに止められたため大人しく黙った。

『ZEXISが来たか』

ゼロは予想していたことだがそう呟いた。流石にZEXISとし

ても機械獣や次元獣たちの存在を無視することも出来ない。故にこうしてやって来るだろうとゼロは機械獣たちが現れた時からそう予想していた。

「相手が国際的テロリストと次元獣ならば、君の手腕を見物しているわけにもいかんのでな」

「各機は発進を急いで！」

ジェフリーが言う通り、機械獣や次元獣たちはZEXIS共通の敵であるためにここは協力して相手取るべきだと判断していた。現にスメラギもZEXISメンバーの発進を急がせていた。だが『必要ない。既に奴等は私の術中にはまっている』

ゼロはジェフリーたちZEXISの助けを必要とせず自らの力のみで敵を倒すと言った。

「奴め、何を言っている!?!」

「そのようなハツタリが通用するか!」

「さあ、機械獣軍団の!あの忌々しき来訪者と兜甲児の仲間を奴の目の前で叩き潰してやれ!」

あしゆら男爵はゼロの言葉をハツタリだと決めつけ、ゼロたちZEXISを全滅させるためにストロンガーT4を先行させた。

「ゼロ!」

『全ての準備は整っている!時は来た!さあ、崩落のステージの幕を開けよ!』

迫り来るストロンガーT4の姿に焦りを見せるカレンはゼロの名を呼ぶ。そしてゼロは高らかに声を上げると指を鳴らした。

「・・・作戦実行・・・」

市街地の四方の端にあるビルにて、ゼロの声を聞いたギアスによって支配された市民たちはそれを合図にその瞳の周りを赤くし無表情で行動を起こし始め、四方の端のビルが同時に爆破された。

「何っ!?!」

「地下街を支える柱が・・・!」

「崩れる!」

あしゆら男爵は突然のビルの爆破に驚き、カレンとスメラギはその

ビルの爆破によって地下街を支えている柱が崩れていくのを理解した。

しかし、全てがゼロの思惑通りに進まなかった。南西の端にあるビルだけが柱が崩れていなかった。

『馬鹿な！一箇所だけ柱が崩れないだど!?地下街を崩落させるはずが、こんな所にミスが・・・!』

「何をしようとしたかは知らぬが、こけおどしはここまでだ!」

ゼロは崩れていないビルの柱を見て歯噛みする。どうやら一箇所だけ何らかの理由でそこだけが爆破しきれなかったようだ。あしゅら男爵は何も起こらないことからビルの爆破を見てただのこけおどしだと判断した。

『ええい!』

「ゼロ!」

「私達も援護を・・・!」

『お前たちはそこを動くな!』

ゼロは崩れなかったビルの柱を破壊するためにゼダスを動かした。それにカレンとモニカが追従しようとしたがゼロの言葉で動きを止めた。

「あいつ・・・!」

ゼロの突然の行動に困惑するZEXISメンバーの中でただ一人カミナはゼロに対して顔を顰めていた。

『ここでモニカたちを動かして、崩落に巻き込んでしまつては俺は手駒の一つを失う事になる・・・!ミスは自らの手で償う!かくなる上は、俺の手で最後の柱を破壊する!』

ゼロがゼダスを動かしたのは自らの策の失敗を償うために破壊しきれなかった最後の柱を自らの手で破壊しようとするためだった。

「馬鹿め!逃げられると思うなよ!」

あしゅら男爵はそう言いながら機械獣たちに指示を出すと、機械獣たちはゼダスに対して一斉攻撃を仕掛けた。

ゼダスの装甲の硬さのおかげで機械獣の攻撃に耐えることが出来ているが、その攻撃によって身動きが取れないでいるためこのままで

は撃墜されるのも時間の問題だろう。

『(くそっ！こんな所で俺は死ぬわけにはいかない！俺は・・・俺は・・・！)』

ゼロ——ルルーシュはこのままでは自分が死ぬと悟るが、それに対して何も出来ない自分に歯噛みするしか出来なかった。そんな時だった。

「うおおおおっ！」

カミナが叫びながらグレンラガンを動かし、ゼダスの近くまでやって来た。そのカミナの突然の行動に誰もが予想外だったのか呆気に取られていた。

『お前は・・・！』

「どうすりゃいいんだ!?!」

『何っ!?!』

「逆転の策があんだろ！だったら、それをとつと教えてろ！」

ゼロは突然やって来たカミナに驚いたが、それ以上にカミナがゼロに策がある事に気づいたのに驚きを隠せなかった。

「アニキ・・・この人、逃げ出そうとしたんじゃ・・・」

「そうじゃねえ、シモン！・・・俺にはわかる・・・わかったんだ！こいつには戦う覚悟がある！」

『!』

「だから、こいつは逃げねえ！だから、俺はこいつを助ける！」

シモンはゼロの行動を部下を置いて逃げ出しているように見えていたが、カミナはそう思わなかった。カミナは本能でゼロに戦う覚悟を持っていて、そのことを感じ取り、そのことからゼロは敵を倒すための何かを起こすために行動したのだと察したのだ。

『(この男は・・・)』

「早く教えろ！俺は何をすりゃいい!?!」

ゼロ——ルルーシュは初めて出会った疑わずに迷いなく自分を信じるカミナという男に驚いていた。しかしカミナから策を催促されたことでハツとなりカミナに指示を出した。

『ドリルだ！お前のドリルを貸せ！』

「おう！」

「ええい、そうはさせるか！各機は奴に攻撃を集中させろ！」

『行くぜええつ!!』

ゼロの指示を聞いたカミナは勢いよく返事をし、その様子を見ていたあしゅら男爵は何か仕掛けてくると考え、機械獣たちにグレンラガンを攻撃するように指示を出した。

『まずは右方向にダッシュユ！急げ！』

「おうよ！」

『そのままの速度で左に切り返し！』

「よっしゃ！」

『最後は直通だ！お前のドリルである地点を貫け！』

「任せとけ！」

カミナはゼロが指示したルートを敵からの攻撃をかわしながらグレンラガンを走らせた。そして最後にゼロがしていた場所に辿り着いた。

「シモン!!」

「う、うん!!」

カミナがシモンに呼びかけ、それにシモンが応じるとグレンラガンはゼロがしていたビルまで来ると拳を叩きつけ命中した瞬間にドリル発動させる『スカルブレイク』によってビルを破壊した。

「こ、これって・・・！」

「地面が崩れる!!」

「よし！成功だ!!」

カレンとあしゅら男爵は地面が揺れているのを感じた。ビルが破壊されたことにより市街地の至る所で連動するように爆発が起こり、さらに機械獣の攻撃によって限界を超えたのか地面が崩れ始めた。

「これは！」

「すごい・・・！敵が全部、崩れた足場に飲み込まれてる！」

「へ・・・！あそこから抜け出すのは骨が折れるだろうぜ！」

カレンとシモン、カミナは機械獣と次元獣たちが崩壊した地面に飲み込まれていく姿を見て驚いていた。

これこそがゼロが用意していた策である。四方の端にあるビルを爆破させることで地下街を支える柱を破壊し、それによって市街地の地面を崩壊させる事で敵を崩れた地面に飲み込ませることで敵の動きを鈍らせそこを叩くことがゼロの策である。

『ジェフリー艦長、ミス・スメラギ！各機を発進させるんだ！』
「りよ、了解！」

ゼロはこの隙を見逃すはずもなくジェフリーとスメラギの2人にZEXISメンバーを出撃させるように命令した。スメラギは動揺しつつもゼロの命令に従いZEXISメンバーを出撃させた。

「ゼロ！これは・・・！」

『全ては計画通りだ。後は機械獣と次元獣を駆逐する』

「な、何という事だ！我が機械獣軍団が・・・！」

あしゆら男爵は崩れた地面に呑み込まれて身動きが取れなくなっている機械獣たちを見て驚きを隠せないでいた。そして敵が身動き出来ないこの瞬間を利用してZEXISメンバーに攻撃するよう指示を出した。

「足場が崩れては、陸戦用の機体では、どうする事も出来んな」

「いつの間にゼロはこんな準備をしてやがったんだ・・・」

「だけどよ！街一つを壊すなんてやり過ぎなんじゃないのか・・・!?!」

「そこらは奴らを片付けてからの話だ。行こうぜ」

クロウ

オズマとロックオンはゼロの大胆不敵な作戦にゼロの手腕に感心していた。だが、株式会社21世紀警備保障の社員にしてダイ・ガードの操縦担当のパイロットである赤木駆介は街ごと破壊するゼロの作戦に避難の声を上げる。

それは赤木だけの意見ではなく、ZEXISメンバーの多くがゼロに対して思ったことだ。敵を倒すためとはいえ流石に街一つを破壊するのは流石にやり過ぎだと思っている。それに対して次元獣バスターにしてブラスタのパイロットであるクロウ・ブルーストは機械獣や次元獣たちを倒すのが先だと言う通りだと考えゼロへの追求を止めた。

『モニカと焔は次元獣を！カレン、クリスティア、龍騎は私と共に機械獣を倒すぞ！』

「「「了解!!」」」

ゼロはゼダスを機械獣へと向かい、カレンの紅蓮式式、クリスティアのガフラン、龍騎のガンダムAGE-1がゼロの後に続き、モニカのグロースター、焔の夜叉が次元獣へと向かった。

「ぬうう・・・！おのれ、おのれえええっ!!」

「あしゆら！前に倒した機械獣を修理してきたようだが、とんだ無駄足になりそうだな！」

あしゆら男爵は自分がゼロの策にハマってしまったと気づき、悔しそうな顔をする。マジンガーZに乗る甲兎はそんなあしゆら男爵を挑発するのだった。

『私の計算では機械獣と次元獣は3分は身動きがとれない。その間に勝負をつけるぞ！』

ゼロが言う通り、ゼロの策はあくまで時間稼ぎのようなものであり、時間が経てば相手も抜け出してしまうから早く勝負をつけなければならぬ。

「あのゼロって人・・・すごい・・・」

「俺達も負けちゃいられねえ！ついでだ、カレン！グレン対決もここで決着をつけるぞ！」

「望むところよ！」

シモンはゼロの策略に驚き、カミナもまたゼロなに負けられないと言わんばかりに気合いを入れ、カレンにグレン対決を仕掛けるのだった。

『全軍、攻撃開始！この日本を襲う者は我々が叩く！』

ゼロの言葉を合図に、ZEXISメンバーはそれぞれが別れて機械獣と次元獣と戦い始めた。

焔は夜叉のランドスピナーをフルスロットルさせると次元獣の攻撃をかわしながら一気に距離を詰める。

「抜刀！」

夜叉の腰に着いている日本刀型の刀『時雨』を鞘から勢いよく抜く

と居合切りで次元獣の首を斬り落とした。

「ターゲット、ロック完了。全武装一斉発射!!」

グロースターカスタムは2丁の銃口の下部に刃が付いた片手銃『30ミリ口径片手銃』、両肩にそれぞれ付属している『ザッテルヴァツフェ』と『ガトリング砲』。そして腰についている『ミサイルポット』の照準を次元獣たちに合わせると、一斉発射し次元獣たちの攻撃に当たりながら次元獣たちを撃ち抜いていく。

「ゼロがいれば、あたし達は勝てる・・・!あたしもやるんだ・・・!ゼロと一緒に正義を成すんだ!」

ゼロの実力を確信したカレンはゼロについて行くことを再度誓うとタロス像の剣による攻撃を十手型の短刀『呂号乙型特斬刀』で受け流しながら接近するとその頭部を巨大な右腕で掴むと紅蓮式式の主武装である『輻射波動機構』を起動し、タロス像を内部から爆破させた。

『(多少の計算違いはあったが、ここまででは俺の計算通りだ。後はこいつらを片付ければ全ては収まる。そのためにも、この戦い・・・負けられん・・・!)』

ゼロは上空からタロス像に向けてゼダスの胸部から『ビームキャノン』を放ちながら敵を倒していく。ゼダスの援護をするように上空と地上からそれぞれガフランとガンダムAGE-1がガフランの両掌から撃つビームバルカンと尻尾のビームライフルを、AGE-1はドゥズライフルとビームサーベルでタロス像を攻撃していく。

そしてストロンガーT4はマジンガーZと一騎打ちの形で戦っていた。

「熱海で倒した機械獣か!性懲りも無く、また出てきやがって!」

「黙れ、兜甲児!このストロンガーT4はDr.ヘルの手によってさらなる強化を受けたのだ!もうこれで貴様達に後れを取る事はない!覚悟するがいい!」

「だったら、ご自慢の機械獣を返り討ちにして、世界征服なんてのは考えるだけ無駄だつてのを教えてやる!」

ストロンガーT4は胸部に具えた巨大ファンを回転させると巨大

な竜巻を発生させ、マジンガーZを呑み込まんとする。それに対抗するようにマジンガーZは口の溝から気化させた特殊溶解液を含んだ突風『ルストハリケーン』を放つとぶつかり合い拮抗した。

「何をしているストロンガーT4よ！偉大なるDr.ヘルの手によって生まれ変わったお前の力ならば、その憎きマジンガーZを倒せるはずだ！」

「ナメるなあしゅら！俺のマジンガーZがお前たちなんかには負けるわけないだろ！」

あしゅら男爵と甲児が叫んでいると、ストロンガーT4の背後を早乙女アルトのメサイアFによる『ガンポッド』による銃撃、ロックオンのガンダムデュナメスの『GNスナイパーライフル』による狙撃などのZEXISメンバーの遠距離攻撃をくらったことによりバランスを崩し、そのままストロンガーT4はマジンガーZのルストハリケーンに呑み込まれて装甲がボロボロになった。

「馬鹿なっ!?!」

「これで終わりだ！ブレストファイヤー!!」

ストロンガーT4がやられていく姿を見て驚愕するあしゅら男爵。そして甲児はルストハリケーンを放つのを止めると、胸部の放熱板から超強力熱線『ブレストファイヤー』を放った。

ルストハリケーンによって至る所が溶かされ身動きの取れないストロンガーT4はその攻撃をかわすことが出来るはずもなく、ブレストファイヤーが直撃したストロンガーT4は爆散してしまった。

「おおおっ！ス、ストロンガーT4が！」

「見たか、あしゅら！ここにはお前のような奴と戦う力が集まっているんだ！」

「覚えておれよ、兜甲児！貴様とその仲間、このあしゅらが必ず葬ってくれるぞ！」

ストロンガーT4が破壊されたことに驚愕するあしゅら男爵に対して甲児は言った。甲児の言う通り、ZEXISメンバーはそれぞれが異なる目的を持ってこの組織に加入しているが、全員に共通している点として悪と呼ばれるような存在と戦うことを覚悟しており、その

ための力を持っていることだろう。故に世界征服を企むD r. ヘルの配下であるあしゆら男爵たちに負けるわけにはいかないのだろう。

あしゆら男爵もストロンガーT4が破壊されたことよってこれ以上の戦闘は無意味だと判断し甲児たちに捨て台詞を吐きながら撤退した。

「来るなら来い、あしゆら。俺達は・・・ZEXISは絶対に負けないぜ」

甲児は去っていくあしゆら男爵の後ろ姿を見ながら決意するよう
に呟くのだった。

そして、あしゆら男爵が去った後はZEXISメンバーによって残っていた次元獣とタロス像たちを全滅させた。

その後、戦いを終えたZEXISメンバーはゼロの力を知ったのだが、敵を倒すためとはいえ街一つを破壊したことに難色を示していたが、ゼロはそれに対して我々が戦うべきは次元獣やテロリストのよう
なこの世界の平和を乱す存在であり、それらを倒す為ならば全面的に肯定することでは無いが、犠牲を出すことに躊躇って敗北することはZEXISには許されないと言った。

それに対してゼロの言っていることは間違っていないと分かりつつもZEXISメンバーは言葉に詰まるが、ゼロは他人に否定されようとも自らの戦い方を変える気はないしそれを貫き通すための覚悟を持ちそれこそがゼロの正義であると断言された。

ZEXISメンバーもゼロに対して全くの異論がない訳では無いが、これ以上この場においては無用な争いを招く事になるというスメラギとジェフリーの意見によりとりあえずはこの場から去ることを優先した。

そして今回の戦いを通してカミナと黒の騎士団にあった不穏な空気は消え去り、カミナとカレンの蟠りも完全になくなっていった。他のZEXISメンバーもまたこれから一緒に戦っていく仲間として交流を深め合うことになった。

そんな中、マクロス・クォーターに用意された部屋にてゼロの仮面を外したルルーシユは椅子に腰をかけるとフツと息を吐いた。

「どうやらその様子だとお前の想定通りに事は進んだようだな」

ベッドに寝転びながらC・C・はルルーシュに顔を向けてそう聞いてきた。そんなC・C・の態度にルルーシュは一瞬顔を顰めるがC・C・に何を言っても無駄なことは彼女と関わったこの短い間でも十分に理解している為、ルルーシュはため息を吐いてから一応C・C・の質問に答える。

「まあそうだな。多少のアクシデントはあったがこれでZEXISの奴らもゼロに対しての不信感は薄れただろう。少なくともこれから共に戦う仲間としては問題は無いだろう」

ルルーシュが言う通り、ゼロのやり方はともかくその覚悟を知った彼らはそのやり方に賛同することはできなくともこれから共に戦っていく上では信用は出来ると思って貰えただろう。

「ZEXISを創立したエルガン・ローディックの狙いはまだわからないが、俺の目的を果たすためにもZEXISは上手く利用させてもらうさ」

ルルーシュは悪どい笑みを浮かべながらそう呟くのだった。それをC・C・はただじっと見つめるのだった。

——数多の悪意が渦巻くこの世界の中で異なる思いを持ちながら世界のために戦う事を決意したZEXISの未来に待っているのは彼らが望んだ平和か、それとも終わりのない絶望か。

——それは、神のみぞ知ることなのであった——

第13話 交差する明日

日本を経ったZEXISは世界平和維持理事会の依頼を受けてWLFのテロリストを討伐するために行動を開始した。その途中にてAEUのモラリア共和国にてWLFのメンバーの討伐に成功した彼らの前にモラリア共和国に存在する民間軍事会社『PMCトラスト』とアストラギウス銀河最強のAT部隊『レッドシヨルダー』がZEXISに襲いかかった。

強力な兵器を所持しているZEXISの存在を疎ましく思ったことが今回の襲撃のきっかけである。また、PMCトラストのリーダーである『アリー・アル・サーシエス』とレッドシヨルダーの指揮官である『リーマン』少佐と因縁があつたのか刹那とキリコがそれぞれ2人の相手をした。

キリコはリーマンを倒すことに成功したが、刹那はサーシエスのイナクトカスタムの動きに翻弄され一方的に攻撃をくらつてしまった。さらにその動きがクルジスのKPSAだとわかつた刹那はイナクトカスタムのパイロットの正体を知るためにコックピットから出てくるように言ってきた。

サーシエスはその戯言に従うつもりはないのか信号を無視してエクシアを攻撃しようとしたが、それよりも先に刹那がエクシアのコックピットから出て自らの顔を晒した。この突然の行動にはサーシエスだけではなくZEXISの全員が驚いていた。

サーシエスは刹那の行動に驚き思わず笑ってしまった。そして彼は依頼されたガンダムの鹵獲を達成するために刹那を殺そうとしたが、突如戦場に現れたヒイロとデュオの2人と同じコロニーのガンダムであるガンダムヘビーアームズとガンダムサンドロックの助けによりサーシエスは撤退した。

戦闘が終わった後、独断行動を起こした刹那に対して一悶着起こったが大事にはならずその問題も一応は解決した。そしてZEXISの新メンバーとしてガンダムヘビーアームズとガンダムサンドロック。そしてそのパイロットであるトロワ・バートンとカトル・ラ

バーバ・ウイナーが仲間に加わった。

戦闘を終えた後、エルガン・ローディックの指示によりZEXISに対して敵対意識を持つ組織を炙り出しつつより柔軟かつ広範囲の領域をカバーするために部隊を2つに分けることになった。これは暗黒大陸の獣人達が太平洋全域に活動範囲を広げているのと新種の次元獣の発生頻度の増大やWLFの活性化などに対して警戒を上げる必要があるためでもある。

それらに対処するため部隊を平和維持理事会の直属である事を公言する表部隊とその存在が秘匿されている裏部隊に分けられることになった。表部隊はマクロス・クォーターを母艦とし編成はS・M・S、マジンガーZ、ダイ・ガード、クラッシュヤー隊、トライダーG7、グレン団。裏部隊はプロレマイオスを母艦とし編成はソレスタルビーイング、ダンクローヴァ、ゲッター、コロニーのガンダム、黒の騎士団とキリコ、そしてクロウ・ブルーストとなった。

表部隊と別れた裏部隊はゼロの頼みにより黒の騎士団の知名度を高めるためにエリアーのWLFを攻撃することになった。敵はレッドシヨルダーも雇っていた為に苦戦を強いられたが問題なく対処できた。あと少しでWLFを全滅させられるところに『ゼクス・マーキス』率いるAEUの特殊部隊である『OZ』とブリタニア・ユニオンのフラッグ・ファイター『グラハム・エーカー』率いるフラッグ部隊とナイトメア部隊、さらにシンジユクで襲ってきた謎のピンクのATが襲撃を仕掛けてきた。

謎のATとキリコが勝手に戦場を離れるという出来事が発生し、OZとブリタニア・ユニオンがいるためにキリコを追うことも出来ず裏部隊のメンバーは彼らと戦うのだった。以前戦ったことがあるからか、ブリタニア・ユニオンのユニオンフラッグに乗るグラハム・エーカーはガンダムエクシアを、OZのリーオーに乗るゼクス・マーキスはウイングガンダムを中心に狙っていた。

戦闘を終えOZとブリタニア・ユニオン迎撃することに成功したZEXIS裏部隊のメンバーはキリコの後を追った。そしてキリコがいる場所につくとそこにはスコープドックが撃墜されたキリコの姿

と謎のATの姿があった。キリコが殺されると思ったスメラギは各機に急いで出撃するよう指示を出そうとしていたが、謎のATはキリコにトドメをささず撤退していった。

撃墜された時の怪我の影響で意識を失ったキリコだがプロレマイオスの医療システムのおかげで完治し、スコープドックを破壊されたキリコに黒の騎士団への資材を届けに来た商人のブルーズ・ゴウトから新たなスコープドックを貰った。さらにミサイルランチャーやソリッドシユーター、ガトリング砲などAT武装を大量に詰め込み肩をレッドシヨルダーと同じ暗い血のような赤に塗装しレッドシヨルダーのマークを右肩につけるなど機体の強化を行っていた。

それからZEXIS裏部隊はエルガン代表からの依頼を受けて対イマージユ戦略における最重要機密の回収を行う専用チームのサポートを行うことになった。

現場であるインド中央部に裏部隊が着いた時には既に国連の輸送部隊がイマージユの襲撃を受けており、国連が派遣したサーフボードのような飛行ユニットに乗る人型巨大ロボット『KLF（クラフト・ライト・ファイター）』を扱う第303独立愚連隊のメンバーがイマージユと戦っていた。

第303独立愚連隊とZEXISが協力してイマージユを全滅させ、後は対イマージユ戦略における最重要機密を強奪するのみかと思っていると次元震が発生し、次元獣が現れた。その中にはクロウのターゲットでもある白いライノダモン級『ライノダモンMD（モビーデイク）』も存在していた。

そしてライノダモンMDの攻撃によって国連の輸送機が墜落してしまった。第303独立愚連隊のリーダーにしてKLF『ターミナス303』のライダーである『ホランド・ノヴァク』の指示により同じくKLF『ニルヴァーシユ』のライダーである『レントン・サーストーン』は輸送機の中に入り、目的の対イマージユ戦略における最重要機密の回収を行った。

輸送機の中にあるコンテナの中にいたのはレントンの幼馴染みであり過去に連れ去られた少女『エウレカ』がいた。

最初は同行を拒否していたエウレカだが、レントンの心からの説得によりニルヴァーシユspec2に乗り一緒に同行してくれた。そして、エウレカとレントンの2人の思いが共鳴したのかニルヴァーシユを中心に新たな干渉波が発生し、それが収まるとニルヴァーシユの装甲の色が変化すると機体性能も向上『ニルヴァーシユspec2』へと変わった。

そしてZEXISは第303独立愚連隊の援護をしつつ次元獣と戦い始め、クロウもまた自身の標的であるライノダモンMDに1人で戦いを挑んだ。

次元獣と戦っている最中に、通常の次元震と異なる次元震が発生し、次元震が発生した場所に全身に赤い結晶体を纏ったかのような、醜悪かつ有機的な外見をした機体が現れた。その機体はクロウをターゲットにし戦闘を仕掛けたかと思えばすぐに戦場から去っていった。

謎の機体が去るとクロウは気を取りなしてライノダモンMDとの戦闘を再開した。しかしダメージを与えることは出来たがとどめを刺す前に次元震を使って逃げてしまった為に倒しきることが出来なかったことにクロウは一瞬悔しげに顔を歪ませるがすぐに気持ちを切り替えて次こそ倒すと決意するのだった。

戦闘終了後、ZEXISのメンバーとして新たに第303独立愚連隊のメンバーが加入することになったのだが、彼らの母艦である『月光号』である程度話をした限りだとレントンとエウレカを除いた月光号のクルーが何かを隠していると考えたゼロとスメラギは彼らを警戒するのだった。

そして現在ZEXIS裏部隊はアザディスタン王国を訪れていた。

◆◆

アザディスタン王国に到着したZEXIS裏部隊は情報収集を行うのと今まで軍に監禁されていたエウレカに外の様子を見せるためにZEXIS裏部隊の何名かが街におりていた。

そしてゼロもまたある人物と会うためにアザディスタン王国から離れた場所にある廃墟の地下へとやって来ていた。

そこにはゼロとその護衛として同行したクリスティアと龍騎。そして勝手に同行したC・C。C。C。がおり、今回の黒の騎士団の取引相手を待っていた。

しばらく待っていると入口の扉が開き、そこから2人の男女が入ってきた。

「遅れてしまい申し訳ありませんわ」

『問題ない。予定通りの時間だからな王留美』

入ってきた女性『王留美』が申し訳なさそうな表情をしながらゼロに謝罪をするがゼロは気にしてないため謝罪は不要と言った。

「（彼女が王留美。世界中の社交界で名を馳せる王家の当主にして黒の騎士団の有力なスポンサーの1人）」

「（だけど彼女はソレスタルビーイングと繋がりがあある疑いがかけられている。真実かどうかは分からないけど警戒しておくに越したことはない）」

クリスティアと龍騎は初めて留美に出会ったが彼女はソレスタルビーイングとの繋がりがあある疑いがあるため、彼女を通して黒の騎士団不利益が生じる可能性があるため2人は彼女を警戒していた。

『それで、やはりこの地にはWLFが潜んでいるのか?』

「ええ、どうやらWLFはこの国の保守派に雇われているそうです」

『だが奴らの存在からして素直に雇われているとは思えない。恐らくこの国の第1皇女であるマリナ・イスマイルを誘拐し傀儡政治を行わせこの国を乗っ取る事でも計画してるのだろうか』

「その可能性は高いと思われます。現にマリナ・イスマイルの周囲にWLF所属のテロリストらしき姿が確認されてますわ」

WLFの目的を察したゼロがそう予測を立てると龍騎美もゼロの予測が正しいことを裏付けるようにWLFがマリナ・イスマイルの周囲にいるとの情報を言った。

「それからもう一つ。ゼロ様に有益な情報がありますわ。紅龍」

「はい、こちらになります」

留美は後ろで待機していた従者である紅龍に声をかけると、紅龍は手元に持っていたタブレットをゼロに手渡す。

ゼロは紅龍から受けとったタブレットに書かれている内容を上から順に読んでいく。そこには先程話していたアザデイスタン王国に潜んでいるWLFたちについての情報が事細かに書かれているがその程度のことならば留美がわざわざゼロにとって有益な情報と言うわけが無い。

そんな事を考えながらゼロは読み進めていくと1枚の写真とそれについての説明を見つけて思わずゼロはタブレットを動かしていた指を止めた。

『これは……』

「残念ながらお探しのガンダムフレームは見つかりませんでした。代わりに以前から貴方が探していたモノを暗黒大陸を調査していた部下が発見しましたわ」

『この事を知っているのは？』

「発見した部下数名と私たちだけです」

ゼロは留美に確認するように質問する。クリステイアと龍騎はゼロが黒の騎士団の戦力強化のためにガンダムフレームのような強力な機体を回収していることは知っていたが、そのゼロが動きを止める程のモノとは一体なんだろうかと疑問を感じる。

『そちらは何を求める？』

ゼロはタブレットから目を離して留美に顔を向けながら留美がゼロに対して報酬として何を求めているのかを尋ねる。留美は笑みを崩さずゼロを見つめる。

「その件は実物を届けてから話し合しましょう。コレの価値はそう簡単には決められませんしね」

「それほどのモノなんですか？」

留美はこの場で報酬を求めず実物をゼロの元に無事に届けることが出来てから求めると言った。龍騎は留美が発見したモノが2人がそう語るほどのモノが何なのかをゼロに尋ねる。

『もしコレが私の知っている通りのスペックを持っているのならば、コレだけで国を落とすことが可能だ』

「……」

ゼロの言葉に龍騎、クリスティア、紅龍は息を飲んだ。この世界にはMSやKMF、ATなど様々な機体が存在するがそれらの性能では優秀なパイロットでなければたった一機で国を落とすことは不可能である。

故にゼロの言っていることから留美が見つけたコレはマジンガーZやゲッターなどのスーパードボットやランスロットやガンダムなどの特殊な機体と同等かそれ以上である可能性がある。

もしそれが本当であるならば未だ未知数である黒の騎士団の戦力がさらに強化されることに未だゼロのことを警戒している紅龍は懸念を感じ、龍騎とクリスティアはそんなシロモノを扱うことは黒の騎士団にとって危険では無いのかと少し不安を感じていた。

「それでは後日例の場所に届けさせていただきますので後ほど連絡しますわ」

『了解した。では我々もこれで失礼させてもらおうか』

「ええ、その時はその仮面なしでの対面を希望させていただきますわ」
ゼロは用は終えたことでこれ以上この場に用はないと判断し去ることにした。留美は笑みをくずさずにそう言いながらゼロに向けて頭を下げるのだった。

そして取引を終えたゼロにスメラギから連絡が届いた。それによるとどうやらWLFが動き始めたようで数時間前にこの国の第1皇女であるマリナ・イスマイルと偶然その近くに居合わせたリリーナ・ドーリアンがWLFのテロリストによって誘拐され、現在監禁状態にあるようだ。

この国の保守派の狙いはマリナに王政を廃止させ、その上でアザディスタン王国を本来のあるべき姿にすることを目的に動いていた。しかし、WLFの真の目的はマリナを傀儡とし政策やその他全てをWLFの指示に従わせることでアザディスタン王国をWLFの活動拠点とすることであった。

現在ヒイロと刹那、そしてクロウの3人がマリナとリリーナを救出するために潜入するための準備を行っていた。そしてその情報を聞いたゼロは留美からの情報とマリナとリリーナが拐われた場所から

2人が監禁されていると思わしき場所を絞り込んだ。

「やはり貴方もその場所が怪しいと睨んでるのね」

『ああ。こちらの独自の情報源とWLFのデータから予測すれば奴らのアジトなど簡単に判明するものだ』

「そうね。こちらもあるあなたと同じポイントに2人がいると考えているわ。今刹那とヒロ、クロウの3人が救出するための準備をしている。私たちは陽動として3人のサポートをすることになったわ」

『了解した。こちらにもすぐにそちらと合流する』

「ええ、よろしくね」

これからの行動についての話をスメラギとの会話を終わらせるとゼロは別の場所に連絡を取りながら歩き始めた。

『私だ。例のモノの準備は出来ているか』

「はっ！既に補給と整備を仕上げそちらへと向かっております!!」

『ではこちらが指名したポイントに向いZEXISと合流しろ』

『了解致しました!!ではルルーゼロ様もお気をつけを!!』

ゼロは通信の相手である暑苦しい忠義の騎士と呼べる男に内心苦笑しながら通話を切った。そしてZEXISと合流するために待機していたそれぞれの機体へと乗り込み飛んでいくのだった。

ZEXISと合流したゼロたちはWLFが潜んでいると思わしき場所へと向かうとそこにはやはりWLFのアジトがあり、その周囲にはWLFの戦力らしき『スタンディングトータス』や『スコープドック』といったAT、『ヘリオン』や『ティエレン長距離射撃型』といったMS、世界最大の企業グループであるアクシオ財団が開発した人型機動兵器『アクシオ』。そして巨大機動兵器である『戦車型ジェノサイドロン』と『地上空母型ジェノサイドロン』など多種多様な機体が展開されていた。

『ほう、野盗風情にしては中々の戦力を持っているようだな』

「なっ!?!」

「我らが野盗だと!?!」

ゼロがWLFの戦力に対して見下しながらそう言うとWLFのテ

ロリストたちはゼロの言葉に激怒した。彼らは『理念も信念も打ち砕かれた者が世界を変える下で集った』という大層なお題目を掲げている組織だがゼロからしてみれば馬鹿馬鹿しいとしか言えなかった。

『所詮貴様らは自分たちにとって都合のいい言葉を並べて無益な争いを起こすだけの存在だ。ここにいるソレスタルビーイングたちのような覚悟も信念も何も持っていない』

「ぎ、貴様っ!!」

『どうした。私は事実を述べただけだが?』

どこまでもこちらを見下してくるゼロに対して頭に血が上りきつたWLFのテロリストたちは機体の武装をゼロが乗るゼダスに銃口を向ける。

「おいおい、陽動には成功したけどやりすぎなんじゃないか?」

デュオは先程のゼロの挑発が現在マリナとリリーナを救出するためにアジトに忍び込んでいる刹那たちの動きを悟られないためにわざとああ言ったのだと思っていた。

確かにこれでWLFのテロリストたちをこちらに釘付けすることに成功はしたが、WLFのテロリストたちは完全に頭に血が上りゼロを倒すことに躍起になってしまっていた。冷静さを失った敵というのは何を仕出かすか分からないため、これが吉と出るか凶と出るかは今はまだ判断出来ないでいた。

「関係ないわ。敵として向かってくるなら叩き潰せばいいんだから」

「違えねえなーそっちの方がやりやすいぜ!」

葵と龍馬は好戦的な笑みを浮かべながらそう言った。他の面々も概ね同じ考えなのか戦闘態勢に入っていた。その中でレントンはニルヴァーシユspec2のコックピットの中で悩んでいた。

「(流されるままにZEXISに入ったけど、まさかテロリストと戦うことになるなんて・・・)」

第303独立愚連隊がZEXISに加入したことで第303独立愚連隊に所属しているレントンもまたZEXISとして今回出撃することになったのだが、今までKLFで戦闘をしたことはあるがそれは人類の敵であるイマージュや次元獣が相手であり、今回のようなテ

ロリストとはいえ同じ人間と戦うのは初めてだった。

人間同士による殺し合いという今までの人生でも経験することがなかった出来事にレントンは人を殺してしまいかもしれないなどの恐怖によつて体の震えが止まらなかつた。そんなレントンの様子を察したホランドがレントンに通信を入れた。

「レントン 無理はするなよ。危なくなつたらすぐにでも後退しろ」

「でも隊長……」

「もう俺達は独立愚連隊じゃない。俺の事はホランドでいい」

「え……」

ホランドとの付き合いは短い、それでもここまで自分に対して気を使ったことなどあまり無かつたのでホランドがレントンに対して気遣つてゐる事に動揺した。

「死ぬなよ、レントン。お前の隣にはエウレカもいるんだからな」

「は、はいー」

「レントン……」

ホランドの一言に気合が入つたのか気持ちを入れ替えるように勢いよくレントンは返事をした。正直、ホランドが何を考えてエウレカを助け出したのかや人間同士で戦うことに不安を感じていたがホランドの一言で気持ちを入れ替えた。

レントンにとつて1番に優先すべきことは彼にとつて大切な存在であるエウレカを守ることだ。そのために戦う道を選んだのだ。こんなところで立ち止まる訳にはいかないと再認識するのだった。

『来るわ！各機戦闘開始!!』

スメラギがそう言ったのと同時にWLFは後方に待機しているティエレン長距離射撃型による遠距離からによる一斉砲撃がZEXISに向けて放たれた。

ノヴァアイーグルやニルヴァーシユspec2、ターミナス303、ガンダムキュリオス、オーブンゲットしたことにより3機の戦闘機になつたゲッター1などの機動力の高い機体は砲撃をかわしながら接近し、それに続くようにほかの機体が援護するように砲弾を撃ち落としていく。

「キュリオス、目標を迎撃する！」

飛行形態になっているキュリオスはMS形態に変形すると両腕に『GNハンドミサイルユニット』を装備し、地上にいるWLFを爆撃する。機動性の劣るティエレン長距離射撃型はミサイルをかわすことも出来ず次々と爆散していった。

しかし、機動力に優れたATであるスタンディングトータスやスコップドックはキュリオスによるミサイルの雨をかわしつつ『ヘビーマシガン』と『ハンデイロケットガン』で反撃する。

「隼人！ゲッター2でいくぞ！」

「了解だ！チエエエエエンジン、ゲッターアアア2!!」

3機の戦闘機になっていたゲッター1は隼人のジャガー号を先頭にし、武蔵のベアー号、竜馬のイーグル号を順にして合体し左腕がパワーアームで右腕がドリルをした白いゲッターロボ『ゲッター2』へと変形し地上に降りた。

「くらえードリルハリケーン!!」

ゲッター2は右腕のドリル正面に構え回転させるとドリルから竜巻が発生し、その竜巻はスタンディングトータスやスコップドックなどの地上にいるATたちを飲み込んでいき、ATたちは身動きが取れないまま次々と破壊されていく。ゲッター2のドリルハリケーンから逃れたATたちがゲッター2に攻撃を仕掛けるがカレンの紅蓮式とキリコのスコップドックRSCがそれらを破壊していく。

「くそっ！味方が次々と落とされてく!!」

「怯むな！数はこちらが勝っているのだ!!」

上空で戦闘を行っているヘリオンの中の一機がZEXISの戦力に驚愕する。それを部隊長らしき人物が自らを含めたこの場にいるWLFのメンバーにそう言いながら攻撃を続ける。彼の言うとおりWLFの戦力は一介のテロリスト組織にしては規格外と言える程であり現に先程からZEXIS側は多くのWLF側の機動兵器を破壊しているがその数は一向に減らないでいた。数というものはそれだけで脅威であり現に三大国家が反抗勢力であるレジスタンスやテロリストに敗北したことがないのも質が高いのもあるがその圧倒的な

国力による数の暴力に寄るところも大きいだろう。

故にWLFのテロリストたちはこのまま戦い続ければZEXISも消耗しそこを突けば数が勝るこちらが勝利すると確信していた。しかし、彼らはZEXISの力を侮り自らを過信しすぎていたと思いきらされる。

「ヴァーチエ。目標を消滅させる」

GNフィールドを展開しプトレマイオスの防衛に当たっていたガンダムヴァーチエはGNフィールドを解除すると主武装である大型ビーム砲『GNバズーカ』を胸部の太陽炉と直結させる。

「GNバズーカ・バーストモード!!」

GNバズーカから巨大なビームが放たれると砂漠を削りながら射線上にいた敵を跡形もなく消し去る。さらにヴァーチエの攻撃をくらわなかった機体をデユオたちコロニーのガンダムたちとモニカたち黒の騎士団のKMFとMSが撃破していく。

「み、味方の損害が八割を超えました!」

「バカなっ!あれだけの数の敵をこうもあっさりと倒すだど!」

陸戦型ジェノサイドロンのコックピットにいるWLFの指揮をとっていたリーダーはZEXISの圧倒的な力に恐怖していた。確かに戦いにおいて数の差というものは重要といえるものである。

しかし、彼らが相手をしているのは通常の機動兵器とは比べ物にならないほどの性能を持つスーパーロボットであるゲッターロボとダンクーガノヴァ。三大国家の使用するどのMSよりも高性能なガンダムとゼダスたち。第7世代KMFランスロットと同等の紅蓮式式。元レッドシヨルダー所属の凄腕AT乗りであるキリコのスコープドックといった強力な機体と優秀なパイロットたちである。

そんな彼らに対してただ数だけを揃えた烏合の衆であるWLFが勝てるどおりは端からなかったのである。

「よっしやあ!この調子ならあと少しで全滅出来るな!」

「油断するな。連中がヤケになって人質に手を出す可能性もある」

朔夜はほぼ全滅しているWLFのテロリストを見ながら調子に乗ってついそう言うが隼人が言うように油断は禁物である。もしヤ

ケになって人質であるマリナやリリーナに何かあればZEXISの立場的にも色々と厄介なことになってしまおうと誰もが考えられるのだから。

「その肝心の刹那たちはまだ二人を救出できてないの!？」

「まだみたいだな（急げよ、刹那・・・）」

葵がノヴァイーグルをヒューマロイドモードに変形し、3Aダガーでヘリオンに投擲し破壊しながら救出の状況を尋ねるが、ロックオンはまだ刹那たちからはなんの音沙汰もないことを言いながら刹那たちが潜入したWLFのアジトの方を見るのだった。

その時、耳鳴りのような音が周囲に鳴り響いた。これは次元震が発生する際に聞こえてくる音であり、実際にプロトレマイオスと月光号の計測器で次元境界線の歪曲し、月光号のクルーであるギジェットがZEXISメンバーにそう知らせると同時に次元震が発生しそこからダモン級、ブルダモン級、ライノダモン級が現れた。

そこに追い打ちをかけるように残っていたWLFの残党を撃破しながら現れたのは異形の宇宙生物『インベーター』だった。

「次元獣だけじゃなくてインベーターまで現れるなんて・・・!」

「これは流石に予想外ですね」

くららとジョニーは突然現れた次元獣とインベーターに対して思わず顔を顰めながら悪態をつく。そして運が良いのか悪いのか次元獣とインベーターが現れたタイミングで刹那とヒロ、クロウがマリナとリリーナ、そしてWLFを雇った生き残りの保守派数名の救出に成功した。

刹那とヒロ、クロウはプロトレマイオスに乗り込みマリナたちはゼロが用意していた騎士団のメンバーによって安全な場所へと連れていかうとしている。

「スメラギさん!刹那達を収容しました!」

「すぐに発進させて!下手をすれば、次元獣とインベーターの両方を相手にすることになるわよ!」

クリステイナはスメラギに刹那たちを無事にプロトレマイオスに主要したことを伝えるとスメラギは刹那達にすぐに機体に乗って出撃

するように命令する。スメラギの指示を聞いた刹那達はガンダムエクスシア、ウイングガンダム、ブラスタを出撃させた。

「あのアイムとかいう野郎・・・本当に次元震を起こしやがったのか・・・？」

クロウはブラスタのコックピットの中で先程の出来事の事を考えていた。刹那とヒロと共にマリナたちを救出しにWLFのアジトに潜入したクロウだが、そこでクロウはアイム・ライアードと名乗る男と出会った。その男は自らを軍人と名乗ったり、マリナに爆弾が仕掛けられている、クロウの前世の恋人などクロウを不快にさせる様な嘘を喋り続けた。

アイムの目的が分からないが、アイムは自らの武器は次元震であると言ったことが事実であるかのように次元震が発生したことからアイムが本当に次元震を発生させたのではないかとクロウは考えさせられてしまう。

「(あいつの言葉を信じてたら、精神が参っちゃまう・・・。今は奴の言葉は忘れる)」

しかしここでいくら考えてもアイムが真実を語っているかは分からないため今はそのことを考えるのではなく、目の前にいる次元獣とインベーターの相手をすることに集中するためにアイムの言葉を一旦忘れることにした。

そしてZEXISメンバーが次元獣とインベーターに対して警戒をしていると、1体の次元獣がマリナとリリーナに近づいていた。

「リリーナさん！」

「！」

「あれは！」

「くっ！」

マリナが次元獣からリリーナを庇うように前に出た。次元獣が向かう先に同じ生徒会メンバーであるリリーナの姿を見つけたカレンはリリーナを助けようとするがそれよりもヒロが早く気づきウイングガンダムをバード形態に変形し一気にリリーナ達を襲う次元獣の前にMS形態に再度変形し立ち塞がり次元獣の攻撃を受け止める。

「ヒイロ！」

「あいつ！皇女達を助けるために自分を盾にしたのかよ！」

「でも、あのままでは・・・！」

リリーナは自分達を守ってくれたウイングガンダムに乗っているヒイロを心配し、思わず声を上げてしまう。そしてヒイロがリリーナ達を守るために盾になった事にデュオは驚いた。だがカトルはこのまま次元獣の攻撃を受け止めていてはヒイロが危ないと助けに行こうとしたが、それよりも先にヒイロが刹那に声をかけてきた。

「刹那・F・セイエイ・・・！お前はガンダムではない！」
「！」

ヒイロの言葉に刹那は思わず目を開いてしまった。

先程、リリーナとマリナを救った際に刹那達はWLFのテロリストたちを殺した事に対してマリナが殺すのではなく話し合いの手段を取れば犠牲が出ないと刹那に言い、一方的な暴力による武力介入を行うソレスタルビーイングの手段を否定するが刹那はそれに対してソレスタルビーイングが武力介入を行わなくとも戦争は起こり犠牲は出ると言い、さらには6年前アザディスタン王国が王政を復活させ国民の意識をまとめるためにクルジス共和国を武力併合を行った戦争に参加していたことと自らがソレスタルビーイングのガンダムマイスターである事を語ってしまった。

その時、リリーナが刹那たちソレスタルビーイングの考えでは戦いをさらに生み出すだけであり彼らが言うような戦う力を奪うだけでは戦いが無くなることはなく、平和な世界を実現する事は出来ないと言った。刹那はリリーナの言葉にショックを受け、刹那はソレスタルビーイングのやり方では戦争を根絶する存在『ガンダム』になれないのかと疑心暗鬼に陥ってしまった。

「ならば、お前はガンダムになれ！」

刹那とリリーナの会話を聞いていたヒイロは今の刹那がガンダムではないというのならば、これから刹那が目指すべきガンダムになればいいと言い切った。そのヒイロの言葉に気付かされた刹那は決意の籠った目になると操縦桿を強く握った。

挿入歌 『FIGHT』

「俺は・・・ガンダムに・・・！」

ガンダムエクシアは一気にウイングガンダムが対峙している次元獣に近づくとGNブレイドを展開し、そのまま次元獣を一刀両断に切り裂き絶命した次元獣は爆散して消え去った。

「ソレスタルビーイングとコロニーのガンダム・・・」

「マリナ様！今は逃げましょう！」

「は、はい！」

同じ三大国家に敵対しながら全く別の組織である2機のガンダムが協力し合う姿にマリナは思わず見入ってしまいが、リリーナの声を聞いたことで正気に戻り今度こそ黒の騎士団のメンバーが二人を安全な場所まで連れて行くとする。しかし、そこにさらに1体のブルダモン級の次元獣がウイングガンダムとガンダムエクシアごとマリナたちに襲いかかろうとした。しかしそのブルダモン級次元獣の頭上に突如影がかかった。

「受けよ！我が忠義の一撃を!!」

その声が聞こえたのと同時にライノダモン級次元獣の頭の上に落下してくる両肩がオレンジ色に塗装されたサザーランドが大型ランスを落下の勢いに乗せてブルダモン級次元獣の頭部に突き刺すとブルダモン級次元獣は甲高い声を上げながら絶命して爆散した。

『どうやら間に合ったようだな』

「申し訳ありませんゼロ様。こちらに向かう途中にインベーターの群れの襲撃を受けてしまった事で合流に遅れてしまいました。他の者達も間もなくこちらに合流します」

次元獣を倒したサザーランドを操縦している男、ジェレミア・ゴツドバルトはゼダスの下へと移動し大型ランスを構える。そしてジェレミアが言った通りに両肩が黒く塗装されたサザーランドとガフラーンによる部隊とその先頭を赤く塗装された『グレイズリッター』と2機のガンダムタイプMSの『ガンダムアスモデウス』と『アースリイ

ガンダム』がおり、後方には鋭利なシルエットをした黒く塗装された戦艦『ウラノス』が待機していた。ジエレミアの態度から彼等が黒の騎士団のメンバーだと察したZEXISメンバーでありスメラギが確認をするようにゼロに尋ねる。

「ゼロ、彼等はあなたの組織の人間で私達の味方という事でいいのかしら？」

『そう考えてもらって問題ない』

「しかし、また大層なもんを用意してやがるな」

ゼロはスメラギに対して彼らが自分の配下である黒の騎士団のメンバーだと告げる。それに一応の安心を見せるがスメラギたちはこれ程の戦力を持つゼロにより一層の警戒を抱かせるには十分だった。

特に治安維持を目的とした武力組織『ギャラルホルン』が所有するMS『グレイズ』を地球での戦闘を前提とした機動力に重点を置いて改良された『グレイズリッター』とガンダムAGE―1と異なる技術で造られたと思われる2機のガンダムに目を離せないでいた。だが、今はその事ばかりに目を向ける訳にもいかなかったためZEXISメンバーはインベーターと次元獣へと注意を向けた。

『各機は次元獣とインベーターを迎え撃つ！マリナ皇女とドーリアン外務次官令嬢を守り抜くぞ！』

「え！ 皇女様と一緒にいるのってドーリアンの娘かよ！」

「前に誘拐を計画したくせに気付かなかったの？」

「ちらつと見ただけでわかったゼロやお前がすげえんだよ！」

「あたしはアッシュフォード学園で何度も会ってるからね」

ゼロはZEXISメンバー各機に指示を出す。玉城は誘拐された中に以前エリアー1でまだ扇グループとして活動していた頃に誘拐を企んでいたリリーナがいることに驚いたがカレンはそれに気づいていなかったことに呆れていた。しかし、ゼロことルルーシュやカレンのようにリリーナとよく会っていないのならば顔を覚えていないのも仕方がないだろう。

「話なら後にしろ！ 二大怪獣の揃い踏みなんだからよ！」

「気をつけるよ。どうやら、どちらさんも俺達しか目に入っちゃいねえようだ」

デュオが玉城とカレンに無駄話を止めるように言い、インベーターと次元獣に警戒しろと言った。そして隼人が言うように何故かインベーターと次元獣はお互いの存在に対して敵意を見せずらZEXISに対してのみ敵意を見せていた。

「面白いじゃない……！チンケなテロリストを相手にするよりスリルあるわ！」

「どうせ、こいつらは放っておきや、アザディスタンの王都に攻め込むんだ……！ここで食い止めるぜ！」

葵はWLFのような大した事ない敵ではなく手応えのある敵と戦えることに闘志を燃やしていた。また、クロウが言うようにインベーターや次元獣を放っておけば近くにあるアザディスタンを襲い、多くの人々が犠牲になってしまう。故にそれを食い止めようと全員が葵達のように闘志を燃やしていた。

「やれるな、刹那？」

「……」

「お前が違うと言うのなら……意志を持って戦っていると言うのならそれを見せてみる」

ヒイロは刹那に確認するようにそう言うと、刹那はガンダムエクシアのGNソードをインベーターに向けて決意するように宣言した。

「エクシア……敵を駆逐する!!」

インベーターと次元獣、ZEXISによる戦闘が始まっているのを戦場から離れていくマリナはその戦いから目を離せないでいたのと同時に困惑していた。

「彼等はアザディスタンを守ろうとしてくれる……。何の見返りも求めず……。自分の身を盾にして……。彼等は何のために戦うの……」

マリナはアザディスタンと関係ない人間であるZEXISが、かつてアザディスタンが滅ぼしたクルジスの人間にしてソレスタルビーイングのガンダムマイスターである刹那・F・セイエイという少年たちがアザディスタンを守ろうと戦っているのか、何故自ら危険だと分

かりながら世間から認められないというのに戦おうとしているのか。彼等がなぜ戦っているのかただの小娘でしかないマリナにはその理由は今は分からないでいた。しかし、彼等が戦っている姿から何故か目を離すことが出来ずその姿が見えなくなるまで戦場に目を向けるのだった。それは隣にいたりリーナも同じだった。

挿入歌 『FIGHT』 終了

そして舞台は戦場へと戻り、ZEXISは次元獣とインベーターの人類にとつての脅威と戦っていた。WLFとの戦いで多少の疲労や燃料や弾薬などの消費もあったがゼロが用意していた援軍のおかげで補給などを行う時間もできたために問題なく戦えていた。

「気をつけて下さい！またインベーターが来ます！」

「まったく！お呼びじゃないのよ、あんた達は！」

ジョニーがこの場に新たにインベーターが現れたことを知らせると葵は舌打ちをしながら新たに現れたインベーターを倒そうとインベーターを 向かわせようとしたが、それより先にレーダーに反応が映った。

「待ってください！さらに高速で接近する機体があります！」

いち早く気がついたジョニーが警戒するように全員に伝えるが、それよりも早くその機体は新たに現れたインベーターを倒すとそのままインベーターの上空にその姿を現した。そして、その機体の姿を見て誰もが驚いた。

『紅いダンクーガだと？』

ゼロがそう呟いたように突如現れたその機体は細部は異なるものの葵たち4人の乗る四機のヴァリアブル・ビースト・マシン。通称『VBM』が超獣合神した姿であるダンクーガノヴァとその姿は似ているのだった。ゼ

「何だ、あいつは・・・？」

「インベーターを倒したって事は私達の味方？」

『フ・・・』

突然現れた紅いダンクーガに朔哉が言うようにその正体もわからない事から警戒してしまうがくらが言うようにインベーターを倒したところから味方ではないかという意見もあったが、その意見は紅いダンクーガがダンイーグルに攻撃を仕掛けてきたことで違うことがわかった。

「あたしを狙ってきた！」

「どうなってんだ!? インベーターと俺達の両方と戦うつもりかよ！」

インベーターを襲ったかと思えばこちらにも攻撃を仕掛けてきた紅いダンクーガの目的も分からず朔哉は思わず叫んでしまった。

「気をつける、チームD! あの機体、ダンクーガノヴァと同じジェネレーター反応がだ！」

「え．．．！」

「じゃあ、あれも．．．ダンクーガ．．．！」

紅いダンクーガを調べていたクロウはあの機体から葵達のダンクーガノヴァに使用されている特殊なジェネレーターと同じ反応があることが判明し、葵とジョニーたちチームDは目の前にいる紅いダンクーガが姿を模しただけのものではなく自分達と同じダンクーガであることに驚愕した。

『ならば、あいつの相手はお前達に任せる．．．！』

「相手の正体もわからないのに危険だわ！」

ゼロは紅いダンクーガかダンクーガノヴァと同じジェネレーターを使っていることからチームDに紅いダンクーガの相手をするよう指示を出す、スメラギは相手の正体も実力も分かっているのにチームDのみに相手をさせることは危険だと判断しゼロの指示を否定する。しかしそのスメラギの意見を葵自身が断る。

「大丈夫よ、スメラギさん。どうせ、あいつはあたし達を狙ってくるから」

「インベーターを片付けたのは、その邪魔になるからだけのようね」

「おもしろえー! ケンカを売ってんなら、買ってやるぜ！」

「そうですね。やられっぱなしというのは性に合いませんしね」

『決まりだ。各機はインベーターと次元獣の相手に集中、紅いアンノ

ウンはチームDに任せる!』

葵を筆頭にチームDのメンバー全員が紅いダンクーガと戦う気のように闘志を漲らせていた。その姿にスメラギは反対することも出ず、ゼロの指示通りチームDだけで紅いダンクーガの相手をするこ
とになった。

「いくわよみんな!」

「ええ!」 「おう!」 「はい!」

「超獣合神!!」

「[[ダンクーガノヴァ!!]]」

葵の掛け声を合図に四機のVBMは超獣合神し、一機のスーパーロボット『ダンクーガノヴァ』へと変わった。

『ダンクーガノヴァ・・・』

紅いダンクーガのコックピットの中でパイロットの人間がダンクーガノヴァの姿を見るとその名を呟いていたが、当然の事ながら葵達にその声が聞こえるはずもなく葵たちは紅いダンクーガに向けて攻撃を放とうとする。

「まずはアレを撃ち落とします!ミサイルデトネーター!!」

ダンクーガノヴァの腰の左右のランチャーを展開すると多連装ミサイルを紅いダンクーガに向けて放つが紅いダンクーガはミサイルの合間を潜るように避けた。

「次はコイツだ!ブウウスト! ノヴァ! ナツクルウウツ!!」

ミサイルをかわしている紅いダンクーガに照準を合わせながら右腕を向けると、ロケットパンチの要領で右拳を撃ち出した。ミサイルをかわしていた紅いダンクーガはブーストノヴァナツクルが迫ってくるのに気づくと回避は間に合わないと感じたのか二本の剣を取り出したかと思えば二本の剣を連結させそのままブーストノヴァナツクルの軌道を逸らして防いだ。

「あれって断空剣!」

そして紅いダンクーガは二本一対の剣を連結させた『ダンブレード・ツイン』を握ると一気に加速してダンクーガノヴァへと接近してきた。

「そつちがその気ならこつちもやってやるわ！断空剣!!」

戻ってきた右拳で左足から射出した断空剣の柄を握ると刀身が生え、そのまま向かってくる紅いダンクーガのダンプブレード・ツインを迎え撃つ。

「あんだ、何者なのよ？ケンカを売るにしても、最低限の礼儀つてのがあるんじゃない？」

『……………』

「黙秘つてわけね…。だったら、悪いけど、少しばかり痛い目に遭つてもらおうわ！」

断空剣とダンプブレード・ツインが鏝迫り合っている中、葵は紅いダンクーガのパイロットに対して葵達チームDとダンクーガノヴァを襲ってきたのかその理由を尋ねるが相手のパイロットはそれを無視する。葵はそんな紅いダンクーガのパイロットに対してそう言うように断空剣を握る力を強め、紅いダンクーガをそのまま勢いよく弾き飛ばした。そして弾かれた紅いダンクーガはその勢いを利用して上空へと飛び上がって距離をとると体勢を立て直し落下する勢いを利用して再びダンプブレード・ツインでダンクーガノヴァを斬り飛ばす。

「くっ、やってくれたわね！だったら次はこれよ！」

「断空砲、アルティメットフォーメーション！」

「脊椎反射システム・・・コネクト。マキシマムレベル！
シューーーーーー！！！」

葵は断空剣を収納するとジョニーの掛け声と共に両手を収納して砲身をせり出した腕部キャノン、背面に装備したキャノン砲『アブソリュートキャノン』。そしてミサイルデトネーターを展開するとくららが紅いダンクーガに照準を合わせるとそのまま発射のトリガーを引き、一斉射する。

紅いダンクーガはミサイルデトネーターをかわした時と同じように回避行動をとるが、全てかわしきることが出来ず翼に攻撃が掠めたことで体勢が崩れた。

「よし…この調子で一気に攻めるわよ!!」

葵はダンクーガノヴァの背中ブースターを噴かせると地面に降

りた紅いダンクーガに接近する。距離を近づけたダンクーガノヴァは再び断空剣を取り出すと紅いダンクーガに斬りかかろうと一気に近づこうとするが、ダンクーガノヴァの後方に現れたインベーターが襲ってきたことによつてそちらに気を取られたその一瞬の隙をつかれ紅いダンクーガは距離を詰めるとそのままダンブレード・ツインでダンクーガノヴァに斬りかかり、ダンクーガノヴァは地面に倒れ伏してしまった。

「こんつのー」

もう一度紅いダンクーガに攻撃を仕掛けるために地面に腕をつけ脚に力を込めダンクーガノヴァを立ち上がらせようとするが、立ち上がる隙すら与える気はないのか紅いダンクーガは地面に降り立つとダンクーガノヴァを見下ろし、ダンブレード・ツインの剣先を突きつける。もはやこれまでかと葵達は迫ってくるダンブレード・ツインと紅いダンクーガを睨みつける事しかできなかつた。そう思っていたその瞬間――

『つたく、見ちゃいられねえぜ！』

そんな男の声が聞こえたかと思えば、ダンクーガノヴァの後方に現れたインベーターを倒しながら現れた紅いダンクーガともダンクーガノヴァとも異なる新たなダンクーガに似た翼のある黒い機体は紅いダンクーガに迫るとその身体を断空剣で斬りつける。

斬られた紅いダンクーガは斬られた衝撃によつて機体を損傷したのか機体のあちこちから火花を散らしていた。

『くつ、これ以上の戦闘は無理かつ！覚えていろ、ダンクーガ：！！次こそは私とR―ダイガンで貴様達を倒してみせるっ!!』

紅いダンクーガのパイロットは機体の状態からこれ以上の戦闘続行は不可能と判断して戦場から離脱していった。葵達は去つていく紅いダンクーガ――R―ダイガンの姿をただ黙つて見ることしかできなかつた。

「R―ダイガン・・・それがあの紅いダンクーガの名前・・・」

葵は戦場から去つていったR―ダイガンの消えていった方に目を向けながらその名前を呟くと負けた悔しさから自分でも気が付かな

いうちに操縦桿を握る手に力を込めるのだった。

「それよりどうなってるんだ、これ……?」

「紅いダンクーガ……Rーダイガンを倒したのもダンクーガなのか……」

「あのダンクーガの剣……私達のダンクーガと同じ断空剣だったわよね……」

朔哉はRーダイガンにやられるかと思えばまた新たに現れたダンクーガに似た機体によって助けられた今の状況に呆気に取られ、ジョニーはRーダイガンを倒したあの黒い機体もまたダンクーガノヴァと同じダンクーガなのか考えていた。そしてくらは黒い機体が使用していた剣がダンクーガノヴァの使用している断空剣と同じものであることに驚愕していた。

『ま……とりあえずの役目は果たしたか。帰ったら、お小言が持つてるだろうがな』

「待って……! いったいあなたは何なの!?!」

黒い機体のコックピットの中で男はそう呟くとRーダイガンが去った方とは反対の方へと機体の顔を向けると同じように戦場から去ろうとする姿に葵は思わず声をかけてしまった。その声に反応したのか黒い機体は足を止めダンクーガノヴァに顔を向けた。

『そうだな……。勝負の切り札……最後のダンクーガとも呼んでくれ』

「最後の……ダンクーガ……」

『じゃあな!』

黒い機体——最後のダンクーガと名乗るその機体はのパイロットである男は機体の名前を語ると葵は復唱するようにその名を呟くと黒い機体は戦場を去っていくのだった。

「行っちゃった……」

「最後のダンクーガ……。ファイナルダンクーガとも呼ばいいんでしょうか……」

「どういう意味だよ、最後ってのは! 俺達にとどめでも刺すつてのによ!」

「わからない……。あのRーダイガンっていう紅いダンクーガを本気で倒す気もなかったみたいだし……」

「Rーダイガンとファイナルダンクーガ……。全て謎ね……」

Rーダイガンとファイナルダンクーガというダンクーガノヴァとは異なる2機のダンクーガたちの存在と何のために行動をしているのかその目的も分からないために困惑しながら去っていった方向を見るしかできないでいた。

そしてダンクーガノヴァたちの戦闘が終了したのと同じようにZEXISメンバーたちもまたインベーターと次元獣たちの殲滅を終了させていた。

WLFとの戦闘に続いての次元獣とインベーターとの連戦に疲労していたZEXISメンバーは戦闘が終了した事で気を落ち着かせていた。

「……………」

戦闘を終えた刹那はガンダムエクシアの武装を収納すると戦場を離れると避難していたマリナの前まで移動した。

「ソレスタルビーイング……!」

「聞こえるか、マリナ・イスマイル?」

「刹那・F・セイエイ! 本当に……本当にあなたなの!?!」

マリナは前に現れたソレスタルビーイングのガンダムであるガンダムエクシアに驚くが、それ以上に刹那が本当にソレスタルビーイングのメンバーでガンダムに乗っていたことに驚きを隠せないでいた。

「あの男……! 何をするつもりだ!?!」

「黙って見ていろ」

前回と同じように自らの顔を晒している刹那に苛立ちを隠せないのかテイエリアはガンダムヴァーチェをガンダムエクシアの元に向かわせようとしたが、ヒイロがそれを止める。

「お前にしちや、随分と親切じゃないかよ」

「……自分でもわからん……」

「え?」

「あいつも……刹那・F・セイエイもリリーナと同じだ……」

デュオがテイエリアを止めたことを意外そうに言うが、ヒーロ自身も何故そうしたのか分かっていなかった。ただ、刹那とリリーナ考え方は違えどどこかに同じように思えたから行動したようだ。

「マリナ・イスマイル、これから次第だ。俺達も、この国も」
「……………」

「戦え、お前の信じる神のために」

「刹那！」

「各機は速やかに後退を。合流地点はポイント1710よ」

「俺は……ガンダムになる」

刹那はマリナに対してアザディスタンもZEXISもこれからの行動によってその存在は人々に評価されるものと告げ、そのために戦えと言った。マリナは刹那の名を呼ぶがそれよりも先にスメラギが全員に後退の指示を出したことでZEXISの機体と戦艦はそれぞれルート別に後退し始めたために刹那もマリナに何も答えずに後退するのだった。

「ソレスタルビーイング……刹那・F・セイエイ……」

マリナは後退していくZEXISと刹那が乗っているガンダムエクスシアの姿が完全に見えなくなるまでその姿を見続けるのだった。そして同時にある事を決意するのだった。

後日、マリナは再びアクシオン財団代表のカルロス・アクシオン・Jrとリモネシア共和国の外務次官シオニー・レジスと会談を行い、以前話していたリモネシア共和国との同盟並びにアクシオン財団の資本導入の件についてマリナは最良の方法を検討するためにももう少し時間が欲しいと考え、2人にその件を断る事を伝えた。

WLFとZEXISの戦っている姿を見たマリナは確かに2人の案を受け入れればアザディスタン王国は豊かになるかもしれないが、圧倒的な力によって今の状況を一変させてもその事に納得できない人間によって新たな争いが必ず起こってしまうとマリナは考えていた。だからこそアザディスタンの全ての民が納得する方法でこの国を変えていきたいとマリナは思いそのために行動していくつもりだ。

そんな今の世界の情勢を理解せず、そんな考えで女王として国を導

こうとしているマリナの浅はかさにシオニーは怒り、二度と支援の話をしないと部屋を後にしカルロスもその後が続くのだった。

マリナは自分の判断が本当に正しかったのか、これから先本当に自分はこのアザデイスタン王国の王女として国民を守ることが出来るのか、そして遠い地で戦っている刹那・F・セイエイのように自分も戦うことが出来るのか様々なことに不安を感じるばかりだった。

この時のマリナの選択が正しかったのか間違っていたのかまだ誰にも分からない。しかし、それでもマリナはこの選択を間違いで無いものにするために行動を続けなければならないのであった。